明治三十五年十月五日發行

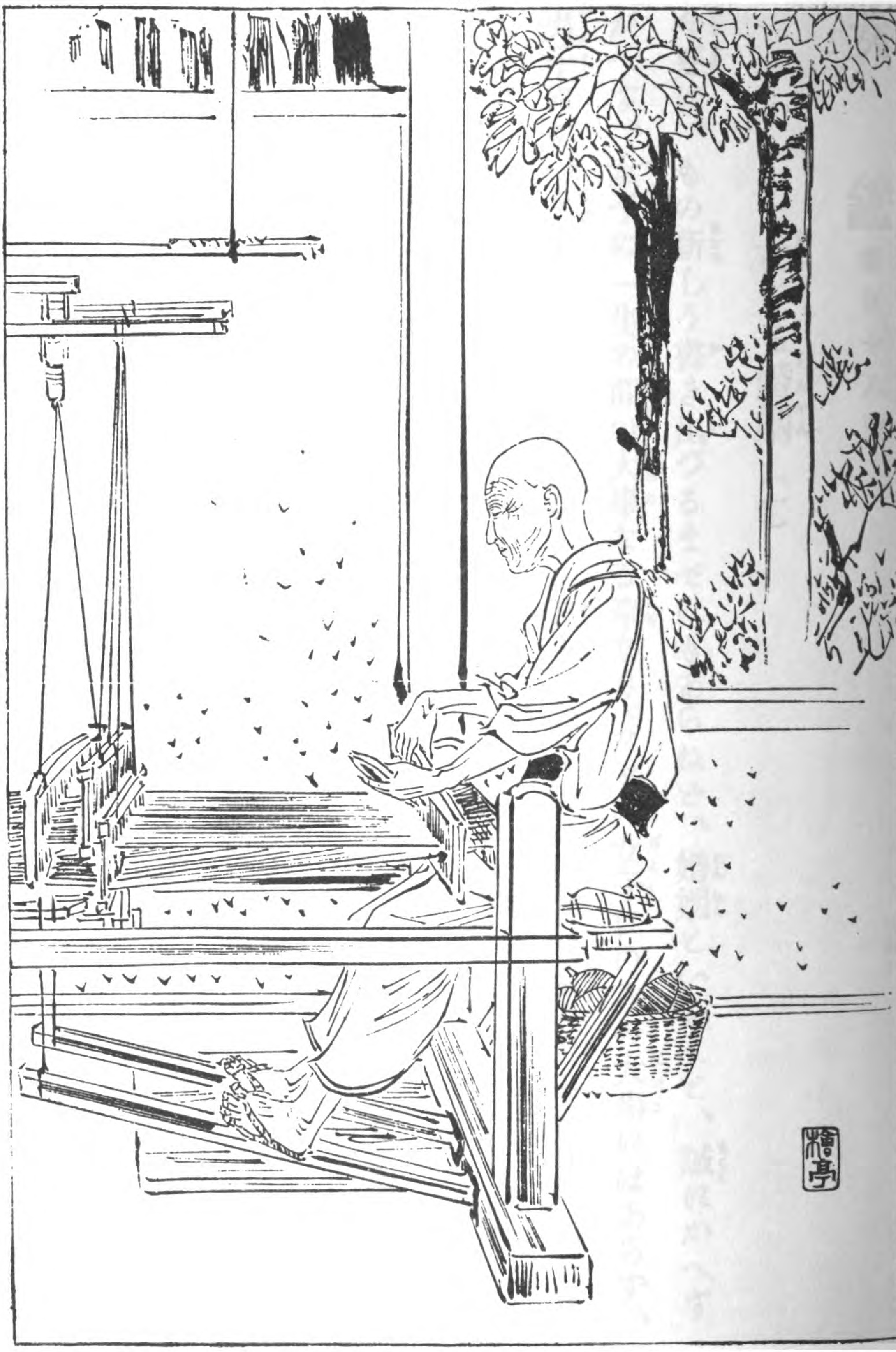
女鑑



東京國光社

女鑑第百十八號 目録

妙喜尼



女鑑　第百十八號

女子と婚姻（一）

今更に、もの新しう書き出づるまでにもあらねど、婚姻といふこと、誠にかへすがへす、女子の一生の間の大事なる事なり。たゞに女子にのみの大事にはあらず、男子にも、本より。やがて、誰れも彼れも、人たる者の一生の大事なりかし。されど、こゝには、殊更に女子の爲めにいはむとするなり。それ、おのれがつとめなればなり。

婚姻の大事なる、げに、女子が一身の幸不幸にもかゝはることたるは云ふまでもあらず。延いては、一家の幸不幸まもわたり、なほ進みては、一國の幸不幸にも及ぶべきなれば、ゆめ忽にすべからざる大事にこそあなれ。げに婚姻の大事なる、世人、皆、これを口に云はざる無し。されど、そを實際に世人の行ひゆく有樣を見るに、大事なれば極めて愼重に行ふべきなるに、さは無くて、やゝ輕々く

しく、無造作に行ひゆくけしき見ゆ。これを行ふ儀式は愼重なるも、これを行ふ意志は、大に輕卒なる如し。儀式は末にて、意志こそ本なれ。末の儀式の如何に愼重なればとて、本の意志の輕卒ならむには、何の甲斐もあらぬなり。さればにや、これが爲めに、あさましき逆境に陷り、くちをしき悲嘆の淵に沈み、幸福を作るべき婚姻が、なか〳〵に不幸の種と成りはつる如き例、今の世の女子社會に少からず。

まづ、女子は、婚姻を爲す本旨、やがて、人の家に嫁するなる理由を、あかと明かに知らざるべからず。女子が嫁する本旨といふは、もとよりたわけたることにはあらず、一身の幸福、一家の幸福、國家の幸福を計らむとするなり。則ち、斯くて、善良なる母となり、善良なる一家の保存、善良なる國民の保存、善良なる社會の保存を計らむとするものなり。それが女子の嫁する本旨、且つは、女子の最後の責任にて、よくそれを遂げなば、孝女ともなり、貞女ともなり、忠婦となり、義婦となり、誠の女子とは成るなり。

さるに、世の人を見るに、さる深き思慮はあらずして、たゞ花齢に成りたるが故に嫁すべしと、親も命じ、人もすゝめ、自らも志すのみなるが如く、甚しきはいやしき私欲に飽かむ爲めばかりに出るが如きもあり。これ、大に誤れる所なり。さる淺はかなる理由、たわけたる旨趣によりて、婚を結ぶが故に、婚する意志、極めて愼重ならず。堅固ならず。徒らに花齢の移り行くをのみ恐れ急ぎてなほざりに婚を取り結び、徒らにわがいやしき欲心に誘はれて、猥りに夫を定むる如くなれば、結婚、いかでか堅固なるべき、岸に寄る水泡、葉末に結ぶ露ばかりのはかなくもろきものにて、立つとしもなき波、ふくとしもなき風にも、忽ち亂れ、忽ち散り、結合離散定めなく、かくて一生の不幸に陷るもの少からざるは、皆其の本旨の眞實ならざるが故なりかし。

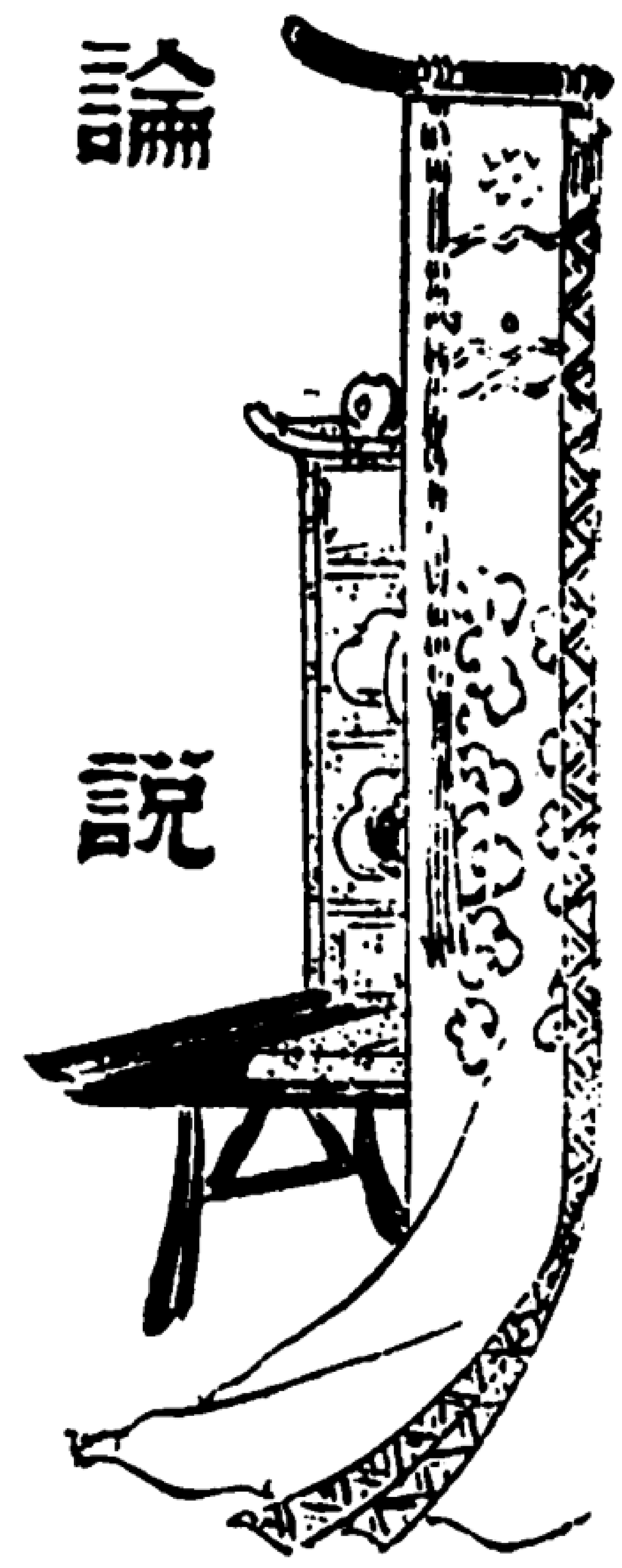
さて、次に必要なる心がけともいふべきは、女子の嫁するは、何に嫁するなるかといふ事を明に知るべきことなり。そは、新しくいふまでもあらず、則ち、女子の嫁するは、やがて、夫たる人に嫁ぎて、所謂夫婦一體と成るものなり、されど、

往々世の中には、あやしき言をいふあり。彼の人は財産ある故に、其の財産に嫁するなり。彼の人は學藝ある故に、其の學藝に嫁するなりなどゝ、わが娘に解く親あれば、自ら辨ずる女子あり。かゝる心もて結べる婚事の、いかでか美はしかるべき。たまく其の財産に變事起る時は、夫婦の間もやがて變り、其の學藝の好奇心。飽く時は、其の良人もまたうれしからざる者と成りはて、終ゞ美しき夫婦の一体を結び遂ぐること能はずして、一身の不幸、一家の不幸、一國の不幸ともいふべき淵に沈み果つるなり。

女子が、わが良人たらん人を擇ばむには、或は其の才のみを愛し、或は其の學をのみ慕ひ、或は其の藝をのみ喜び、或は其の品をのみはしみてなど、さまぐの角々を取りて、わが嫁すべき家、嫁すべき人を定むるならむ。されど、うはたゞ良人とすべき人を定むるたよりに過ぎず。嫁する以上は、其の才にのみ、其の學にのみ、其の藝にのみ、嫁するに非ず。又其の品にのみ嫁するに非ず。則ち、わが世わが夫たるべき人に嫁ぎて、而して、うるはしき一體の夫婦となり、うるはし

き家庭の父母となり、うるはしき一家の保存者となり、うるはしき一國民の保存者たるべきなり。斯くありてこそ、皇國の一女子たる任務を盡くせるなれ。斯くありてこそ、結婚の本旨を得たるなれ。

この二點は、まづ令孃がたゝ注意せむと思ふ所にして、なほ結婚の事につきて、いはまほしき事多し。そは次號に。



論説

家庭の敎育に就て一言す

宮地嚴夫

敎育は人を養成するが爲に、最も必要なるものにて、決めて等閑に附す可からざるは、今更に云ふを待ざる所なり。中に就ても特に注意を要す可きは、家庭の敎育に在り。其故如何とならむ、凡幼年者の、未だ父母の手を離れざる間は、如何なる學校に入學

せしむるも、學校に在る時間は短かくして、家庭に在る時間は長く、一日の中十分の三分は、教師の教授を受るとするも、七分は父母兄姉の左右にあり。是を以て學校にて如何なる良教授を受ると雖も、家に歸りて家庭の教育無き時は、所謂一日煖めて、十日寒すの喩へと同じくして、學業の成就すべき道理無きは、自らに明白なりと云ふべし。家庭教育の等閑に附すべからざること實に斯の如し。仍て今其家庭の教育に對する注意を述べん。

抑ゝ家庭の教育たる、一家は所謂一學校にして、父母兄姉は、其子女弟妹に對する教師たり。故に父母兄姉の坐作進退は、總て子女弟妹の摸範となり、其笑談遊戯に至るまでも、亦皆其子女弟妹の脳裡に感染せざるは無し。誠に愼むべきは、人に長上たる者の行狀なり。然れど家庭の教育に於ては、父母兄姉平生の言行、皆子女弟妹の爲には、自然の教授となることなれど、之を愼みだにすれば、夫にて事足るものなりと思ふは、猶完全なる家庭の教育とは云ふ可からず。此には種々の方法もあり、注意も要すべき中に、近來考へ起せる、一の家庭教育法あり。其は通常の人の多くは、何の心も無く、害有て益無き雜談に空過するか、若くは心置無きに任せて、入ざる詞咎めなどを爲し、果には喧嘩口論などするに至り。知らず識らずの間に、其子女弟妹に、極めて悪風を

見習はしむるかするを以て、常とする時間を轉じ、之を家庭敎育の時間に利用するの法なり。凡此法たる、甚だ簡便なるものにして、其身分の如何に拘はらず、貴賤貧富を論せず、誰にても行ひ得らるべき、家庭の敎育につき、最上の良法なりとす。

扨、其時間とは、先一日の中に於て、朝晝晩と毎日必ず三度の食事を爲すは、孰れの家にても、大抵異なること無し。此食事の時たる、家々に依て、大同小異無きに非ずして、或は家族打揃ひて食する家も有れど、又家内思ひ思ひに食する家も無きに非ざる可きも、前に云へる如く、多くは無益の雜談を爲すか、若くは入らざる詞咎め等を爲し、果ては口論等を爲す向も無きに非ざるは、吾人の折々目擊する所にして、此は甚だ宜しからざる事なり。因て吾人は、此食事の時間を以て、家庭敎育の時間と爲し、食堂を以て、家庭敎育の敎場に宛んと欲するものなり。其故は、凡人類たるものの特に親睦和合して、互ひに衷情を吐露し、交際の最も親密を極むべきは、食事を共にする時に如く者無し。是を以て同席して談話をのみ爲したるは、縱令長談を爲したりとするも、動もすれど、其人を忘るゝ事無きを保し難きに、苟も一たび飲食を共にしたる人は、縱令其時間の短かゝりしとするも、遂に其人を忘るゝものに非ずと云ひ、且夫婦婚姻の時の如き、其他何かの契約を爲す時の如きも、多くは飲食に依て、其禮儀を

整へさるもの無く、又時として懇親の情誼を厚からしめん爲に、特更に宴會を催ほして、其人を招くが如きも亦皆飲食の人をして懇親和睦ならしむるものたるを、證明するものに非ずや。

然れど、吾人は、此毎日朝晝晩と三度に必ずある、食事の時間を以て、之を家庭教育の時間に宛て、食堂を以て、之が教場となし、一家族打揃ひて、共に娯樂の意味を含み、飲食しつし交情親密和氣藹々たる間に於て、彼有害無益なる雜談、入らざる詞咎の如きは、縱令一時の興味に資し、一笑の戲言に附すべきものと雖も、一切堅く之を禁じ、其代りに、或は忠臣、孝子、節婦、義僕等の談、又は天文、地理、歴史、衛生、理化、算術、貿易、實業、經濟、政治、宗教等の事より、時勢の變遷其他何にても、知育、德育體育の爲に、之に聞しめて、有益なることは、細大と無く之を話し、面白可笑き間に於て、之を注入するを以て、子女弟妹の會得することと極めて平易にして、彼教師に受くる所と相發して、益を得ること最も大なるものなり。加之先膳に向へど箸の取方より、飲食の致し方、挨拶の爲し方までも之を教へ、平生に於て、行儀作法を暗んせしめ、毫も痛苦を感ずる事無く、少かも頭腦を傷めまめすして、知らず識らずの間に、行儀禮節を覺えしむ。其益を得ること、實に大なるを知るべし。（未完）

女子教育一班（二十六）

三輪田眞佐子

されど、女子は普通に於て如何なる智識を養ふべきかを研究せざるべからず。世人往往、女子に自活の道を與ふる智識を言ふものあれど、そはいみじき誤ならむ。そもそも、普通教育に於て女子を教訓するは、教師、あるは看護婦などの職を得せしめんためにあらず、全く別に重大なる責任を果さしめんためなるものを、さなりと知らざるものは、自ら思へらく、男兒を教育すれど、官吏とか、實業家とか、相當の職業を爲すに足る望あるを以て樂しかれど、女兒を教育するは、教師の資格、あるは刺繡、裁縫など二三の技藝を得るに過ぎざれど甲斐なきことにてろど。思ふに、近頃女子教育の振はざりしは、かゝる父兄の感情は主なる源因の一となりたりけむ。凡そ我が國今日の情態より見れど、女子が教師とあり裁縫家となりて自活するは、普通教育最終の目的にあらじ。故に、女子を教育して自活せしめむやと企つる父兄は、唯失望を以て終るのみかは、將にかゝる妄想の結果、はしきよし孃をして獨立を思ひ立ち、さながら荒磯波に浮沈する一葦の孤舟に乘る心地もて、五十年の星霜を送らしむるに至らんかし。いざ、普通教育に於て目的とすべき智育の要領を左にものせん。

第一、人類としての智識　熊澤了介翁曰ひけらく、君子の意志は內に向ふ、己獨り知るところを愼みて、人に知られんことを求めず、天地神明とまじはる、その人がら光風霽月の如しと。誠に人は智識なきときは、天地の眞理を悟り、淸淨高雅の生活を爲すこと能はざるのみかは、人生の目的をだに會得し能はざるを以て、徒ら名達を事となし、榮華を恣にするをつとむるため、眞の幸福名譽、あるは、富貴などを考へずして、遂に子孫永遠の計を爲し能はざるは更なり、夏は冬を忘れ、今日は明日を思はざるなど、さながら禽獸と撰ばざる觀念を懷きて、世に處するものあり。孟子曰く、智者に惡む所は鑿つが爲めなりと。人類としての智は、天地神明と交るためなり、豈に私智を事とせんや。

苟も人類の本面目を有たんには、道の善惡、義の正邪及び理の眞僞を知るのみならず事の利害さへ考へざるべからず。從ひて此等を判別する智識なかるべけんや。例之ば常盤御前か貞節を破る罪と、三子をこの世に殘し、源氏の再興を謀る策とを考へて、身を處せし如く、人の一生には、利害を考ふべきもの少からず起らむ、その他、人は衞生上の影響、及び經濟上の結果につきて、利害を顧るべきふしぐ多からむ、されど是非を辨別すべき智識なきものは、（皆人のいのるこゝろもことわりにそむかぬ道を神

やうくらむ)との觀念なきものから、疾病にかゝるとき、醫藥を苦しと斥け、反りて神社佛閣の前なる腐敗せし水などを、あるは口に含み、あるは目にひくなどの迷信ありとかや。甚しきは感情のみに制せられて、利害を解せざる禽獸の情欲に委ねて食ふごとく、疫病のゝちなど、食事に注意すべき時すら、口に適ふ不消化物を滿服するまで食ひ、そがため黃泉に入りて呼べども歸らざる客となるものあり。亦經濟上につきても、抱腹絶倒するに足ること多しとぞ。わきてこれに類する愚昧のわざは、無學の婦女に多からんを以て、一般家族の不幸を招くこと少からざるべし。

なは、人の人たるに耻ぢざる生存をなさんとならば、衣食住に意匠なかるべからず、將た雅趣あるべきなり。すなはち動物界に於て、唯人は食ふに禮法あり、調ふるに料理あり、家庭も身分に應じて、制度定り、衣裳も單に寒を妨ぐ爲ならで、その形ろの色、各意匠を用ゐざるはなし。雅趣あらざるはなし。かゝる意匠及び雅趣につきての智識を養ふも、亦人類の本分を盡すため肝要なり。刺繡圖書及び割烹は、かゝる智識を養ふためならむ。などか遊怠のためならんや。

元來人類は孤存すべき動物にあらずして、群居以て有無相辨じ、緩急相助くべき關係あるものあれど、互に平和の交情を全うするのみならず、生存競爭なる風潮に襲はる

るも、世の常なれど、蒼浪の水清きは以て我が纓を洗ふべく、濁らば以て我が足を洗ふべしと、歌ふ必要も起らんなれど、和して同せず、所謂世と推移する處世の智識を養ふことをも怠るべからず。されどおのれは詐術權謀巧に世を弄ぶ浮游の族に伍せよとにあらず、敢て正道を守りね、唯かたくなゝる行に倣らはずもがなとこそ。

なほ、完全なる人類となるには、進歩するに足るへき天賦の特質を助けて、開運をつとめざるべからず。例之ば去年の花は、その色香今年のものに異ならず、當時の鳥はその鳴聲往時のものに等しからむも、人智は月日と共に進歩すべきものなれど、進歩の基となる學術を修めざるべからず。わきて人類には靈妙なる天性あるを以て、單に珍味の口腹に飽き住宅の身體に適ふを目的とすべきにあらざれど、秋の紅葉、春の烟霞を見るにつきても、焉ぞ一片の風情なかるべき。こを以て、一般女子も、多少の文學思想を人類として養ふべきものぞかし、日頃しき島の道をたどる女子多きはめでたきことにこそ。されど財寶のみの尊を知りて、人類の尊を忘れたる輩は、文學などを無益のものと思ふめり、あはれひがことにあらざるか。

凡そ普通に人を敎育する所以のものは、人類として天地に耻ぢざる德を養ひ、智を積むために外ならず。かの、人は萬物の靈といふ言の葉は、單に德あるのみならず、智さへ

ありて、造化の恩惠を有益に利用し、動物界に於て、最も有道高尚の生存をしてこそ、名實相適ふものならむ。今日普通教育に於て、讀書博物數學等、あるは歷史など、多の課を學ぶは、全く人類として、生存するに必要なる智識を得るために外ならず。

史談



妙喜尼　　鹽井ふく子

忍堪は、己を守り、人を制するに、片時もかくべからざる要楔なり。人間一生の身の守り、太刀、劍、弓箭、たて、よろひ、かぶと、何はあらずとも、はた力も術も何も要せず、たゞ此の忍堪の力のみつよく、堅くだにあらむ、百萬の大敵もれかす事は能はざらん。古の大事をなすもの、必ず人に勝れたる節ありと云ふも、たゞ忍び難きを忍びたればなり。高祖が世をとりし、項羽が天下を失ひしが如き、力にあらず、氣にあらず、たゞ忍ぶと忍び能はざるのみなる事は、言をまたずして知らるゝ所ならずや。

されどかしこきものも、心よきものも、たゞ一朝のいかりを忍ぶこと能はずして、身をあやまり、家を亡ぼせしためしいと多し。世を治め、國を治むるの男子はさておき、よく家を治め、人ををさめ、身を治めて、一家の和合長久をいのるの女子は、必ず必ず忍堪の力をゆめたゆめまじき事なりかし。

むかし豐後の國に、妙喜尼と云ふ尼ありけるが、もとは、その國の速見郡鶴見村と云ふ處に住みける人の妻にて、男子も一人さへまうけたる身なれど、不幸にして、夫にはやく別れ、かなしみまどふほどに、ふきすさぶ嵐はげしく、つぎて、また一人の男子も秋の木の葉と散りはて、かなしみにかなしみを重ねて、泣きまどふ中にも、なほ殘り居る舅姑に事ふる事は怠らず、夫のありし世にもまさりて、いとまめやかに孝養至らぬくまなく心の誠をつくしてつかへんとすれど、之もまたいははにあらず、霜に雪にたへねずして、皆冬野の草と枯れはてしかなしさ。ひとり枯れ〳〵殘されし尼の心の如何ばかり心細く、さびしく、かなしかりけん。げにおくれて果敢なき命ながらふるよりは、など、齡を人にゆづらざりけんと、聲も枯れ行くばかりに泣きあこがれながら、つく〴〵と思ひめぐらすに、家も貧しく、親族もまたあらねど、今は尼となるにしかじと思ひ、終に髮を剃り比丘尼となり、日夜唱名おこたらず、それよりは、か

へらぬ事を思はず、うきを云はず、造次起臥事ある毎に、必ず佛恩なりと稱して、如何にたへがたき憂患に逢ふも、いさゝかもその處を去らず、また如何に人のはづかしむるも、れとしむるも、笑ふも、そしるも、あなどるも、すこしも恚らず、何事もうけがはぬに、ある人、尼に向ひて云ふやう、もし、人ありて、御身に水を注ぎかけなば何とかし給ふ、まさかに恚り給はではれくまじと問ひかけして、尼、ほゝ笑みて答ふるやう、いな不德の身、何をかいかり侍らん、暴雨にあへると思ふのみと云ひけるに、さらば、もし、人ありて御身を故なくうちきずつけなど、其折りは何とかし給ふ、さりても憤り給はずや、と、またも人のとひかへすに、何の何の不德の身、何をか恚りなど致さんや、あやまちて瓦の落つるにあへりと思はんのみ、我れ佛の道に入りてより、たゞ一重にその道をきはめ、その德をきはめまほしく思ふのみ、いかで〳〵世の人と爭ふいとまなどのあらんやと云ひけりとぞ。かやうなる心にて、常に人々につきあひければ、木のはしのやうに思ひあなどりし人々も、いつしかありがたき人と稱ふるやうになりぬ。

かくゝきをしきともせず、世を過ぐしける程に、ある時、くらき夜に、ある寺に詣でたりしに、寺僧のいそがはしく走り來るに行きあひ、あやまちて蹂られ、息もほとん

どたゆるどかりになりけれど、僧徒どもうち驚きて、たすけ起し、さまぐ〵いたはり、漸くにして人心地つきしに、尼は例の佛恩〳〵と稱ふるに、僧徒どもをかしがりて、かかるあやふき時にも佛恩のいづくにあるにやといへど、されどよ、幸に即死せざりしこそ、誠にありがたき佛恩にはあらずやと云へりとぞ。

またある時飯を炊ぐとて、あやまりて釜なる沸湯に手をやきて、いたくなやめる頃にも、佛恩〳〵と稱す、之を聞くものをかしがり、苦痛たへがたき折りから、何の佛恩かあるべきと笑ふに、尼の云ふやう、幸に我れ未だあしき事をなさゞれど、地獄におちいるうれひなし、されど地獄の苦患にくらべど、かどかりのいたみは、物ならず、數ならず、これ我が佛恩のます〳〵廣大無邊なるを知る處なりと云へりとぞ。

性質いとつゝしみ深うして、世をはなれし後にも、なほ己れのすぎはひを忘れず、自ら耕し、自ら織りて、衣食にあて、いさゝかも余財あるときは、三寶に供養し、米錢衣服、未だかつていさゝかも人に乞ひし事なく、人或は尼に贈りものすれど、必ず之、に報ひざるなく、また道にして事あるときは、世の人とはかはりて、必ずねむごろに尋ね、力をつくして人々を救ふ事多かりき。

年八十を踰ゑて身體なほすこやかに、佛を供養するの餘時に、織る處の布、半日がほ

ぞに、一丈二尺に及べりと云へり。近郷の人々、皆その德をしたひ、篤實をめですと云ふものなかりしが、遂に天明と云ふ年號の中にみまかりたりとぞ。

此尼かばかり人々に稱せらるゝやうなりしも、いかで佛恩などの致す處にあらんや。たゞ堪忍の至す所なるのみ。そも世の中のやんごとなき妻となり、主母となりて、家をも人をもをさめんと思ふ婦女たちは、此尼が半ばをだに、堪へ忍び、心より恚り恨みを去りて、信實に人に加へばもとより岩木ならぬ人心、いつかは必ずその德になづくやうになるものぞかし。必ずしも尼の如く頭をそろすを要せず、たゞ尼が忍耐心は學びて餘師あるべしと思ひてかくなむ。

中野小竹　　安藤紫光

時勢の變遷挽らすに由なく、鳥羽伏見の一戰に朝敵の汚名を負ひ、空しく涙を呑みつゝ、主家と滅亡を共にせる會津の藩中、あはれ女ながらも、君侯の難余所に見すぐし難しと、纖手薙刀を揮ひて、命を毫毛よりも輕くせし一女子あり。名は小竹。會津藩士中野平内の長女。

小竹は德川氏の末、嘉永の三年、花さき匂ふ三月の頃、江戸和田倉の藩邸に生れぬ。未

垂髫の頃より心ざまさかしくて、身のおもむけなど、世の常の兒とは月鼈も啻ならず。げにや、群鷄中の雛鶴、巣ごもれる中より既に心高さは知られぬ。五ッ六ッにもやなりけむ程、母なる人小倉百人一首を口づから教ふるに、暫時の間によみうかべて、一文字をだに違ふることなかりきとか。斯る女を持ちたる父母のうつくしび、そもいかなりけむ。されど、その親も亦徒にうつくしむのみには有らざりけり。教へずはいかで親とはいはれうべきと、豫て同じ藩に文武の聞え高き赤岡大輔といへるを師と仰ぎて、讀書習字のことを學ばしめぬ。天性物事に敏き小竹、かゝる方には殊に速なれど、師なる人もいたう喜びて、おのが子ともなさまく思ひよりぬ。小竹十四五にもなれど、はや經史も一わたりは讀みて、和歌さては詩までもいづれいたらぬ隈なく、稍年長けては、薙刀の術に志して、こもいとすぐれたりけり。ある時某の侯に召されて、御庭にその業仕うまつれることありき。美しきことは花の如く、清らかなることは月の如き姿の女丈夫か、秘術をつくせる武藝にはいづれ驚かぬ者なく、かぐろき髪に風をうけ、雪の如く白き優腕もて、或は水車の如く、或は電光の如く、薙刀を扱ひたる早業には誰も感せざるはあらざりきとなむ。あはれいかばかりなりけむ。

小竹妹あり。お優といへり。是もみめ形うるはしく、文武何れの道も姉に似かよひた

りき。共にその母は武藏の國忍の殿に仕へ奉れる大竹某の女なり。

其の頃、世の浪風たち騒ぎて靜ならず。慶應の三年も纔にくれて、四年は明治の元年と改められぬ。春とはいへど、人心いよ〵騒しきに、やがて忌はしき噂は聞えきぬ。會桑の二藩は京師に破れて、世は修羅の巷となれり。中野の家も仕へ奉るは會津の君なり。いかでこの儘あらむと、小竹は母と妹と共に會津に歸り、阿沼郡坂下驛に住居して、近きわたりの童等に讀書習字の道を敎へ、かつは志ある人に薙刀の術など導きつつありけり。斯る程も、主家の事心にかゝりて安からず。便を求めて、その有樣をきくに、いつもよきことは無く、心を痛むること大方ならざりき。若し男なりせばと思ひけむこと、そも幾度。

是より先二月、朝廷にては、有栖川宮熾仁親王を征東大總督となしたまひ、錦旗節刀を授けて、東の方を討たしめたまへり。錦の御旗風にはさやる者なく、江戸の城も四月に明け渡されぬ。慶喜公も水戸に屛居せられぬ。かくて、處々の落武者の輩、皆會津の君を賴みて籠りたれど、そを討たむ爲、諸道の官軍ことぐ〵に集れり。會津藩にては、大君に刀向ひ奉らむは心ならねど、騎虎の勢止みがたくて、防禦の手配をさ〵怠なし。されど、大軍には當るべくもあらず。賴にせる白河口も破れて、八月二十三

日といふには、官軍既に若松城に薄れり。かゝる程、こゝかしこの救の兵未來らず。今日や落ちむ、明日やと、城もいと危し。小竹の父平内は、かゝる時にこそ平素の君恩は報せめ。君の爲、城を枕に死するは、武士の本懐是に勝ることやあると、城中にいそしめり。

かくときゝたる小竹の心、いかでそのまゝにねやはあるべき。屹と心に思ひ定めて、我も女のかよわき身にはあれど、いかで君侯の爲一臂の力を盡さむと、忠烈の心やみ難くて、母に思へる由を語りぬ。母も流石に小竹の母なれど、女々しくはあらず。いざさらむ、我も共にと、十六になりし優を供なひて、母子三人、露したゝらむ薙刀を小脇にして立ちいでぬ。頃しも秋風やう／＼立ちそめて、虫の聲も哀催し貌なり。死を決めたる三人の心、果して如何にか感せし。

德孤ならず、必隣ありとかや。小竹等の住居せし坂下驛の劍客澁谷某、かくと聞きて大に感じ、女のかよわき身もて猶然り、まして我等如き丈夫にして、劍客といはるゝ者をやと、やがて門人數十人と、之を救けむ爲追ひゆきて、高久驛にて及びたり。あはれ、小竹の義烈は人々をも勵せしありけり。又、この高久驛には、同じ藩士平田紋十郎の長女にて、小蝶といへる者あり。是も小竹と同じく、赤岡大輔につきて學べる

者にて、そが養女ともなりて、薙刀の道もいとすぐれたりき。年は二九の花の盛、眉目容貌いと美しかりしが、心ざまさへ人にすぐれて、同じ藩士の女二人と共に、小竹等をむかへてそが連に入りぬ。

その日もやう〳〵暮れて、夕日影わづかに西山の松に殘れる程、高久驛をうちたちて若松城に向はむとす。折柄澁谷某計りけらく、かゝる五十にも足らぬ數もて、敵の中をやぶり城に入らむ事、げに難し。兵寡ならば奇をいたせとは兵略の本文なり。如かじ、夜更けて丑滿の頃、俄に敵の營を脅し、そのあはてふためく間に城に入らむにはと。かくて、ゆき〳〵て、柳橋につきぬる程、既に夜は更けたり。

遙に若松の方を望めば、官軍の大兵は七日町西一里壇に屯し、城をとりかこめるさまはさながら稻麻竹葦の如し。帷幕に植ゑられたる劍戟は、闇にきらめきて物凄く、夜營の篝火は、諸所に燃えて晝の如し。折々きこゆる陣皷は、夜を警むるにやあらむ。陣中寂たる如きは、疲れて眠れるにやあらむ。月すでに入りて、星の光のみ天上に明又滅。時こそよけれと近づきて、澁谷先刀を翳して進む。六女之につぎて、各襷十文字にあやとりて、薙刀を提げたり。さて顧れば、いひ甲斐なき男の輩は、物恐しくや思ひけむ。怯け心やつきたりけむ。大方道より密に逃げて、今猶從へる澁谷門下の士僅

に十七人。總勢合せて漸く二十四人。かゝる小勢をもて、いかで目に餘る大軍を切り拔け得むと、澁谷はやゝ躊躇ひぬ。さるも、我等は死を決めたるものなれど、いかで心を撓めむ。一歩も退くまじと、いきさし厲しき小竹の言に勵されて、急に聲をあげて、敵の幕營に切り入りぬ。官軍の兵は、俄に熟睡の夢破られていかに驚きけむ。素破や敵の大軍ぞ敵の夜討ぞと、其の勢の多寡をも知らず、あわてふためきて荐に大小砲を發せり。その筒の煙のたなびける中を、こなたにくゞり、かなたに出で、得意の薙刀を揮ひて縱横無盡に官軍を惱ましけむ。そのさまいかに目ざましくやありけむ、中にも、小竹が花の如き姿に練絹の鉢卷して、奮鬪せし有樣は、見し人の語草にして今も傳へらる。奮戰數次、益々勉むれどいかにせむ多勢に無勢、只氣をあせるのみ、壯士二人は既に仆れぬ。小竹も亦彈丸胸にあたりてたふれぬ。斯くと見たるお優は、之を助けて去らむとするに、小竹既にながらふべくもあらぬを知りて言へらく、我は早かゝる重手おひては、此の世にいくべくもあらず。とく首うてや。君侯の爲すてし身さら〳〵惜しからず。と苦しき中にもかさねてはけしく諫めけれど、流石一度たゆたひたるお優も、氣をとり直し心を鬼にして、遂に首かき切りぬ。人々、迚もなしうべからざるを知りて逃れ退きぬ。お優は、空しき姉の首をだきて之を坂下驛に葬り、一

塊の土饅頭とはなしたりけり。あはれ、その姿はたとへなく、その心は丈夫も愧づべき、世に得がたき小竹は、はかなく戰塲の露ときゑたり。嗚呼、逝けり。時に年十九。

小竹、假令順逆の理をあやまりて、官軍に刄向ひしとはいへ。只己が藩侯あることを知りて、他あるを知らざりける時世に生れいでたる一女子、その仕業のかゝりしも亦さる方に許さるべし。そが一片耿々たる君を思へる眞情は、薙刀の柄に結ひつけたる短冊に、墨痕美しく記したる、左の歌にても知られなむ。

武士の猛き心にくらぶれど數にも入らぬ我が身ながらも

その携へたる薙刀は、柄の長さ五尺三寸、刄の長さ一尺五寸ありて、今阿沼郡廣瀬村生江八郎氏の家にありとか。心ある人は行きてとへ。切先より三寸許下なる、五分程の缺けたる刄は、勇しき當年の振舞を物語らむぞ。

今、坂下方界禪寺にたてる一片の碑は、官軍某かその義烈をあはれみて、弔へるものなりとか、墓畔の青む色深うして幾何の人の感涙をとゝめ、芳魂空しく地下に眠れども佳名とこしへに朽ちず。女ながらもげにやますらむ。



家政

婢僕の使役

林榮子

婢僕使役の法は、一家の主婦たるものが、家政を理むるゝ當りて、最も能く注意すべき事なり。諺にも人を使ふは、苦を使ふなりと云へるが如く、下賤の者をして、能く人を敬ひ、人を愛すると云ふ情を起さしめ、且つ又能く、其の主に忠を盡さしめんとするは、實に容易ならざる事なれども、要するに、主婦は、常に寛容、温和の德を備て、其の下に臨み、又能く、嚴格なる威を以て、之を正し行くべし。人時々怠惰放漫にして、自ら賤しき境遇に陷る者もありと雖へども、始めより貧賤なる家に生れ、又は父母兄弟が一時の失敗より零落して、人の婢僕となるものも又往々ある事なれど、さる輩は、殊に痛ましき限りなれど、身幸にして、婢僕を召使ふ程の位置にあたりしなど、其れを喜びて、苟且にも、不慈の使ひ樣をなすべからず。

第一賞罰を正しくすべし　婢僕を使役するには常に、其の行狀を調査し、其の勤惰を考察し、其の賞すべきは、稍々重き方に置き、其の罰すべきは、なるべき輕き方にし、能く賞罰を明にして、決して下婢に表裏の行なからしむる樣に戒むべし。されど其の過

ちある時にも、濫りに之を叱責することなく、徐々之を戒めて、自ら其の過ちを、反省する樣にすべし過ちある時に、甚だしく、叱咤するは、無智なるものの習ひとして、自身の過ちは悔いず、只に主をのみ恨み、他を謗り、吾が過ちを隱くして、表面のみを飾る者なり。さりとて過ちある者を、罰せされど、一家の秩序は立ち難し。故に惡しき事は、幾度も之を諭し戒め、其れにても猶改めざる時は、速かに解雇すべし。給料は初めより、過分に與ふべからず。主婦は巳れが喜怒を移して、いはれなきに褒め、いはれなきに、叱る等の事ゆめ〳〵あるべからず。一度賞罰を過つ時は、威權又行はれざるに至るべし。

第二使雇期限　使雇の期限は始めより長日月使ふべきやうに約定すべからず。未だ其の人物の如何をもろく〳〵知らずして、期限を長くする時は、もし事故ありて、半途にて解雇せんとする時などに、甚だ困難にて互ひに快からぬ感情を引起すことあり。又之れに反して、期限を短くし置き、其の期に至りて尚延期せんとするは、互ひに快きものなり。故に三月、或は半年、長くとも一年より多くは決して約定せざるを宜しとす。

たちぬひ

西山たい子

(四十九)　一ッ身重ねもの、縫ひ方

一ッ身の重ねは、一ッ身を二重、あるは三重かさぬるにて、縫ひ方は先きに云ひし一ッ身綿入のぬひ方に同じなれど、あらためてものさんもうるさけれど寸方のつめ方をよく知らざる時は、ぬひ方は如何によく出來たりとも合ふ事の難くて見苦しきもの故此處

には其縫ひ方をはぶきて、寸方のつめ方をものさん。上着の袖丈を、一尺三寸となさば、下着の袖丈は、それより四分つめて、一尺二寸六分となすべし。袖巾は、同じすにべし。袖付けは、下着の方を、二分少くつけるべし。後巾は、背より両脇を、二分つめるべし。前巾も、また一分づゝつめて縫ふべし。衽巾、襟巾、褄下は、上下とも同じになすべし。襟丈は、片身衣にて、二分つめるべし。



三枚重着は、最下の下着は、中の下着とくらべて前に述べたる如きつめ方にて縫ふべし。重ねものは、誠に正しからざれば、合はぬもの故、ねんにもねんを入れて、寸方も、折りめをも正しくなして、ぬふべし。つまの方も同じやうにすべし。

造花

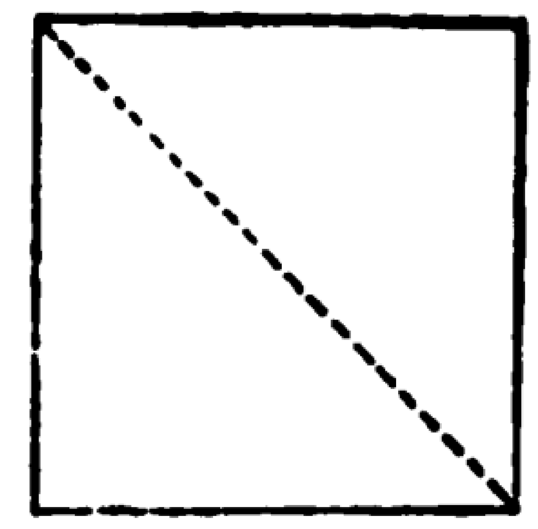
伏見藤三郎

庚申薔薇（つゞき）

薔の造り方。雁皮紙又は礬水引の美濃紙を第十七

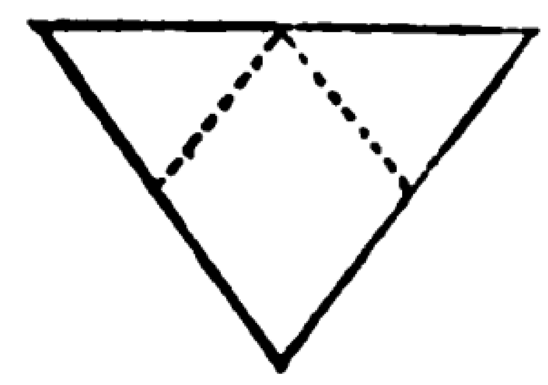
圖の如く正方形に斷ちて、圖の點線の如く折半して、

第十七圖



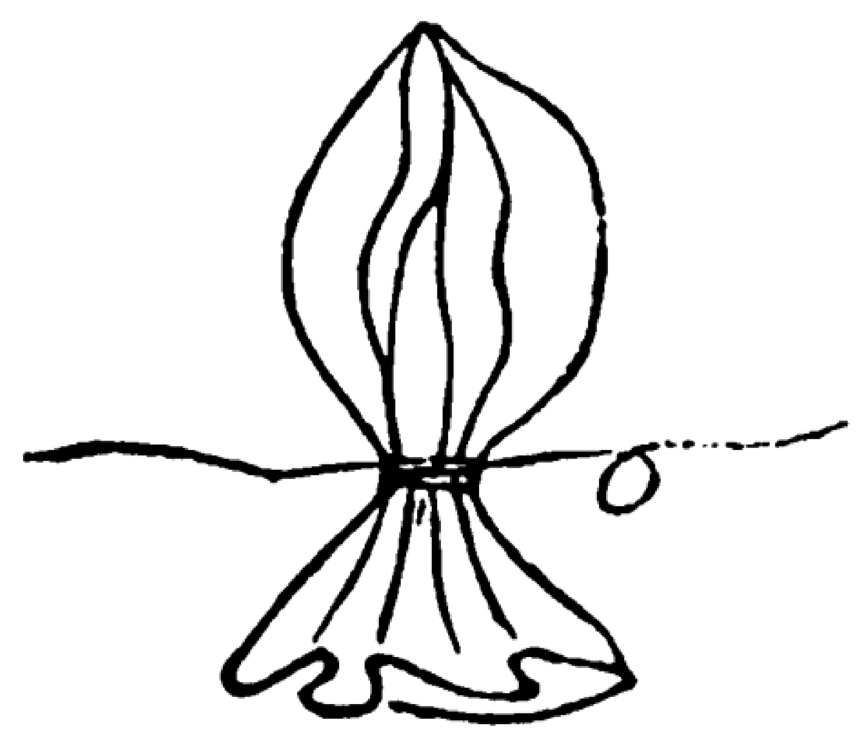
三角形となすこと、第十八圖の如し。又此の圖の點線に示せ

第十八圖



る如く、兩方より折り重ぬれば、恰も嚢の如きものとなるべし。此の嚢の中に少許の綿を入れ、之を小き針金にて絞るときは、第十九圖の如きものを得べし、此の絞りたる處より下の余りは、斷ちとりて、絞りたる針金は、其の儘兩方の二線を揃へて、縱に延ばして、莖となし、第二十圖の如くすべし。これ蕾なり。

第十九圖

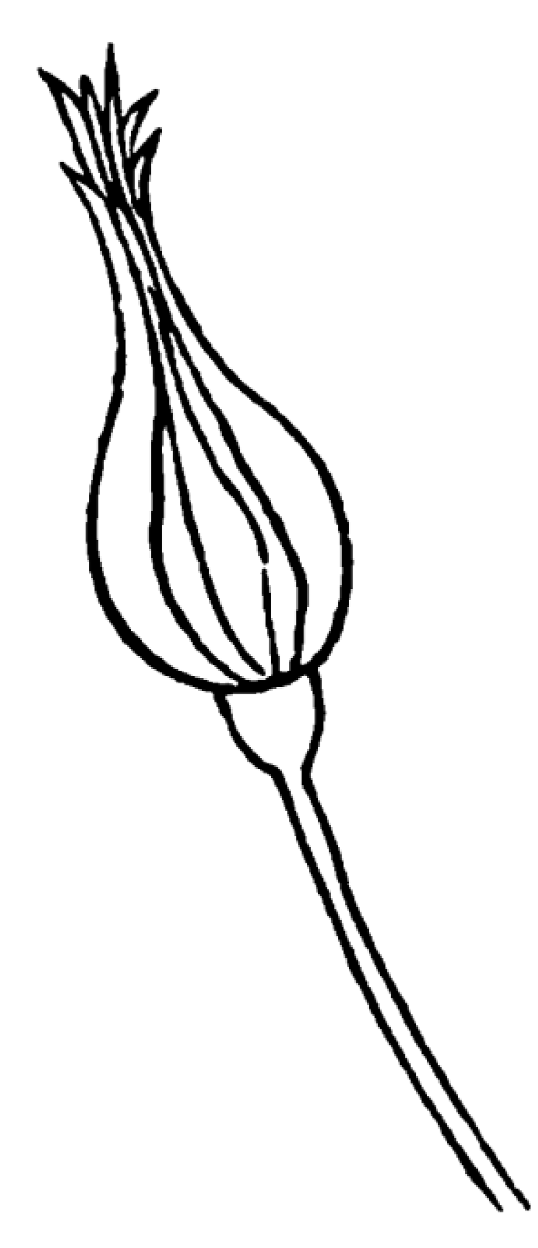


第二十圖



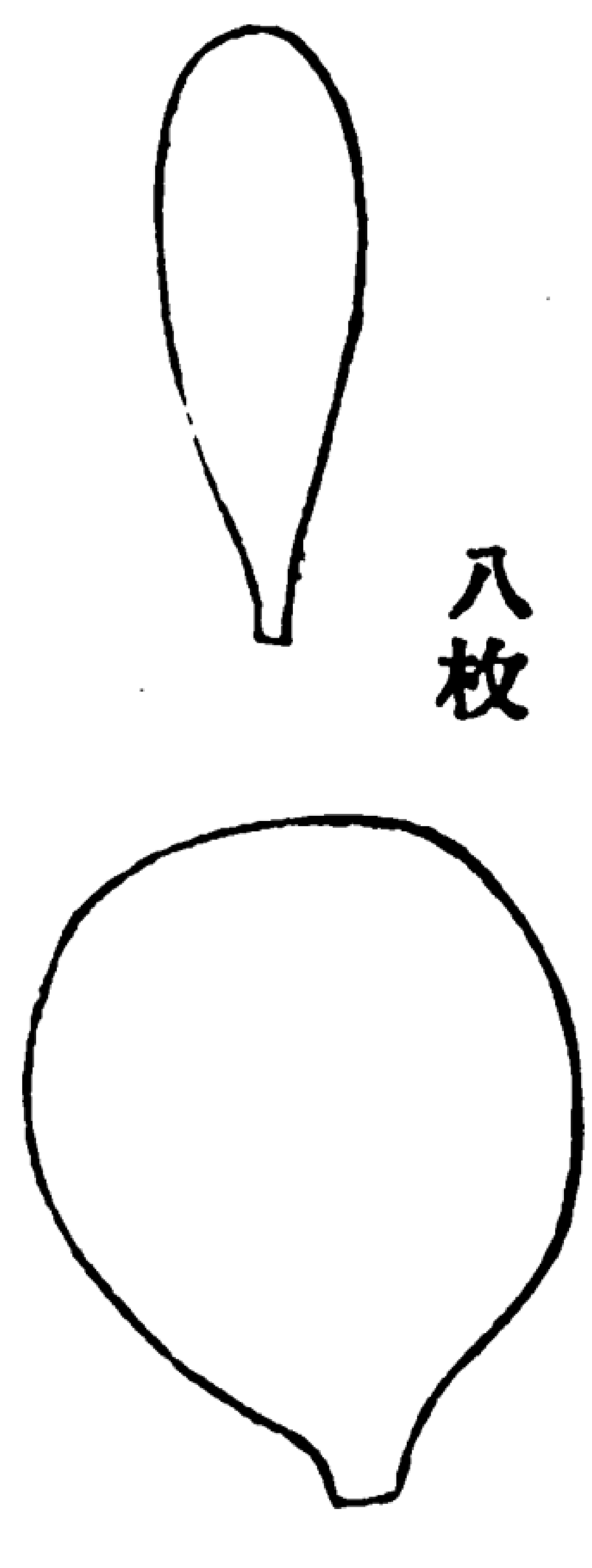
この蕾の先は、フロクシン（赤色）にて模糊し、是に萼（萼は五枚にして前號六枚に畫きたるは誤りなり）を付け、玉護謨、紐護謨を通して造り終りたるものは、第二十一圖の如し。

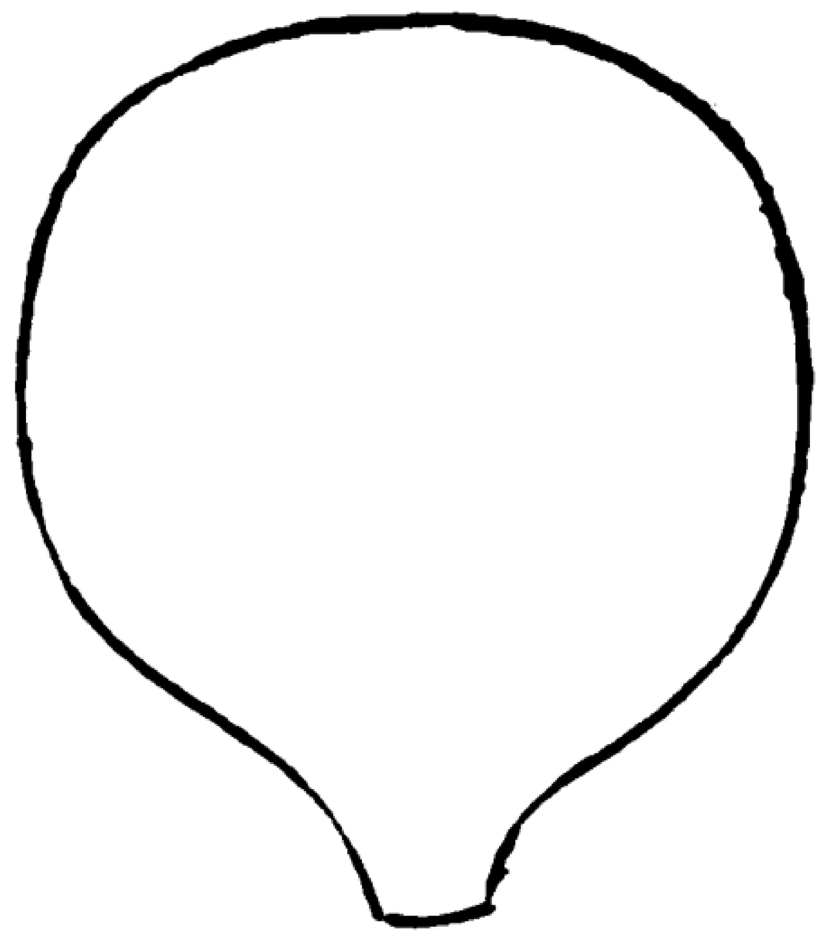
第廿一圖



半開の造り方。瓣は滿開したるものと同じく、寒冷紗（糊を拔きたるもの）、又は吉野紙（二枚重ねたるもの）を用ゐ、第二十二圖に示せる如き大中小三種を實物に應じて適當の大さに造るべし。小は八枚、

第二十二圖





六枚

中三枚、大六枚を要す。
次に之を色染すべし。此の三種の中、小八枚は赤にて稍濃く染め、中、大は小より少し薄くしてぼかしに染め出すべし。色染して後、薄糊を引くこと滿開のものを造るときに同じ。小瓣は筋鏝にて少しく兩端を縮らせ、中瓣大瓣は薔薇鏝にて丸むべし。でら鏝の使ひかたは、先づ瓣を少しく濕めして、布を疊みたる上に載せ、之を掌上の凹みたる處に置き、少熱したるでら鏝にて瓣を押し付けつゝ廻はすべし。かくして造りたる瓣は少なるものより、漸次に纏むべし。小瓣八枚は、一所に束ねて、針金の上端に糸にて絞り付け、第二十三圖の如くすべし。

第廿三圖



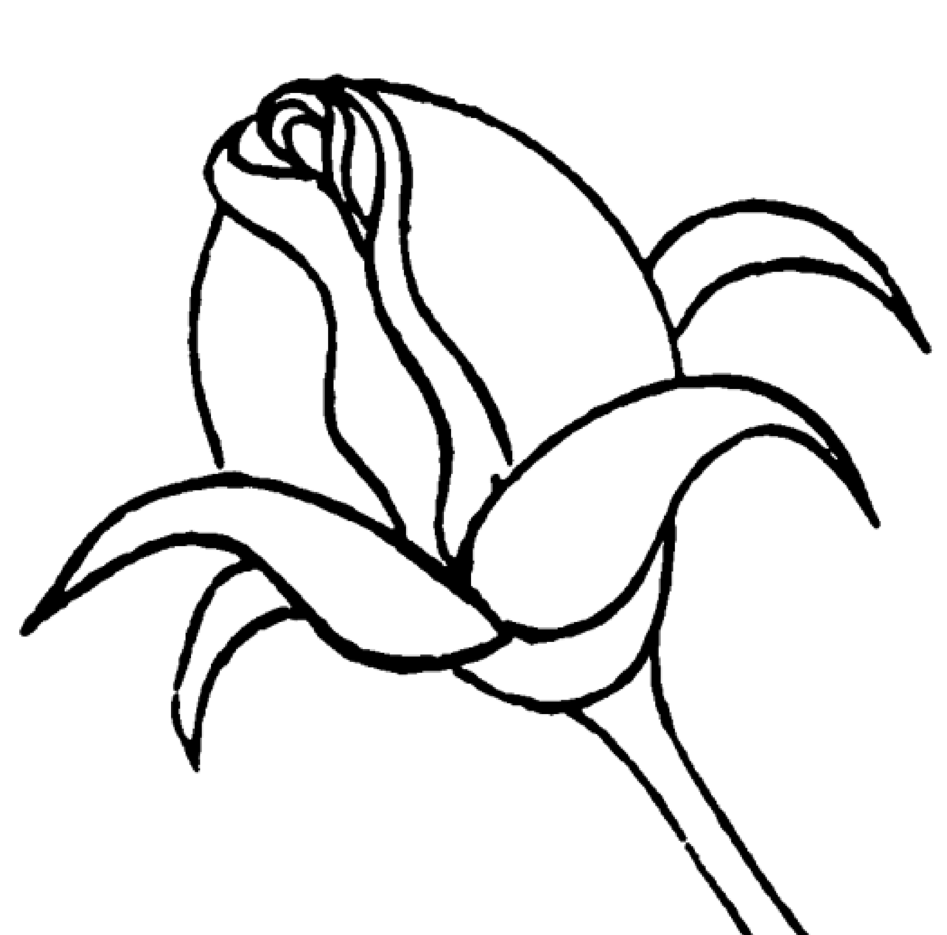
其の下部に針金を眞として、綿を適當の大さに丸く巻き付け、其の上に薄糊を引きて、毛羽の立たぬ様にすべし。第二十三圖を參照すべし。

第廿三圖



さてこの綿を眞として、廻りに中瓣三枚を付け、次に大瓣六枚を順次に付け了り、萼を付け、紐護謨を通すべし。第廿四圖の如し。

第廿四圖



前號載せたる造花材料販賣店は多少相違したる處あれは改めてこゝに示す。

鋏、庖丁、鏝、打抜、針金等の金物類は　神田區龍閑町八番地　上原八十次

造花用布類、護謨等の材料品は　日本橋區横山町一丁目十二番地　前川善三郎

繪具類は　京橋區南傳馬町二丁目　關屋正三郎

だいどころ

フーカデン

搗肉を蒲鉾形に固めて其面へ鷄卵の蛋白を塗り、平鍋に牛酪を投れ、其の沸騰を待ちて肉を投れ、鍋に蓋をなし、凡そ十分間程經たる頃、くづさぬやうに、肉を反して、鍋の中に溜りたる汁を匙にてすくひとりてかけ、褐色になる迄蒸燒になし、細き竹串を刺して、其熟否を試み、串障りなく通らば、鍋より出して、冷し置き、小口より、二三分の厚さに切り、一人前二三片程、皿に盛り、洋芹の若芽を、添へて出すべし。

甘藍卷

甘藍の外葉を去りて、内部の白青色の葉を一葉づゝにかき、湯を通し、其軸を去り、一葉にて、搗肉一握り位づゝ、肉の見えぬやうに包み卷、シチー鍋に能程の「スープ」を投れ、其中に、卷肉を投じ、食鹽胡椒にて鹽梅し、鍋に堅く蓋をして、交火にて一時間程煮るべし。熟れなば、二個又は三個を皿に盛り、其煮汁少量をかけて、溫き中に出すべし。

搗肉の製方

牛の臀部の肉一斤と、豚肉四斤とに、麵包の皮を去りたる軟かき部一片、水に浸して加へ、出刀庖丁、

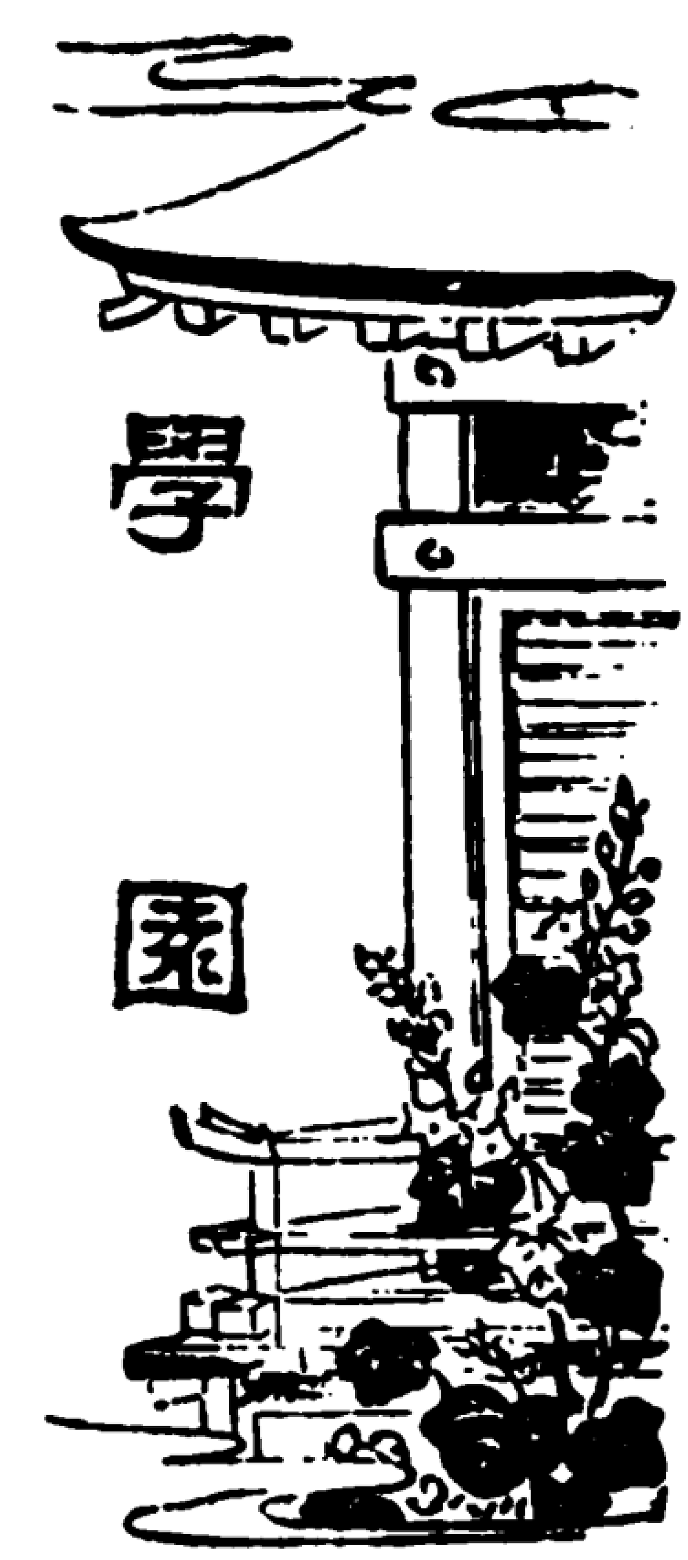
又鉈の脊にて能くたゝき交せ、尙之に鷄卵の蛋白二個を投れ、胡椒食鹽を和して味を附け、更に能く混和すべし、此肉は、甘藍卷、其他種々の調理に用ゐること多し。

麵包屑粉の拵方

麵包の外皮又は屑を細かく裂きて、天日に干し、能く乾きたる後、乳鉢にてつき、篩子にかけて、用ふべし。之れを貯へ置くには、鐵葉の茶入抔に投れ、濕氣なき所に仕舞置をよしとす。

煮生姜

生姜一斤を、細に刻み置き、米利堅粉一斤の中へ、鷄卵二個を能く溶きて加へ、白砂糖三斤を入れ、之れに牛乳と水とを一合五勺づゝ注して、一度かきまぜ、尙前の生姜を投れて、能く交和せたる後之れを壺又は、深き鉢に入れ、其內側にあぶらを塗りて其口を布巾にて蓋ひ、大鍋に投れ、壺の七分目位迄、熱湯を注ぎ、凡ろ二時間程煮るべし、既に熟すれば、壺を出し、少し冷めたる頃、其口に皿を伏せ、兩手にて皿と壺とを押へて之れを反覆し、壺を上に拔き去り、其全く冷めたるを待、能程の大さに切りて用ゆべし。



日本文典（十九）

鹽井正男

前に述べたる否定助動詞（ず）の連體の格なる「ぬ」を延べて、「なく」といふ事あり。例へば、古今集の春の部なる讀人しらずの歌に、

み山には松の雪だにきえなくに
　都は野邊の若菜つみけり。

また伊勢物語にも、

秋かけていひしながらもあらなくに
　木の葉ふりしくえにこそありけれ。

した紐のしるしとするもとけなくに
　かゝるかごとはこひずぞあるべき。

などあるにて知るべし。かゝる「なく」は、「ぬ」の延びたるものなり。故に、「消えぬに」、「あらぬに」、「とけぬに」と前の歌の詞をいひかふるも、意味は變りを見ざるにて知るべし。

次に否定助動詞には、「ざる」。これは、前にいへる「ず」といふ否定助動詞に「あり」なる詞の添はりて、これをつゞめられて成れるものにて、元來、否定助動詞（ず）は、過去をあらはす能はざる如し。則ち「けり或はたり」などいふ過去をあらはす助動詞を添へて、過去の否定をあら

はすを得ざる如し。例へば、昨日學校に行かざりしことを、「昨日學校に行かずけり」とも、或は「昨日學校に行かぬけり」ともいふやうに云ふ事能はざるを見よ。「ず」は元來斯の如き欠點ある故に、何時となく、「ず」に「あり」を添へてこれをつゞめ「ざり」といふやうなる助動詞をつくり、その缺點を補ふやう成りたる如し。されど、ざりは

將然	終止	連用	連体	已然
ざら	ざり	ざる	ざり	ざれ

といふやうに活用すれど、これを終止に用ふる事極めてめづらかなり。則ち、ざりといひて、文をとゞむること殆ど見えず。たゞ榮花物語の月宴の文に、

朱雀院は皇子たちおはしまさざり。唯王女御ときこえける御腹に、女王一所ぞおはしましける。

とあるが見ゆるのみなれど、それも異本なるには、しか見えず。故にその本の寫しあやまり來れるならむも知るべからずといふ。大かた、過去をあらはす助動詞に續きて、過去の否定をあらはすやうある所に用ひられたり。例へば、

昔、男ありけり。歌は讀まざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。（伊勢物語）

もとより歌の事は知らざりけれど、辭ひけれど、强てよませけれど、（仝　上）

鬼、はや、女をば、一口に喰ひてけり。あなやといひけれど、神の鳴るさわぎに得聞かざりけり（仝　上）

つひにゆくみちとはかねてきゝしかど昨日今日とはおもはざりしを（仝　上）

かゝる間に、船君の病者、もとよりこちごち

しき人にて、かうやうの事、更に知らざりけり。（土佐日記）

千代へたる松にはあれど古の
聲の寒さはかはらざりけり　（仝　上）

けふの夕つかた、京へのぼる序に見れど、山崎の店なる小櫃の繪も、糫餅の法螺の影もかはらざりけり。（仝　上）

などか今まで參り給はざりつる。扇もたせて尋ね聞ゆる人ありつなどつぐ　（枕草紙）

猶日本はかしこかりとて、後々はさる事もせざりけり。（枕草紙）

かくて、つれぐ＼とながむるに、などか物詣でもせざりけん。（更科日記）

多く、斯の如く、過去をあらはす助動詞に伴ひて、過去の動作事物に就きて、そを打ち消すやうなる時に用ひられたり。其の他の場合に用ひられたる例は

玉くしげ箱のうらなみたゝぬ日は
海をかゞみとたれか見ざらん　（土佐日記）

この人々の深き心は、この海には劣らざるべし。（土佐日記）

かうやうの事、歌このむとて、あるにしもあらざるべし。（仝　上）

物あはせ、何くれと挑むごとに勝ちたる、いかでか嬉れしからざらむ。（枕草紙）

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。（方丈記）

人にまじはらざれど、姿を恥づる悔も無し。

（仝　上）

野とならむ鶉となきて年はへむ
かりにだにやは君は來ざらむ
（古今集）

後世の文になるまゝに、「ぬ」或は「ね」といふべきを、「ざる」「ざれ」とやうにいふこと、いと多くなれる如し。此の「ざり」は、否定をあらはすには、皆、此處にあげたる例の上にても知るべき如く、動詞の將然の格の下に續くなり。

次に、否定助動詞は、「まじ」といふあり。

まじ。　動詞の終止の格の下に添へて、その動作を否定するやうなる詞なり。これは、形容詞の複辭の如く語尾を活用す。即ち、

將然	終止	連用	連体	已然
まじく	まじ	まじく	じまき	まじけれ

その例を一ッ二ッあぐれば、伊勢物語に

昔、男ありけり。女のえ逢ふまじかりけるを
年をへてよばひわたりけるを、云々。

或は枕の草紙に、

いとあやしきことゝ。これ知らぬもの、誰かあらむ。更に數さすまじと論ずれど、云々。

或は玉葉集なる歌に、

幾ほどもながらふまじき世の中に
ものを思はでふるよしもかな

すべて、「べし」といふ助動詞の裏をいふやうなる意味の詞なり。

動詞の終止言の下に續くよしをいひたれど、良行變格の動詞にのみは、連體の格にあらざれば、續くを得ず。例へば、「さることはありまじ」とは云はずして「さることはあるまじ」と、必ずいふ如し。「あり」

は終止の格にて「ある」は連體の格なり。又、例へば、土佐日記の十六日の條に

かくて、京へ行くに、島坂にて、人、あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは來る時ぞ、人はとかくありける。

或は、枕の草紙に

心なども賢かりけるが、七十ちかき親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、まして、いとおそろしと懼ぢ騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ。一日に一度見ではえあるまじとて、云々。

土佐日記と貫之（二）

鹽井正男

貫之が土佐日記を、假字文字に女書きしたる心根を推し慮れば、二條ばかりありて、そが一は、前の卷にも申したる如く、その世の輕薄なる人情、いやしき世態を寫し出して、それを諷刺せんとしたる故に、これを、寫し出し易からむやうに、朝夕にいふなる國語を用ひて、假字書にしたるなり。漢語漢文にては寫し難く、且つ切ならざる故に、諷刺の筆力弱かるべきを思ひて、國語もて假字書したるなり。されば土佐日記の中に見る輕薄なる口吻、いやしげなる語調、刺すばかりの毒筆は、皆當時の世態人情を諷刺せむとしたる所にて、しかも巧みに諷刺し得たる所なり。その筆のあと〳〵をかいあぐれば、

二十二日の條に、

藤原の言實、船路なれど、馬の餞す。上中下醉ひすぎて、いと怪しく、潮海の邊りにて、あざれあへり。

また、次の日に、まさしく國司の官人にはあらざる八木の康敎といへるが、義理正しく餞別物を送りこしたるを喜びたる所に

國人の心の常として、今はとて見えざなるを、心ある者は、恥ぢずになん來ける。これは、物によりて譽むるにしもあらず。

或は、鹿兒の崎といふわたりまで、新任の國守の人など、これかれ追ひ來りて、磯にて別れ難き事をいひて、よみ出でける歌を、

かく別れ難くいひて、かの人々の口網もろもちにて、この海邊にて荷ひ出せる歌

といふやうに打ち笑ひ、或は、大湊のとまりなりける時、物あまた贈りたる人が、別れを惜しみ惜しみ、波の立つを見て、

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも
おくれて泣かんわれやまさらむ

とよめるを評して、

いと大聲なるべし。持てくる物よりは、歌はいかゞあらむ。

と誹謗し去り、或は、住吉のわたりにて、俄に風吹き立ちて、船もいつしか沈まむとするけしきをいへる所に、

楫取の曰く、この住吉の明神は、例の神ぞかし。ほしきものぞおはすらむとは、今めくものかな。

といへるなどの詞のはしく。海の邊りにて醉ひ亂れたれど、魚の鯘るに懸けて、あざれあへりと戯れ、或は海邊にて大勢のかゝりて、やうやくにうたひ出

でたる歌なれど、口網諸持ちにて荷ひ出せると戯れ、或は、立つ白浪の聲よりも、泣く聲のまさらむといひし故に、浪の聲にもまさらんとは大聲やと戯れ、或は、あまりに、譽めたれど、物貰へるからにはあらずと戯れたるものにて、皆、諧謔の筆のみ。されど、一わたりよめど、何となう人をあざけるが如く、さげしむが如く、いやしく腹きたなげにおぼゆ、貫之の人がらをも、ればつかなく思はるれど、うちかへし思へど、これ、皆當年のさるあだなるいやしげなる世の姿をまねびて、よそながら諷刺せんとしたるのみ。されど、まゝ筆うちつけに成りて、あらはに人情世態の輕薄浮華をあざけりたる所あり。ろは、十五日、舟より人の家にうつりたるを云へる所に、

この人の家、よろこべるやうにて、あるじしたり。この主人の、又饗應のよきを見るに、うたてれもはゆ。

と、その心情を疑ひいぶかり、また、十六日の夕つ方京へ上る途に、山崎を過ぐれど、あきなふ小櫃の繪も、櫻餅の法蝶の形も、變はらざるを見て、

賣る人の心をぞ知らぬ

と、人情ぞかりは、たのみなきものなるをいひ、さて、島坂といふ所にて、人の饗應したるをいへる所に、

かくて、京へ行くに、島坂にて、人、あるじしたり、必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、くる時ぞ、人はとかくありける。

と、人の心の花にうつり色につき、行くに疎く、來るに親しく、上には温かに、下には氷の如く、またさながら夕に結びて朝に見ざる露の如く、はかなく

あだなるを、寸鐵したゝかにこそ打ちつけたれ。

さて、ありし都の住居にかへりつきて、見れど、遠く頼み置きたる人は、空だのみにて、よそにのみうちすてしか、いたく家のあれたるを見て、

家に至りて、門に入るに、月あかければ、いとよく有樣見ゆ。聞きしよりも增りて、いふがひなくぞ、こぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。

とうち慨きて、つくづくとながむれど、さまざまの事思ひ出でられ、心は千々、腸は寸裂、

とまれかくまれ、疾くやりてむ

破りすてむ、何せむものぞ、用なしと、筆をとゞめたるあと、徒らに謙遜の意とばかりは覺えざるなり。かくて、貫之が此の日記を假字書にしたる心根の中の一條は、世態人情を諷刺せんに、寫し易き國語を用ひたるなるを知るべし。

また、一條は、彼れは大に國風を慕ひたる人にて、彼の唐風の野山に吹きすさびて、國風の競はず振はざるをいたみ、これを起さむと欲する心ありければ、假字書きをも爲せしならむ。そは、また次の卷に詳しく申さむ。



漫録

またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

十五日、まうでゝ見るに、やがてきりひらきたる其竹もてゆひめぐらし、いと青く清きが中に、さははやかに白眞砂つきならしたるをはじめ　塵ばかりのくいわらせじと、もとのぶ直好が、今はとつくせし心の程わらはれて、いと嬉しきにも、涙落來めり。又杉板もてふきおろせし屋根の、いと薄かりければ、雨の漏るらんも悲しきに、今一重ふきそへてんや、今宵なほふりくべし、願くは暮れぬ程にといふに、波多野ちかともこたびの喪主なりければ、何も心得て、やがてさるかたのものどもよびにはしらす。さて墓所にたゝずむ程、土のしたのみ打まもられてせきあへず、

この世にてあはぬいたまのひま遠み
　先づ漏る雨は涙なりけり

鳥も塒にわたり、雲吹く風いと寒く、坐にきし方思ひかへすめり。

何によりたゞよひぬらん浮雲の
　とく消ぬべきこの世なりしを

歸るさ打向ふ空に、月いとしろう如意が嶽の頂をはなれて、一すぢの雲たなびけるを見て、ちかとも

月かすみを帶びたりと、いと高からず吟ず。さよと思ひいづれど、今日の會日の宿題なりや。いつもの月なみに引たがへて、さう〳〵しき夕なりけり。ちかとも。

ともに見し影を思へど大空の
　月の鏡もかたみなりけり

佛光寺の君より、森下のりたかを御使にて、御とふらひあり。くだされし黄金の外に、一ひらうへたまへるを見れど、

思ひきやともなし千鳥かたわれの
　月をば君が上に見んとは

とあそぜり。この御詠の二三は、去年の卯月九日なりけん、嵯峨山の若葉御覽せんとて、彼のわたりものしくらし給ひしに、めしえたがひて、ゑひのすさびにうたひつる末の句なりけり。かしこうもればしいだされたるを、かたじけなみ奉りて、

御佛の光さしくる雲井より
　玉のこゑさへ響くけふかな

十六日。堂の前なる櫻散りすぎたり。なほよし、

古寺の花の白雪踏分けて
　昨日も今日も君をこそおもへ

なほよしが弟なりける大吽法師、去年の冬高野より下山して、我塾にありけり。にげなきにあらざめれど、彼なきあとの川づらの家をまもらせおきけるがれこしたる。

さりとては死はなきものと聞きしかど
　今日より見ぬ人ぞ悲しき

十七日。たそがれといふに、河野ゑげなり入來れり。此しげなりが妻もおなじ夕に身まかりき。いとせめしかなしみを、かたみに聞えかはしたてまつらんと、

くらきを待ちてしのびにまかりものし侍るも、猶なめしうなど打いふを、火影に見れど、いと白き日頃の顏月代ともに、いみじうくろみわたりて、瘦せたるまなこゐなど、むくつけきもなか〳〵あはれに悲しと見ゆ。をとつとしの此ころなりけん、おのれもしけなりも、東の旅にくだりけるあとにや、亡妻どち此家にすみて、しばらくもとに有りけりとき〻しをさへ思出づめり。

　　をとゞしの花のかげにて同じ日の
　　　けふ死なんとや契りおきけん

今は如何なる世界にてなど語らふ程しげなりも、

　　　二人のころもかはらざりけり
　　おなじ日に二人いにしをしたひつ〻

そいひつ〻なく。

十八日。雨降る今日は初七日なり。例の人々來集ふめり。もとのぶ、

　　しでの山青葉が上の春雨に
　　　此世のかげをおもひいづらん。

こはさりぬるきさらぎ十三日なりけん、桃櫻長く短きいとすくなからず折交せて、枕のもとにさしおきけるを、打まもらひて、なき人、

　　いろ〳〵の花見ることもこれかぎり
　　　青葉を待たぬ我身なりけり

とながめすてたるを、あなた山かぐら岡の若葉、けふしもつや〻かなるを打見遣りて思へるなるべし。今宵人多きもうるさく、例の胸さへいたけれど、いとゞこもり居り、

　　ふたよ三夜よ〻となく〳〵數ふれど
　　　はや七夜こそとはざかりけれ

十九日。いでや此十年あまり此山かげの寒きにわび

て、年々秋の末冬のはじめより、かの木やまちに住みて、いつもきさらぎ彌生ばかり、河原の日影うちけぶり、百千鳥さへづらんを待得てぞ、此岡崎にはかへりくることとなりき。さるならひを思出てぞよみけん、相摸のかみよしゆき、

かへりこん君がころとて山吹は
　今年も咲きて待渡りけん

實につひになきからをしも待つけんとは、咲く花もかけてはからんや。さはいへ

かねてより身はなきものに思ひけん
　いはねでこそわれ山吹のはな

井蛙小錄（つゞき）

井上頼文

月花のあはれをことわることと葉

村田春海

花をめづらしみ、月をあはれむならはしなん、なかれての世はさらなる。其みなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞおこりにける。花に心をなくさめませしは、わかざくらの宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなん聞ゑたる。しかありて後藤原奈良の御世にいたりては、歌人おほくいて來て、かたみにみやびをかはし、こゝろ〳〵に思ひをのぶる事、皆月花をもて、心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたかひて、此すさみいよ〳〵さかりになりもてゆきて、あるは物おもひなき春を、花によろこび、くははる老を月になげきあるはさかしきも、おろかなるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに、月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを、佛に

ちぎり、またしものしもなる、たき木こる山かついぶせきふせやのしづのめまでも、月と花とに、心をよせざるなんあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき、おほみあそびの、きはことなるが中にも、月と花とのためには、時にのぞみて、ことさらにうたげのむしろをまうけ給ふ事、おきてたがはず。のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさま〴〵なるよのあとを見るに、いにしへも今も、高きもみしかきも、月と花とをうむかしみおもへる事、ひとしくていづれをあまれりとし、いづれをたらずとして、一かたにこゝろよせたる人、誰かはあらむ。しかるを、今にありて、其よしあしをことわりいはんは、人わらへにもなりぬべし。去かはあれど、これをことわるにゆゑあり。そのおとりまさりは、もとよりかれにはあらざめれど、おのかじゝ、うち見る人の、身にたぐへおもはんには、其よるかたいかでかなからん。そも〳〵花は春にありて、にぎはゝしきにより、月は秋にありて、かなしみをぞおこすなる。今このくち翁が心にとりていはゞ、身すでに老にたれど、つぼめる花のさかりまちいでんたのしみもなく、品いやしけれど、花々しき世をへて、時にかをらんねがひもかけず、たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜をみては、月の影かとたどろき、かたぶくよはひをおもひては、入がたの月ぞ身によそへつべき。かゝれど、花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり。おほよろ人のためにはいかでかまねびもいでむ。

花扇

（閑田耕筆所載）

年ごとの文月七日のあした、湯明家（近衛殿也）より内へ奉らせたまふ花扇といふものあり。御使は匂ひといへるはしたものにて、勾當の内侍の御許へ御文あり。長橋へもて参れるさま、いと興ありて、衣被着ごめ高き足駄をはき、雨ふらねども大傘をさしかけさす。みづからは文箱を携へ、下部ふたり從ひて、ひとりは此大傘、一人は花扇をもつ。此下部も又助と何とかや、此日の名は、むかしより定れりとぞ。内にては小御所のれまへの御池にうかべて、二星の御手向になし給ふとなん。これもいつのころよりはじまりしといふことは、さだかならぬよしなり。源の勘解由判官畫きて贈られぬ。



雨月物語（つゞき）

菊花の約　上田秋成

わら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艶ひやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起出で、草の屋の席をはらひ、黄菊しら菊二枝三枝小瓶に挿、嚢をかたぶけて酒飯の設をす、老母云。かの八雲たつ國は山陰の果にありてこゝには八百里を隔つると聞ば、けふとも定がたきに、其來しを見ても物すとも、遲からじ。左門云。赤穴は信ある武士なれば、必約を誤らじ。其人を見てあはたゞしからんは、思はんことの恥かしとて、美酒を沽ひ鮮魚を宰て、厨に備ふ。此日や天晴て、千里に雲のたちゐもなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になんとて過。五十あまりの武士、二十あまりの同じ出立なる。日和はかばかりによかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊りは追べき。若き男は却物怯して、錢おほく費やすことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍りしものゝかたりしを思へば、このほとりの渡りは必怯べし、な恚給ひそ、魚が橋の蕎麥ふるまひまをさんに、といひなぐさめて行。口とる男の腹たゝしげに。此死馬は眼をもはだけぬかと、荷鞍おしなほして追もて行。午時もやゝかたぶきぬれど、待つる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心醉るが如し。老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸りくる信だにあらば、空は時雨にうつ

りゆくとも何をか怨べき。入て臥もして、又翌の日
を待べしとあるに、否みがたく母をすかして、前に
臥しめ、もしやと戸の外に出で見れど、銀河影きえ
ぎえに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の
吼る聲すみわたり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくる
やうなり。月の光も山の際に陰くなれど、今はとて
戸を閉て入んとするに、たゞ看。ればろなる黒影の
中に人ありて、風の隨來るをあやしと見れど、赤穴
宗右衛門なり。踊りあがるこゝちして、小弟蚤くよ
り待て今にいたりぬる。盟たがはで來り給ふことの
うれしさよ。いざ入せ給へといふめれど、只點頭て
物をもいはでぞある。左門前にすゝみて　南の窻の下
にむかへ、座につかしめ、兄長來り給ふことの遲か
りしに、老母も待わびて、翌までと臥所に入らせ給
ふ。寤させまゐらせんといへるを、赤穴又頭を揺て

とゞめつも。更に物をもいはでぞある。左門云、既
に夜を續て來し給ふに、心も倦足も勞れ給ふべし。
幸に一杯を酌つゝ歇息給へとて、酒をあたゝめ、
下物を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、
其臭ひを嫌放るに似たり。左門いふ。井臼の力はた
欵すに足ざれども、己が心なり。いやしみ給ふこと
なかれ。赤穴猶答へもせで、長嘘をつきつゝ、しば
しして いふ。賢弟が信ある饗應をなどいなむべきこ
とわりやあらん。欺くに詞なければ、實をもて告る
なり。必しもあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあら
ず。きたなき魂のかりに形を見えつるなり。左門大
に驚きて、兄長何ゆゑにこのあやしきをかたり出給
ふや。更に夢ともおぼえ侍らず。赤穴いふ。賢弟と
わかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢ひに
服て、塩冶の恩を顧るものなし。從弟なる赤穴丹治

富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて、吾を經久に見ゑしむ、假に其詞を容て、つら〳〵經久がなす所を見るに、万夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練といへども、智を用るに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事をかたりて去んとすれど、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ。此約にたがふものなれど、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども、遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思ひ出て、みづから刄に伏今夜陰風に乗りてはる〴〵來り、菊花の約に赴。この心をあはれみ給へといひをはりて、泪わき出るが如し。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立と見しが、かき消て見えずなりにける、左門慌忙とゞめんとすれど、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放て大に哭く。老母目さめ驚き立て左門がある所を見れど、座上に酒瓶魚膾たる皿どもあまた列べたるが中に臥倒れたるを、いそがはしく扶起して、いかにとゝへども、只聲を呑て泣〳〵さらに言なし老母問ていふ。伯氏赤穴が約にたがふを怨るとならば、明日なんもし來るには言なからんものを、汝かくまでおさなくも愚なるかとつよく諫るに、左門漸答へていふ。兄長今夜菊花の約に特來る。酒肴をもて迎ふるに、再三辭給ふて云。しか〳〵のやうにて約に背くかゆゑに、自刄に伏て陰魂百里を來るといひて見ゑずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かしたてまつれ、只〳〵赦し給へと潸然と哭入

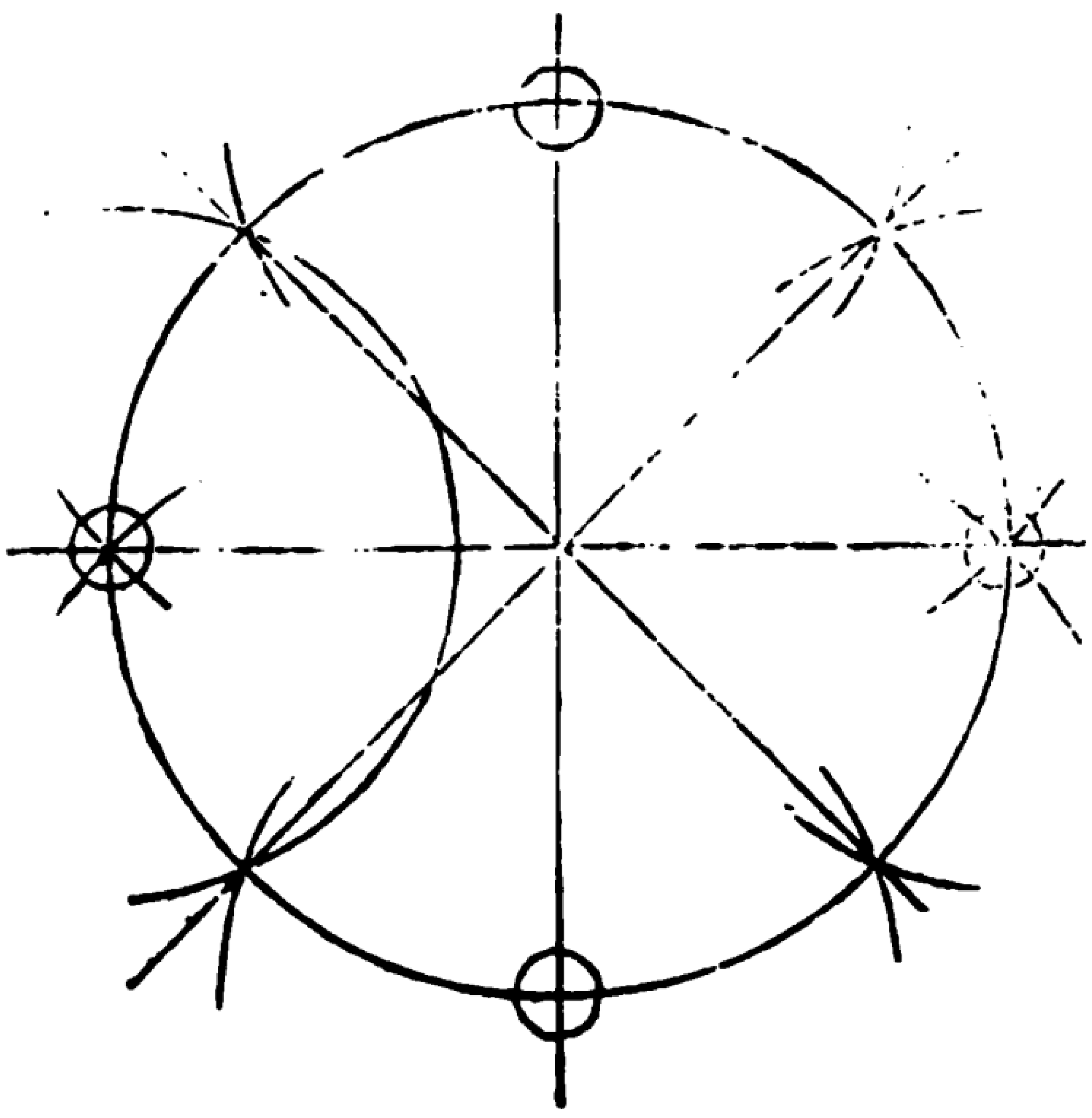
を、老母いふ。牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見ぬ。渇するものは夢に漿水を飲といへり。汝も又さる類にやあらん。よく心を靜むべしとあれども左門頭を搖て、まことに夢の正なきにあらず。兄長はこゝもとにこそありつれど、又聲を放て哭倒る。老母も今は疑はず。相叫て其夜は哭あかしぬ。明る日左門母を拜していふ。吾幼なきより身を翰墨に托るといへども、國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくすことあたはず。徒に天地のあひだに生るゝのみ兄長赤穴は一生を信義の爲に終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。公尊體を保給ふて、しばらくの暇を給ふべし。老母云、吾兒かしこに去ともはやく歸りて老が心を休めよ。永く逗まりてけふを舊しき日となすことなかれ。左門いふ。生は浮たる泡のごとく、旦にゆふべに定めがたくとも、やがて歸りまゐるべしとて泪を振ひて家を出、佐用氏にゆきて老母の介抱を苦にあつらへ出雲の國にまかる路に、飢て食を思はず、寒きに衣をわすれて、まどろめば夢にも哭あかしつゝ、十日を經て富田の大城にいたりぬ。先赤穴丹治が宅にいきて姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、翼ある物の告るにあらで。いかでしらせ給ふべき謂なしとしきりに問尋む。左門いふ。士たる者は富貴消息の事ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約をおもんじ、むなしき魂の百里を來るに報いずとて、日夜を逐てこゝにくだりしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまゐらすべき旨あり。ねがふは明らかに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王みづからまうでゝ、手をとりつも告るは、若諱べからずのことあらば、誰

をして社稷を守らしめんや。吾かために敎を遺せとあるに、叔座いふ。商鞅年少しといへども奇才あり。王若此人を用ゐ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ。他の國にゆかしめば、必ず後の禍となるべしと。苦に敎へて、又商鞅を私にまねき、吾汝をすゝむれども王許さゞる色あれば、用ゐずはかへりて汝を害し給へと敎ふ。是君を先にし、臣を後にするなり。汝速く他の國に去て害を免るべしといへり、此事士と宗右衛門に比てはいかに、丹治只頭を低て言なし。左門座をすゝみて、伯氏宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨て尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨て百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚て骨肉の人をくるしめ、此横死をなさしむるは友とする信なし。經久强てとどめ給ふとも舊しき交はりを思はゞ、私に商鞅叔座が信をつくすべきに、只榮利にのみ走りて士家の風なきは、即尼子の家風なるべし。さるから兄長何故此國に足をとゞむべき、吾今信義を重んじて態々こゝに來る、汝は又不義のために汚名をのこせとていひもはらず拔打に斬つくれば、一刀にてそこに倒る、家眷ども立騒ぐ間にはやく逃れ出て跡なし。尼子經久此よしを傳へ聞て、兄弟信義の厚きをあはれみ、左門が跡をも强て逐はせざるなり。咨輕薄の人と交はりは結ぶべからずとなん。

紋帳圖式綱目（四）

井上頼文寄贈

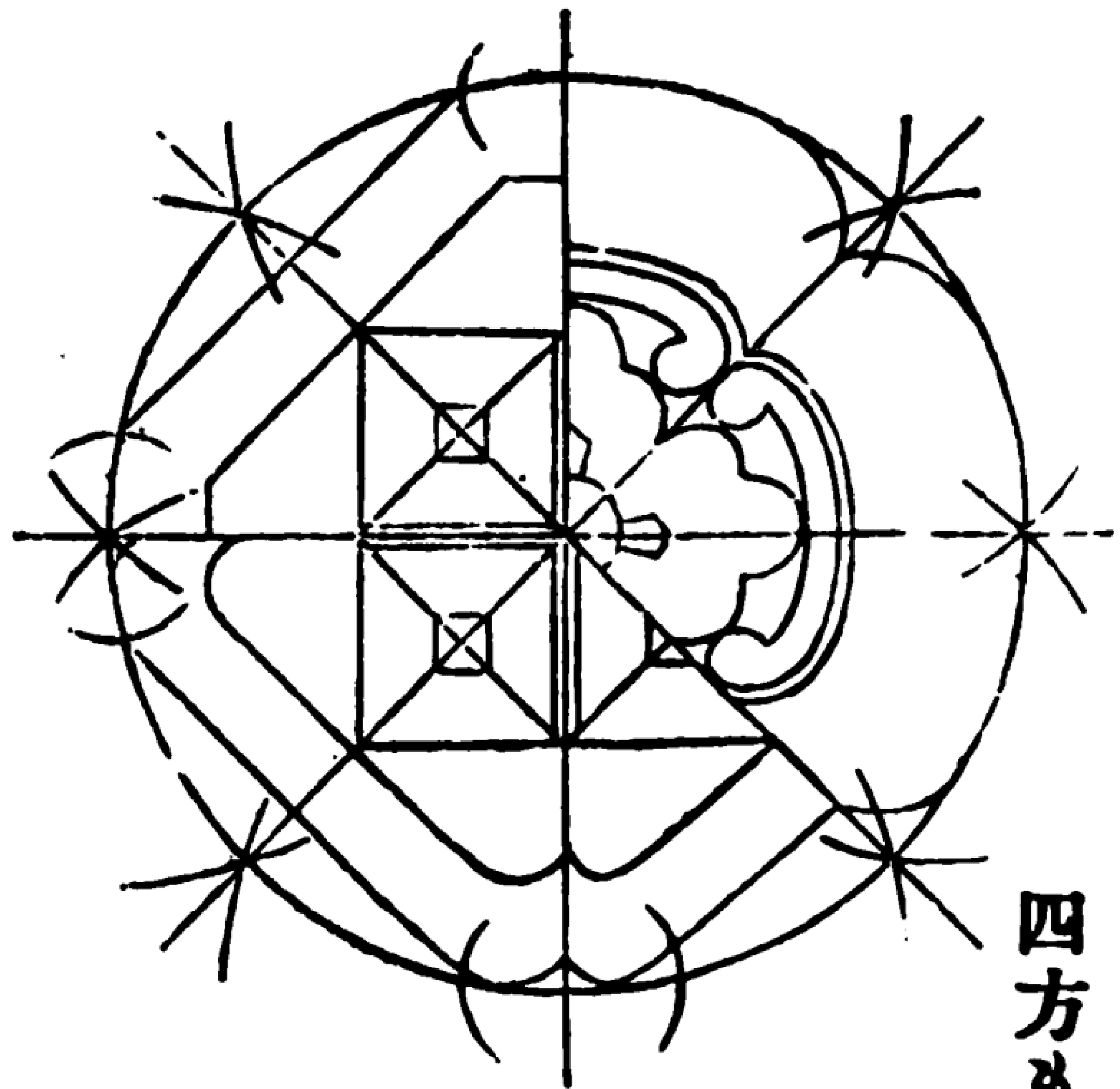
四つ物



但八割

すみ切角

すみ入角

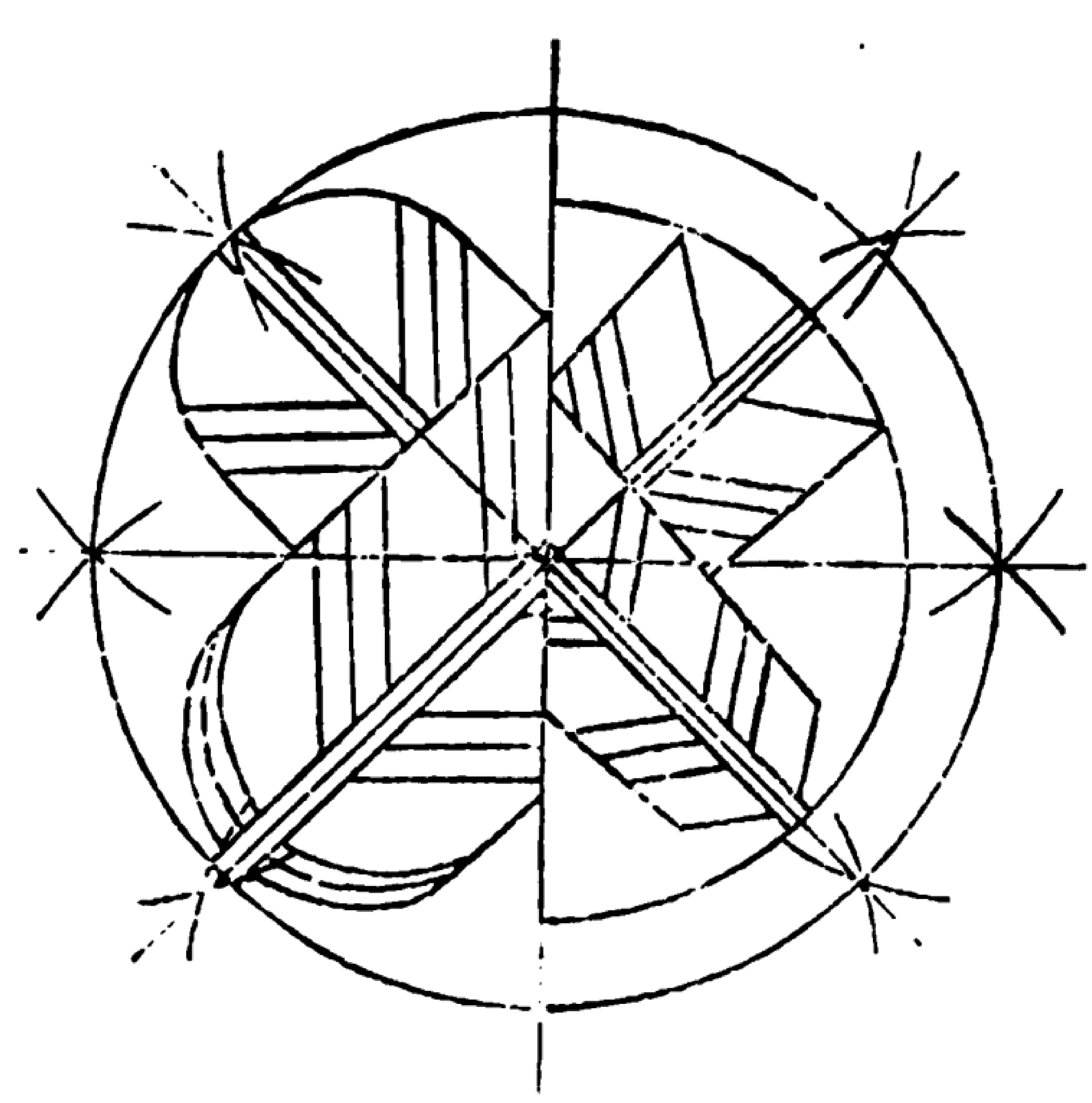


四方もつかう

四つ目

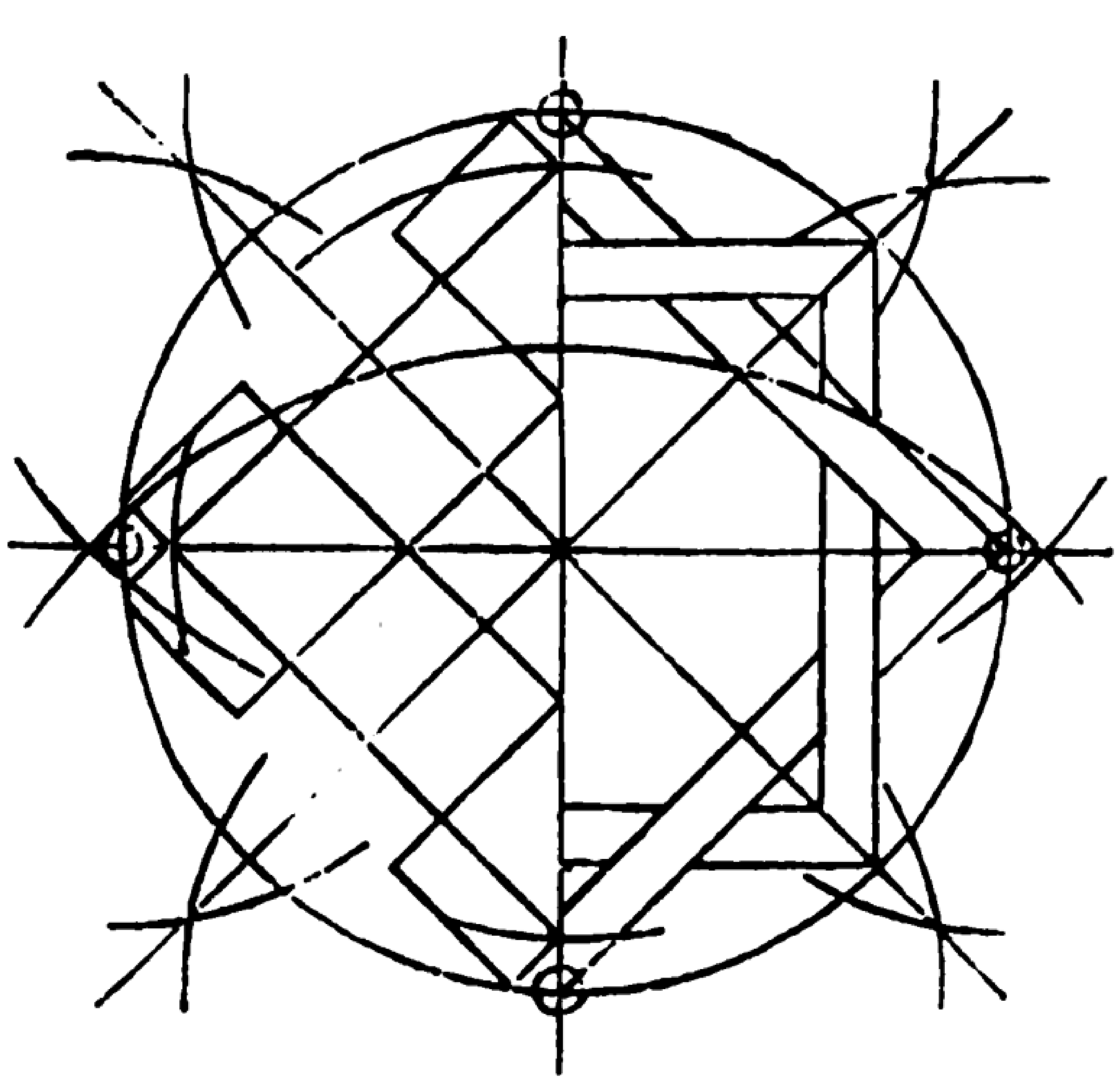
ちがひ矢

ちかひたかの羽

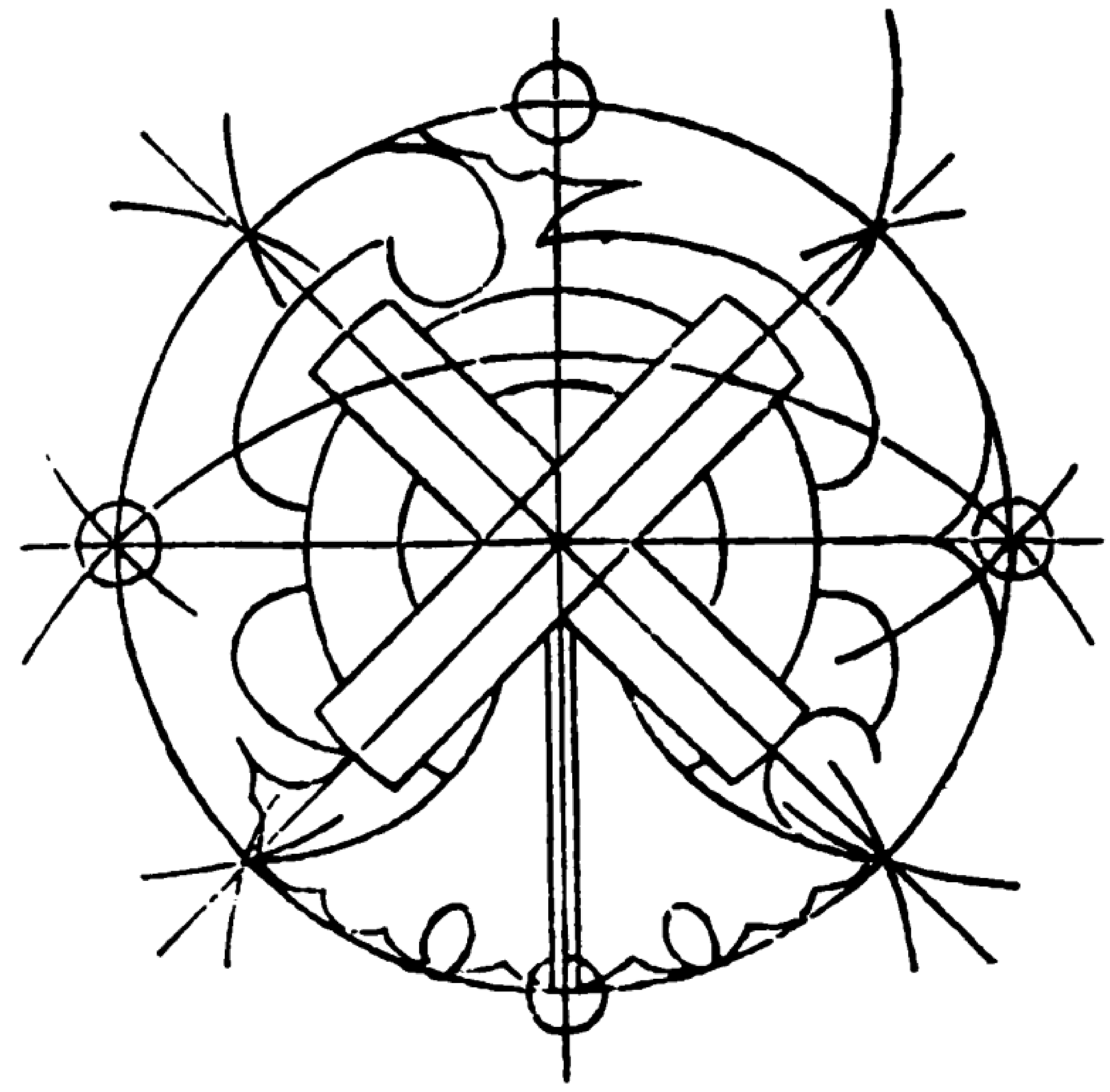


八つ花がた

井づく

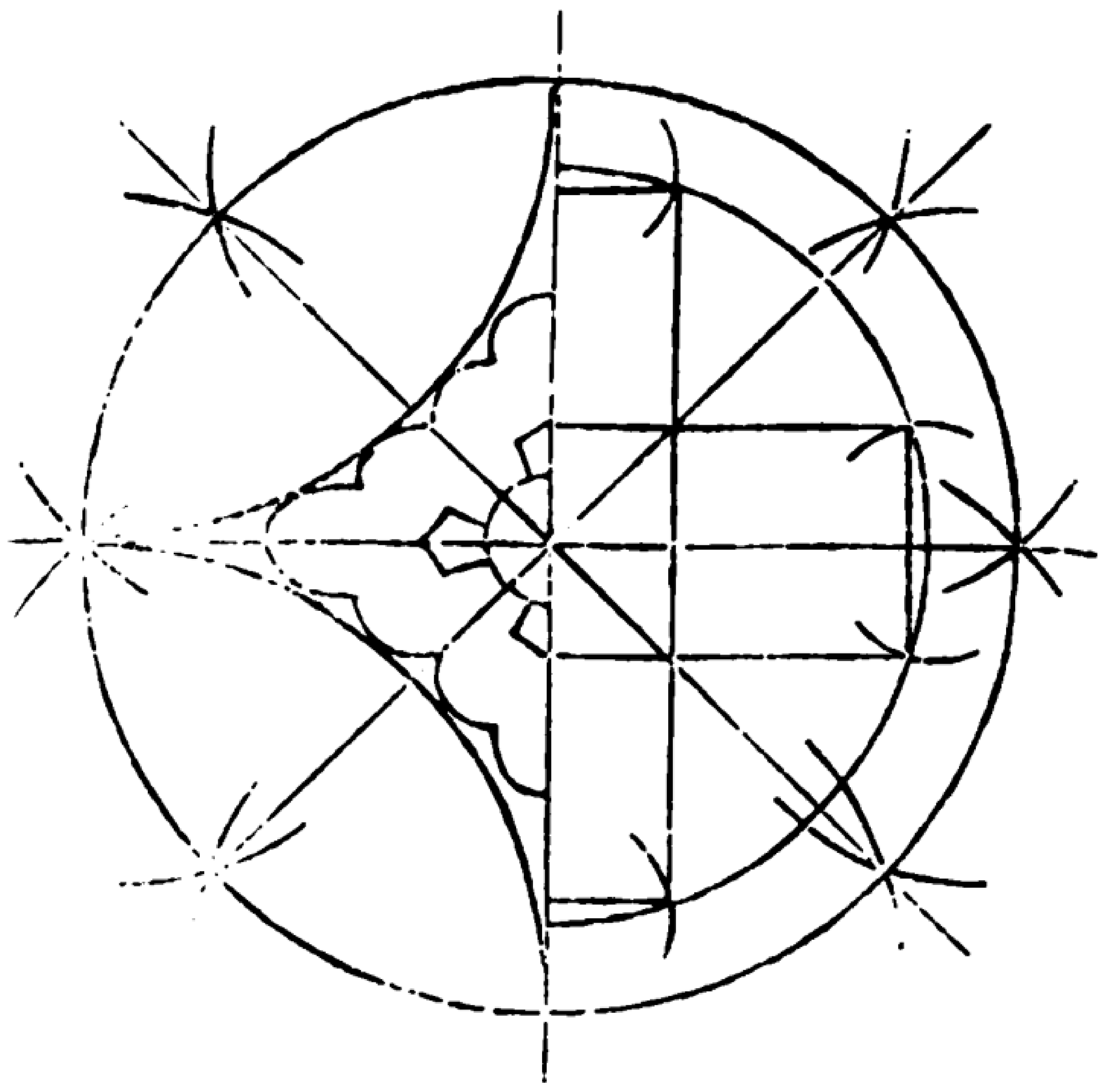


ぎをん守

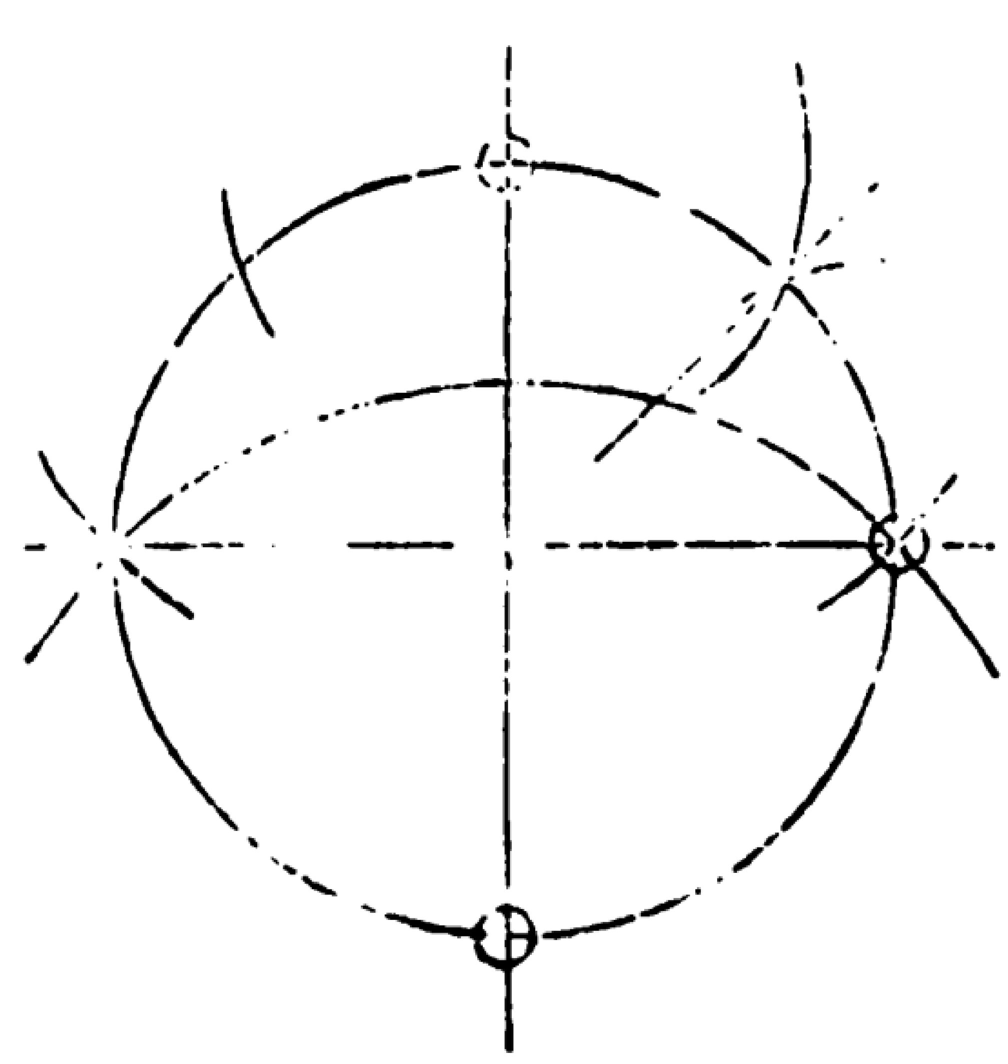


四つ切いし

花わちがひ



右の類は此の割りかたにて書くなり、前に在る二つもの(四つ割)の間を圖の如く割れば八つとなるべし。



割り方は兩方よりかゝるなり、圖を能くかんがへ合すべし、割り過しにてもあまらば減すべし、少しにても不足なれば其の心してたすべし。

ねずみの談

樂翁公

ある商人ありけり。樂みあそぶ事もなく、たゞあまた鼠をあつめて愛しけり。ある日、其のねずみあるじの手をかみたるが、毒氣支躰にめぐりて、發熱甚しく、紫色の斑文躰をめぐりたり。そのあるじ、鼠にむかひて、予汝を愛す、汝予をかみて、かくの如くなやめども、予汝をにくまず、汝何ゆゑにわれをかみてかくなやましてもいやさんともせず、くゆるけしきもせず、いかなる心ぞへにやあさましと、誠に人にいふ如くうちむかひて言ひたれど、鼠うち聞きたるさまして、それよりいづくへか行きけん見えず。あるじは其のなやみにて、枕によりて、ねぶれるに、その疵に何か冷かなるものれしわつるやうに覺えて、目さめたれど、彼の鼠、草の葉をくはへて其の疵にれしわつるなり。されど、この草よく毒を解すためと思ひて、其の草汁を疵につけ、草もて其の疵をれはひ、其の草をせんじてのみたれど、毒氣、忽解して癒えぬ。其の草は、紀の國より、蜜柑の實にまじへ來る、石菖てふ草に似たるものなりとぞ。

この事つくり物語のやうなれども、左にはあらず、近き頃の事にて、其の商人ものがたりありて、其の人にねもごろなるもの、名さへいひてかたりしといふを聞きしなり。（退閑雑記）

東京二十四景（八）

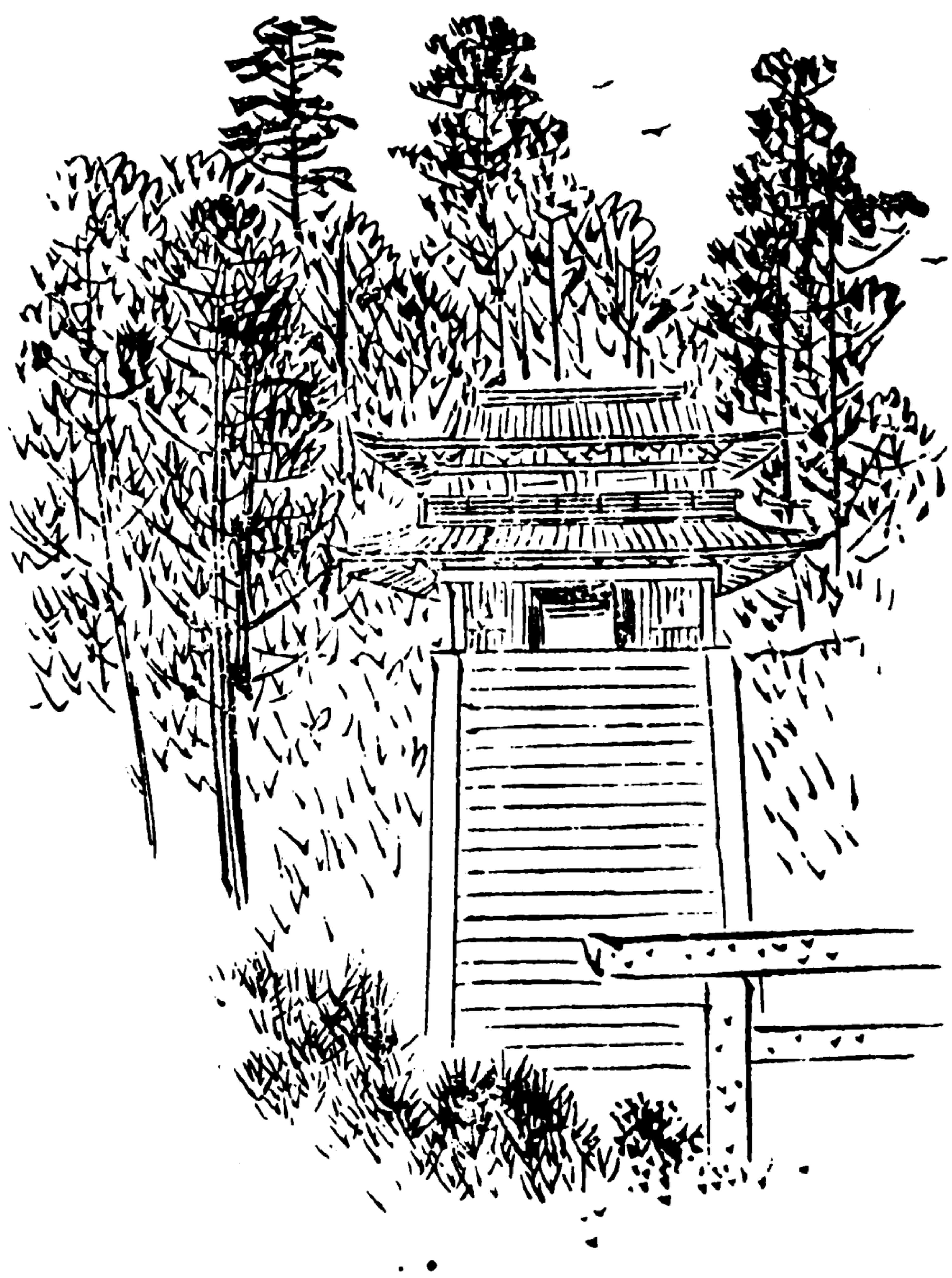
蓬生屋女史

山王山

むかし玉川上水のまだ江城に引かれざりし頃、用水

に用ゐられしと云ふ溜池、今はその形を變へて、たゞ一條の堀となり、水もいたく濁れど、その上に峙てる山王の山は、今に依然として、都の中に鬱蒼たり。こゝに祭れる神の社あり。日枝神社といふ。官幣に列せる社にして、大山咋神を祭る。げに東京一二の大社なり。古木陰森として何となく神さびたり。輪奐宏壯、丹碧焜燿として、流石は鎭國利民の神とこそは仰かるれ。本堂より直に降る急なる石段を男坂といひ、横にうねりてやゝ平かなるを女坂と云ふ。何處の神にも剛柔二つの道を以てまづ男女の性を示し玉ふ神々の御敎へぞかしこくも、ありがたくも仰がれぬ。鳥居は上の方こはれたちて、たゞ柱の半ばなるが立てり。こは一昨年地震のわざとぞ聞えし。

鳥居前の道路の両傍三四丁がほどに、並び植ゑられたる櫻の老木は、年々にいよ〳〵花のまさり行くも



めでたく、山上より見下ろしたるながめは雲とも見ゑず、雪とも思はれず、たとしへなくうつくしき

に、永田町平川町わたりの近き山々、またその名にれひたる霞が關わたりの遠くかすむもめもはるなり。花の頃はさるものなれど、月、雪、紅葉、何れもめづらしきながめならぬはなし。山高けれど殊に暑を避くるに便よし。やんごとなき人達のまとゐするには茶寮あり。星岡の茶寮とて其名世に高かり。又掛茶屋もありて、綠陰の下に蟬時雨を聞きつゝたゝずめば、そゞろに夏なき心地すべし。麻布、赤坂、麴町諸區の岡々を見わたす眺いとめでたし。今の皇太子のいまぞかる赤坂離宮いと尊く仰がる。又遥に富士の山を望むなど都に稀なる眺めなりかし。そも此の社は、古へ淳和天皇　天長七年、慈覺大師勅によりて武藏の國入間郡仙波にある所の星野山無量寺を再興して、圓頓の敎法を弘めしころ、佛法王法護持のため、かつは和光の利益を普ねく萬民に蒙らしめんと欲して、我が立つ杣の日吉山王二十一社上中下の中より一社づゝを撰びて、三所の靈神を彼の地に勸請し給ひ、かくて星霜を經たりしに、文明中大田道灌、此の山王三所の御神を星野山より此東京にうつし奉りたりしなりといふ。ゆかり久しき御社なり。なほ玆より程遠からぬ紀尾井坂の下に大久保利道公の墓あり。こゝは躑躅の名所なり。英雄の熱血、思ひやられていとゆかし。

朴平（六）

白魚女史

歌へや舞へよと、花鳥のうつくしき聲に、胡蝶のやさしき袖さへ、ひら〳〵と舞ひ狂ひて、此處はなやかににぎはしき春野の座敷。今日は與風が廿七年前の今月の今日、世に生れ出でにし日。未だおつば

れ家をも起し、身をも存分立てしと云ふにもあらねど、祝事などと云ふもはづかしけれど、親のたまはりし身體、幸に世にあらんかぎりは、生ひたゝせ玉ひし幾年の星霜、たゞ忘れぬためのわすれ水くまゝほしく、つきては、和殿と共ならでは、何となう、傍へさびしき心地ぞせらる、勉強に余時もなき君にもあらんが、今日のみは、まげて〳〵此車にのりて、直ちに、尤も兼ねてより御約束はかたくなしあれど、書には前後も忘れ給ふ君なれどとて、手紙にそへての車夫に口上、此の車にてすぐにと、わざ〳〵車をさへにさし向けて、文雄を第一の座に迎へたる宴會。文雄も、隔てぬ中。さのみあしくは遠慮せず。手をとりて強ひらるゝまゝ、上座に通りて、床のあたり見廻せど、兼ねて興風の父なる人が、いたく秘藏したるときゝたる狩野何眼とやらんが、友鶴のうち群

れて、小松が野邊の空ちかく舞ひ遊ぶを寫したる二幅對の掛物、掛けたる前に、これもまた父が二つなくめでたりと云ふ七寶燒の花瓶に、あふるゝばかりに黄菊白菊の大輪なる花を豊かにさしたる中央に、父と母との位牌さへ高く押しなほしあるに、文雄はいざり出でて、暫く心に唱名すれど、已が親のありし世さへうかび出でゝ、そゞろに胸のせまりてればゆるも、げに人のまごゝろなるべし。やがて、はこび出る酒肴。興風は文雄にさし向ひて、よくこそ來て玉ふたれ。友がひのうれしさよ。いで今日は無禮講、どなたもみな禮儀うちすてゝ、うちとけて皆くみくれ玉へとて、已れまづ一ぱい傾けて、君ばかり畏き故に、案じてありしぞ、伊能知君、君こずば酒も飲むまじと思ひぬと云はゞ、心おしくする君達のあるもはからねど、何も何も二つなき伊能知

君の事なれど、ゆるし玉へとて、春野が例の快活げに云ひ出る言葉。誰かは恨みん。一同笑ひをゑへて、共にさし上ぐる盃のかげ、また二ゑきりにぎはしき歌姫の聲に、ちら〳〵とちり亂れて、蝶か花かゆら〳〵とひるがへし舞ふ袖の匂ひもことなり。

かゝるやさしき歌姫、舞姫をさへたのみて、はでやかに開きたる祝宴、そも、輿風、誠に一身を祝ひてか、よろこびてか。よろこびのあまりに、うかれ出でてか。いな、中〳〵にわが身一つを祝ひてにもよろこびてにもあらず。まして、うかれ出でゝのすさびにもあらず。たゞ〳〵文雄があまりの書僻、かくては命もあやふからんと思へど、友の信情そゞろにいとをしく、まして此頃の老僕朴平が、わけくれ、れきふし、現に、ゆめに、忘るゝひまなき物思ひ、よく〳〵思ひ亂るれど、輿風を見るより、いつも老眼をしばたゝきてのこらへぬ涙。やがてゆかん後の世までもに、かゝるうき雲となるは、主君の御身の上とぞかり、むせび入る老僕の心もいぢらしく、かつは、文雄が母のありし世にたのまれし事さへあれど、物云ふ花などにそまんと思ふ文雄にもあらずとは、かねて知れど、せめて心うきたゝど、文雄が心、文のみならで、折り〳〵の花に鳥に、もしや心の誘はるゝ事もあらんかと。思ふまめやかなる友情より、わが誕生にことよせての今日の遊び、料理店にて開くぞ安きを、さりては、文雄のうけひかぬ事もやとて、わざ〳〵家にさへ招ぎたる輿風の深き心、それとも知らぬ文雄は、たゞ靜けく、細かに、こみかはさむことゝのみ思ひて、讀みかけし書物を殘り惜しくも、そのまゝうち捨てゝ來りしに、思ふに似ざるたはれたる酒宴のさま。猫とか狐とかいはるゝいや


松亭



しげなる動物が、あやしき手振をし、あさましき聲音をふりたてゝ、人の前をも憚らず、あさましき亂曲亂舞、失敬なる振舞ひ、何とせし興風の心ぞ。もとより、さしては好まぬ酒、親をわすれぬ水と云へむころ半こんはと思ひこしたるに、かゝる物ぐるはしき狂水、たゞにがくしく、あさましくのみれば、ねて、興風の面、きつとうち守れど、此方は例の快活げなる容子、やよ、小千代の子よ。此の盃、其處なる君に參らせよ。のう伊能知君。その子は商賣がらにも似ず、はづかしげなる子にはあらずやなどしきりにむくる言葉に、いよ〳〵はらだゝしさまさりて、答へもえせず、盃もとらず。たゞこわげににらみつくれど、はいとやさしげにいらへて、酌に立ちし子も、取りすがるべき方もなく、そのまゝおきつぎなして、よき程にしさりのけど、三筋の糸のたえまにや、すべり出でたる老藝妓の小蝶、あな旦那樣のいたう用心のよささよ。こゝらは田舍、火事などは祖父樣の御代に、狐火に、向ひのお山が燒けたとかいふばかり。やう〳〵蚊も居らずなりしを、またわき出でゝは困るに、妾にたべ給へとて、ゆるしもせぬ盃、とりて、のみほすに、おのれ猫ども、何處まで人をおろかにはするぞ、かつとばかりせきこみて、打ち倒さんとするかとばかり、其場にもつとたちかかりて、そのまゝ歸らんとするを、あわてゝ押しとむる興風言葉をつくして留むる人々、はては歸さじとすまふ小蝶に、文雄はいよ〳〵はらだゝしさまさりて、己れ毛物、そぞによりそと云ひさま、床にすゑわりし花瓶、とるよと見るほどに、小蝶めがけてうちつくるに、小蝶は辛うじて逃がれたれど、花は無殘、花瓶諸共に散りみだれて、漲る水に落花狼籍、

邊り近く侍りし小千代は、迸る水と共に、わが袖にちりかゝりし花の一片、さわぐけしきもあらず、あないとほしや、人に罪はあらむとも、この花には罪もなきものを。ふびんの濡衣やと、やさしき手先に取りあげて、につことほゝ笑みたるけしき、文雄は何ときゝけむ、思ひけん、そなたうち守るばかり。

文林



秋旅行　　徳大寺實則

野邊の花山路のもみぢかざしつゝ
たびは秋こそたのしかりけれ

水上月　　東久世通禧

一度はあまりと驚きたる興風、何事も僕の失策。人々もさわぎ給ふな。伊能知君、わびは何れ後日にすべけれど、今日ばかりは心よく、今一こん、心なほしてと、なほのどかなる春野の振舞。文雄も、今更に己れの無法なりしを省るのみ。

すみ田川みちくる汐にさすつきの
たゞよふ影のさやかなるかな

晴夜月　　近衛忠凞

久方のほしのかげこそきえにけれ

すみまさりゆく月のひかりに

秋月勝春花　嵯峨實愛

はしが岡花にあそびしはるよりも
月あはれなる杜のしたかげ

松上秋風　鍋島直大

紅葉のふくあきかぜにちるなべに
まつのみどりぞ色まさりける

秋望　前田利聲

ひぐらしの鳴やこずゑの霧はれて
野ずゑさやかに見えわたる哉

秋風漸寒　長谷信成

けさ見れど垣根のまはぎ移ろひて
北まどさむくあきかぜぞふく

秋旅　諏訪忠元

秋やまのもみぢふみつゝゆく旅の
うきことしらで樂しかりけり

水邊女郎花　宮地嚴夫

川ぎしにさきて匂へるをみなへし
みづのこゝろに靡きがほなる

秋夜長　小出粲

かゞり火も桶火もいらぬ此ころの
秋の夜なかぞたのしかりける

月下遊　鎌田正夫

花すゝきまねくところに休らはん
のずゑのやまに月いでにけり

志摩の國あのり崎といへる所にて　三浦千春

玉もかるたふしの崎もはる〲ど
見えこそわたれしら浪の上に

うころ燈明臺あり　仝

なだ渡る船のしるべにともす火も
みよのひかりの一つなりけり

初秋荻　林　甕臣

物思へとわが身一つに吹きせまる
れとにもわらぬを荻の上かせ

秋風　仝

ほづもりの夕日したしくなりに鳬
にはかに寒しあきかせのそら

菊　三輪義方

きくの花さける園生はゆふかけて
月とゝもにぞとふべかりける

故郷撫子　柴田靜榮

ふるさとの垣ねの跡やこゝならん
やつれてさけりなでしこの花

軒秋風　鍋島榮子

窓あけて見るはた寒くなりにけり
のきのしのぶにかよふあき風

庭上月　前田朗子

陰くらきにはの木だちをもる月は
くまなきよりもさやけかり鳬

海邊夕雲　柳原愛子

波の上に匂へるくものひとむらは
いりし夕日のなごりなるらん

遠望山水　千種任子

山かげの小川のながれきりはれて
あみうつかげも見えわたる哉

硯　園祥子

廣からぬすゞりの海もなかなかに
渡るはかたきものにぞ有ける

寄月花祝　姉小路良子

春あきに富たる御代はつきはなに
あそぶさかりも久しかりけり

都　税所敦子

いつくしみ八洲に餘る御代ながら
猶すむべきはみやこなりけり

國府津の別業にて　伊達泰子

もしほたく海士の磯屋の軒端まで
日の大みはたひるがへる見ゆ

秋草さきみたれたり　高崎竹子

行みちもわかぬばかりに秋ぐさは
れのがさまざま咲みだれけり

庭萩　梅津眞澄子

花さかばれのがかざしに折てまし
淺茅がにはのはぎのひともと

風前薄　諏訪晴子

はなすゝきほにいでしより秋風の
ふくにまかせてうち招くなり

野虫　海上菁子

糸すゝき亂るゝ野邊によもすがら
はた織むしのこゑきこゆなり

庭に萩をうゑし夜によめる　内田ふじ子

移し植し小はぎが中にきり〴〵す
野べに聞きつる聲になくかな

初秋月　安東菊子

糸すゝきほのめき初むるゆふ月の
かげこそ秋の始めなりけれ

夏旅　清水ゑつ子

夏の日のあつきにつけてつくし潟
日かずもれほく徑る旅路かな

熊本にかへる道すがら香推驛のわたりを過ぎて

宗村信喜

こゝは名におふ筑紫潟　香椎の浦ときくからに
窓おし開きて見上れば　しほひの方にあら鷲の
八重の鹽風羽にうけて　あさる姿のおそろしや
河の憂瀬にあらなくに　こゝも仇浪さわがしと
おほき少さき魚どもも　もし靈あらば弘安の
昔やおもひおこすらむ　廣野のかたを眺むれば
並木のあたり風ふきて　遠近なびくはたすゝき
騒がしかりし其の上を　しばし忍べと招くなり
海面いかにと見遣れば　海士の小舟の行かひて
白帆を高くかゝげたる　敵の艦隊と見てましや
おきつ鷗の飛びかふは　今や攻めくとまかふ覽
八鬼くるふか浪のおと　さけぶがごとき松の風
きしる車のかしましく　天地も震ひとゞろくや
彼の弘安のたゝかひを　面の當り見る心地して
あな面白のながめやな　かたへに坐せる旅人も
なに忍ぶらむ聲も無く　しをるゝ見れば彼も亦
心なきにはあらざらむ　むかし聖のをしへには
治れる世にありとても　ゆめ亂をはわするなと
言ひてし事の侍るなり　いま浦安のやすき世と
うたふはしらぬ雅男ぞ　艦隊あまた增しくはへ
陽には國のかためとし　陰に東洋に派けんして
すきをば狙ふ國もあり　くろがねつたふ小車の
早くも道はひらけしと　祝ふはをこのしれ言ぞ
蝦夷か浦わの島じまを　廻りて利をば占むと云
萬難辛苦をよそにして　吾がくまぐまを窺ふは
八重の鹽風羽にうけて　あされる鷲に異ならず
あな恐ろしの此世やと　梓の腰のをりしもあれ
空に汽笛のおとたかく　箱崎と呼ぶこゑすなり

月夜にそゝろありきして　三輪義方

面白き夜のさまにひかれて、ふと門のとに立出でしを、少しさし歩む程に、[illegible]けり。堤の薄露重げに見えて、そこはかとなき虫の聲々、打しきり　ゐぐひにあたる浪の音の、さびしく聞ゆるは、夜も更ぬるなるべし。月はいよ〳〵すみわたれるになは田づらの方へ、あくがれゆけば千町の穂浪、さやかに見渡されたる、一村茂れる森の木立の、[illegible]ほのかにきりわたれるなど、とり〴〵にをかしうて、いひしらず哀なれど、我ながら、家路も忘れてなん。



●れはみめぐみ　地震ふり、あらき風、洪水の災にかゝりて、たしなむさまを、きこしめさせ給ひて、かしこくも、天皇　后宮両陛下あはれとればし給ひて、物をたまひてめぐませ給へるは、愛知縣下へ、金四千五百圓●京都府下へ、金四千圓●兵庫縣下へ、金二千五百圓●三重縣下へ、金六千圓●滋賀縣下へ、金七千圓●岐阜縣下へ、金一萬圓●福井縣下へ、金二千圓●秋田縣下へ、金

五千圓●大坂府下へ、金二千三百圓●奈良縣下へ、金二千圓。

●東宮殿下かへらせ給ふ　皇太子殿下には、去し七月ごろより、下野の日光山に暑さをさけさせ給ひしが、去し廿六日京に還らせ給へり。この日滊車に召させ給ひしが、御路すぢの驛々にては、官衙學校をはじめて、恭しく送迎し奉り、上野の停車塲には、小松の宮、閑院の宮をはじめ、各大臣以下みな迎へ奉れり。

●皇太子殿下靈茸をめでさせ給ふ　さきに日光にれはしゝころ、そこに住める鈴木某といふもの、日光栗山といふところより、萬年茸を得て、これを献れりといふ。こは稀代のものにて、長さは三尺ばかり、はゞ四尺、重さ三貫目もありて、光澤いとうるはしといふ。殿下には深く愛でさせ給ひて、御菓子をさへ賜はりしとなん。

●御歌會　去五日宮中にて、御催しありし御歌會御兼題、孤島殘月の詠進の和歌は、

霧はるゝ沖の小島の松の上に
　ひかりは消てのこるつきかな　高崎　正風

いきつきの島山松のかげみえて
　月かげのこるにしのうみつら　松浦　詮

船窓をれしわけ方の沖みれば
　はなれをしまに月そのこれる　大谷　光尊

しらみ行はなれ小島の波の上に
　なほよをのこす月のかげかな　梅溪　通善

波あらきはなれ小島の松の上に
　のこれる月のかげあはれなり　清岡　長說

打わたす離れ小島にかゝりけり
　影もかたふく有明のつき　水野　忠敬

沖遠きはなれ小島の松みえて
　波間にしづむあり明の月　梅溪　通治

沖つ風波うちよする島かげに
　しらみかねたるありあけの月　町尻　量弘

和田中のはなれ小島の松の上に　隆元
のこれる月の影のあはれさ

ほの〲と波ち靜かに明そめて　樹下範子
沖のこじまに月そのこれる

漁火のひかりは消えてわたの原　小池道子
しらむをしまに月ぞのこれる

ぬば玉のよは明はて丶渡つみの　北島いと子
沖つしまねに殘る月かけ

いる月も導にしてやたどるらん　黒川眞頼
明け行く沖のはなれこじまを

書がくとも筆もおよばじ沖遠き　鈴木重嶺
はなれをしまの有明の月

あはれさを何に譬へんわた中の　清岡長言
小島のまつに殘る月かげ

秋風にしほけは晴てありあけの　坂正臣
月さやかなり沖つしまやま

鳥だになかぬ小島のまつの上　小出粲
わけのこりたる月のしづけさ

和田のはら沖の小島に月たちて　鎌田正夫
帆かけみえ行あさぼらけかな

月はまたはなれ小島に殘れども　千葉胤明
沖遠白しよやあけぬらん

唐人もをしとやみらんさつま潟　鶴久子
おきのこじまの丶こる月かげ

●賤か女　天恩を忝なむ　天皇陛下には、こたびの水災に、いたく大御心をなやまさせ給ひて、東國侍從をして、そのさまを見せしめ給ふに、侍從尾張の國に下りて、海西郡末廣新田の堤防をゆく、途にいといぶせき伏屋あり。三十路ばかりの賤が女裁縫に餘念もなかりしを、見て水災當時のありさまを問ふ。女はさる人とも知らで、臆するけしきもなく、ありしやうを物がたれり。さてそこの郡長、こはこたび　聖上陛下の大御言をうけたまはりて、けふ侍從どの丶下られしよしをいひきかせければ、女ははじめて、かくとしりて、その大みめぐみのかたじけなさに、たゞはら〲と涙をおとして、しばし頭も

ねもたげざりしとなん。

●南州翁の二十年祭　西鄕南州翁、世を去りてより、ことし二十年に當れるをもて、河村樺山の兩伯の發起によりて、去し二十日、上野公園にて、さかりにもよほされたり。來會者は南州翁の未亡人、嗣子寅太郎氏及夫人、一族及緣故あるものをはじめて、無慮六百餘名なりしといふ。かくて、子爵黑田淸綱氏及福羽美靜翁の手向られたる和歌は、

南州翁の二十年祭に、懷舊のこゝろをよみて手むけ侍る

源　淸　綱

年を經ていよ〳〵戀ひしいまの世に
ませばと思ふことのみにして

上野なる西鄕隆盛君の祭にのぞみて、その油畫肖像を拜して、

わがごと生けるが如く見るからに
いとゞぞおもふ君がむかしを

美　靜

●きくがまゝ　このごろ山陽地方より上り來れる人ありて、語りけらく、わが地方にては、文よむ女ある家の門には、ありふれたる小說本は、必ず入れぬことになれりといふ。」さもあるべきことなり。今世に流行する小說といふもの、おほくは人の愛といふ情をかきうつさんとして、かへりて、あらぬ男女のなかの痴情をかきあらはして、したりがほなるが多かめり。かゝるものは害ありとても、益はなし、これらは外國ならば知らず。我が國ぶりにとりては、いとふさはしからぬものにて、忠孝仁義の道にもとること遠しといふべし。必正しきを主とし行を愼まざるべからざる女のよむべきものにはあらざ

るべし。このごろ幼きより深く小説に溺れて、遂に身をあやまれる女もありときく。心をしかとしめて、ゆめなまよひたまひそ。

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

去りながら、是は一々廉を分けて申すと云ふ程のことでもござりませぬで、先づ大概は同じく女子に關しまする事に付て述べ、或る部分に付ては、格段に其人々に付て言ふ樣なる事に致しませう。一躰女子の教育、並に位地其他の事に付きましては、世界各國とも甚だ困難に感じて居るのでござります。現在の所に於きましても、各國とも種々な議論があるといふ樣な次第であります、去ながら、西洋人の是まで書いたものを見ますると、隨分東洋の婦女子といふものは、甚だ位地の低いものゝ如くに二束三文に書いてあると云ふ樣なことが多い樣でござります。是は大きに事實に違つて居る所があるのである。其西洋人抔の書いたのを見ますると、極くの未開の國に於ては、女子は仕事の奴隷といふ樣に扱はれ、又東洋一般に於ては、人欲の奴隷といふ樣な風に扱はれ居るといふことを書いて居ります、實は皆さまの前でさう云ふ事を申しまするのは、甚だ申上げ惡い樣なる事柄であり升るけれ共、隨分さう云ふ樣なる觀察を下される樣なる時勢も是までであつたのである。女子の一番位地の高いのは、歐羅巴は勿論、亞米利加に於ても同じことでありまして、實は亞米利加の方がもう少し歐羅巴より進んで居る位、勿論今日の樣なる有樣では以前からは無かつたので、今日の情況に達するに於きましては、隨分種々の歴史もあつたもの

である、又現在の今日に於ても種々の議論がある樣なる譯でありますが、退いて日本の是までの女子の情況を見ますると云ふと、西洋人の想像致し居つたよりも遙かに違つたる名譽の位地を占めて居つたと言つて宜い樣であります。東洋に於いては、印度其他の事を段々聞いて見ますると、隨分宗旨其他の關係、主として宗旨の關係からして婦人の境涯といふものは憐れ果敢ない樣なる有樣である。兄弟同士でも、例へば兄は弟の妻に遇ふことが出來るか弟は兄の妻に遇ふことが出來ない、女子は外へ出るには罪人を搬ぶ樣に目無籠にでも乘らなければ搬させぬ。是は極く下等人種の事は申しませぬ。相應に地位のある者の事を申すのであるが、皆顏を包んで、決して人に見せない有樣であります。即ち一室内に閉込められる、又支那に至つては、其起つて來たる原因は少し違ふけれ共、其實況に於ては、士君子の妻たる者の境涯は印度と相距る遠からざる有樣である、甚しきは、支那の婦人滿州婦人は違ひますが固有の支那の婦人の足の如きは、全く子供の時から縛つて、馬の足か何かの樣にして、歩く事も出來ない樣なる身躰の上の不自由までもさせられて居るのである。是等は宗旨抔から來た譯ぢや無いけれ共、或は流行、或は女子は幽閑貞靜といふ事を尊ぶことと其度に過ぎて、一室の中に閉籠つて日の目を見ないが宜しいと云ふ樣なる誤つたる解釋上からも來たやうなる情況もあるので ある我日本は、古より決して夫れ程の事はあつた事は無い、古い記錄抔を見ると云ふと、日本の女子の一身の動作に付ては、決して右樣の束縛を受けたことは無いのである、（未完）



教の庭

十月五日兼題　深夜擣衣

天　東京　西村登羅子
さやかなる月の影をも巻きこめて
更けゆく夜半にうつきぬた哉

地　筑前嘉穂郡飯塚町　林久子
月見つゝ更くるもしらて遊ぶみを
いさめ顔にもうつきぬたかな

人　下野國栃木市萬町　前澤幸子
衣うつよそのさむさもさよ更けて
思ひやらるゝつちのれとかな

秀逸　（十三首）

さよふけて夜寒の風の身にしめは
つちの音しけく衣うつなり　河田ふく子

長月のなかき夜すからくりかへし
更くるもしらて打つきぬた哉　柳田さと子

かたしきの衣手さむみ更くる夜は
なれても淋しをちのきぬたの　諸井くら子

きゝなれし身にも哀れと覺ゆるは
さ夜ふけてうつ擣衣なりけり　山崎ゑつ子

さらてだにね覺かちなる秋の夜の
まくらに響くさよきぬたかな　服部かつみ子

てる月のかけを見る〳〵賤のめは
ふくるもしらてころも打らむ　名取正代子

ゑつのめかしつはた衣小夜ふけて
月にうつらんれとのさやけさ　香川穎子

中々にねさめのともとなりにけり
長きよすからころもうつこゑ　眞鍋直子

小夜ふけし砧のれとにれはかたの　守山比古子

秋のあはれをとめてこそきけ

ふけて猶つちの音高しさよころも　河野　文子
つまこひつゝやうち明すらん

秋の夜の更け行くまゝに唐ころも　近森のぶ子
うつれど高くなりまさるなり

ふけてゆく月をや賎もうらむらん　降田　槇子
みたれかちなる小夜きぬた哉

さらぬたにねられぬ物をさよ更て　廣田とめ子
音もさひしくころも打つなり

（以下原稿到着）

秋のよのふけゆくまゝにきこゆ也　住山　幾子
とはやまさとにころもうつ聲

きくにさへ秋の夜寒の身にしみて　小野田くに子
山田のきぬたうちもたゆます

ね覺してきくとはなしに秋の夜の　貫井そめ子
更くるも忘らて衣うつなり

月影のかたふくまとにひゝくなり　宇田川よし子
ふけゆくそらにころもうつ聲

更くる夜もなほ怠らすしつの女か　小野田かま子
衣うつなり志賀のみやこに

夜を寒みをちのきぬたの音すらも　小野田さく子
手にとるはかりきこゆる哉

吹く風にあはれをそへてきこゆ也　小野田ひで子
更くる夜忘らてころもうつ聲

ふくる夜の月影さへもひゝくまて　岩崎ふく子
きぬたの音そ身にしみわたる

虫の音もたゆはてたりし小夜中に　小玉きん子
ひとりきぬたの音のさひしき

つく／＼と思へは今宵しつの女か　宇田川うめ子
更くるも忘らて衣うつなり

こほろきの聲も細りて更くる夜に　太田やま子
それかあらぬか衣うつなり

ぬは玉のやみにも妹かこゝろには　貫井たま子
ねられぬものと衣うつらん

さよふかくなる海の浦に賎の女か　小野田きよ子
ふくるも忘らて衣うつなり

月さゆる夜半のねさめに聞ゆるは　安井　章子
とほさと小野の擣衣なるらん

まきかへしうつや擣衣の音たかり　佐々有鄰子
ふけてつゆけき秋のそらかな

むしの音もよわる夜さむに淺茅原　岡田よね子

いかなる人のころもうつらん

寐覺せしまくらに音そきこゆなる
ふけても賤やころもうつらん　永井さい子

さよふけてかたふく月に虫のねも
絶えてきぬたの音のみする　羽田三緒子

月にうてと誰か敎へけん唐ころも
うたぬ夜もなしたまかはの里　高橋てる子

さよふけてかたふく月に賤のめか
淋しさ添へてころもうつなり　溝口信子

曇りなき月にうかれてしつのめか
よふかきまてに衣うつらん　溝口秀子

さらぬたにかこつ長よも心せて
たかとは妻のころもうつらん　溝口奈保子

さよふけていつこなるらん遠砧
打ちもたゆまぬ音のさやけさ　西村菊子

さよふけて音さやかなる槌のねは
月みかてらにころも打つらん　秋園菊子

さよふけて音さやかにも聞ゆるは
かつらの里にころもうつなり　秋園露子

なく鹿のこゑも折り〳〵交りけり　楠精子

よふかき里にきぬたうつれと

打ち合はす擣衣の音のみたるゝは
秋のこよひもはや更けぬらん　木村兼子

行く水の音にきゝはひてさよふかく
ころもうつなりたまかはの里　倉山道子

冴えわたる月の光にさよふけて
きぬた打つなりたまかはの里　島田好子

そこ清き水にやどれるつきかけも
砕くはかりにうつきぬたなか　高橋信子

さなきたに秋の夜深はさひしきを
きぬたうつなりたまかはの里　根岸英子

しつのめかおきさりし衣よひ〳〵に
うつおとたかしたかしまの里　荒川清子

さやかなるつきの光にしつのめか
ころもうつなり川つらのやと　荒井波子

近くなりまた遠さかるたまかはの
きぬたは水にれとおはすらん　中島房子

衣かはふけゆくなみに音添へて
うつやしのふの衣なるらん　遠藤千勢子

さよふけて千度八千度ころもうつ　近藤鈔子

　れども身にしむ川添のやと

すみた川なかれも寒くさよふけて　白井　糸子
　せきやのさとに衣うつらん

小夜ふけていかたを下す音もなし　大森　純子
　ころもうつなりとねかはの里

秋風の身にしむ夜はに誰かいもか　井出すゞの子
　音もさやかにころもうつなり

この秋もよさむの風にふくるよを　河田いし子
　たゆまていそき打つきぬた哉

小夜更けて打つ音しけく聞ゆなり　舘脇ます子
　たか爲いそくころもなるらむ

小夜ふけし寢覺の床にきくときは　杉浦　糸子
　なれても淋しころもうつれと

賤の女か晝るのつかれもいとひなく　池谷とみ子
　秋のよふかにころも打つなり

たつくりやさらても秋は淋しきを　吾妻ちか子
　更け行く夜半に打つきぬた哉

秋の夜の更け行まゝに聲たてゝ　萩原　章子
　とやまの月にころもうつなり

小夜ふけて響くきぬたの音聞けば　植木とよ子
　こゝろさびしく覺えぬるかな

小夜ふけて擣衣の音をきゝしかば　石川すけ子
　ねむりもさむる心地せしかな

秋の夜はさらてもものゝ悲しきを　仁井田とみ子
　ふけゆく月にころもうつなり

さよふけていつこなるらんうつ砧　大島あい子
　ねさめかちなる枕にそきく

からさきのまつ風寒く小よふけて　吉川くに子
　しかのふる里ころもうつなり

玉川のみつにひゝきてふかきよに　西村　佳子
　ことさら淋しころもうつれと

つちの音も浦つたひして深きよに　水島　良子
　しほなれ衣あまや打つらん

木からしのもりのあき風音さねて　溝口　寛子
　よふかき迄もころもうつなり

さよふけて枕にちかくきこゆるは　成田　延子
　ことさら淋しころもうつれと

さよふけてつきの桂も散らんかと　小川　金子
　あやふむ迄にうつきぬたかな

ふきおろす峯のあき風さむきよに　小川　富子

しけくきこゆるころもうつ聲

月影もいつしかふけてよもすから
ころもうつなり川のへのさと　浦島　龜子

すみた川よ舟もさむくをちこちの
里のきぬたのおとそきこゆる　長島　綾子

みつくるまきしるれとする里河の
向のさとにうつきぬたかな　島田　常子

さえわたるつきに心も澄みぬらん
ころもうつなりしからきの里　島田　好子

小夜ふけて川邊にひゝく槌のねの
うつれと高したかしまのさと　町田　鶴子

ころもうつあきの夕はさひしきに
ひたらぬそてに濡るゝよは哉　神田　樂子

ふきすさむみねの嵐のれとやめは
衣うつなりかはろひのさと　青木　繁子

吹きわたる芦の夜風も身にしみて
ころもうつなりかはつらの里　越山　雪子

たえ〳〵と音もあはれに里ひとは
ひとり夜寒のころもうつらし　長洲餘野子

哀てふかきりなるらむさとびとの
ふけゆくよはに衣打つなり　藤林ます子

衣うつこゑのみたかくきこえつゝ
いとゝさびしき秋のよはかな　碓井　武子

さよふけて秋風さむみうちしきる
きぬたの音の身にぞしむなる　碓井わか子

澄みわたる月にふくるも白ぬのを
まき反しつゝうちあかすらん　瀬戸　榮子

さやかなるつきの光にをりはへて
ふくるもしらて衣うつらむ　小町谷里江子

更けぬるか月は外山にかけれちて
ゑはしきぬたの聲たゆみゆく　小町谷園子

小夜あらし挑めむこゑきる槌の音は
たか爲にうつこころもなるらん　橋宮　萩子

小夜更けて過き行く里は靜まりて
物のあはれにころもうつなり　白倉　柳子

ゆめさむるきぬたの音や秋の夜の
露にころものぬれまさるらん　今藤なか子

うたゝねに夜やふけぬらし遠近の
擣衣の音もたゆみてきこゆ　双樹家鶴子

聞くたにも淋しき物をさよふけて

ころも打つ人いかにあるらん

つきかけは松より西にかたふきて　横田須磨子
きぬたの音そたかく成り行く

賤の女もこよひの月やをしむらん　磯部都屋子
ふけゆく夜半に衣うつなり

たか里かよはの寒しろうちとけて　村松みち子
ねられぬまゝの擣衣なるらん

誰か爲にかくいそくらんさよ擣衣　野中あさ子
ふけわたれとも音のたえぬは

宵よりも音のまさりてきこゆなり　重松たか子
ねさめの里の小夜のきぬたは

から衣たか打つならむふくるよに　久松勢伊子
たゆみたゆまぬ音のきこゆる

誰か爲にうつ衣あらんかたむきし　星野かづ子
月のひかりにれとさゆるなり

遠きぬた月はいりにしあとあから　星野ひと子
うつ其の人のなつかしきかな

夜を寒みきぬたの音にゆめさめて　志貴一枝子
あはれ淋しきつきを見るかな

うたゝねに夜や更けぬらんから衣　日高こま子
打つれと高くなりまさるなり

終夜たゆます打つはをとめ子か　越井　道子
寒さにいろくころもなるらん

秋風の身にしむころはをちこちに　菅沼きよ子
衣うつありさよふくるまて

いねやらて物思ふ比はさよふけて　公羽　壽子
きぬたの音をきくそかなしき

ぬは玉のよふけてきけは哀れにも　公羽　龍子
いとなくしつか衣うつなり

さよふけてちゝに物こそ悲しけれ　細川　公子
きぬたの音にゆめのくたけて

虫のねもいまはたえにしまよ中に　細川　治子
きぬたの音のあはれなるかな

こほろきの啼音もたえて秋の夜の　高井　孟子
更け行く空にころもうつなり

小夜ふけてかすかに匂ふ月かけに　松岡　濱子
また賤の女はころもうつなり

てもたゆくなりや行らん更る夜は　青木　春子
賤かきぬたのれとたゆむなり

小夜深くふけしつまりてたゝ一人　小野田のぶ子

殘るきぬたのれとそさひしき

誰か宿か夜半にきぬたの音すなる　梨本　信子
夫やとりてにわたまもるらん

だがために衣うつらむさよふけて　北川はな子
たまてたゆげに音のきこゆる

吹く風のれとも淋しく小夜更けて　北島　松子
まくらにひゞく遠きぬたかな

秋風の吹きしく夜半のねさめには　北島みさを子
きぬたの音にものれもふかな

さよ衣をり〳〵れとのとたゆるは　北島　功子
たへぬれもひの妻やうつらん

さ夜ふけてつきもすみゆく砧には　岸　節子
いくその夢をれとろかすらん

わはれなり秋風さむみ小よふけて　彦坂たか子
寢さめのさとに衣うつこゑ

いくたひか夢碎くらむ小夜更けて　牧野　貞子
ねさめの里にころもうつこゑ

ねさめして思ひもしげき小夜中に　牧野　峰子
音もみたれてころもうつなり

うたゝねに夜やふけぬらんから衣　高田　清子
打つ音さむくみにそしむなる

ふけわたる夜寒の風を身にしめて　稻田　兼子
ねさめの里にころもうつなり

月落ちて夜寒まされはころもうつ　日野美稚子
音もいよ〳〵みたれぬるかな

うたゝねに夜やふけぬらんから衣　西元やす子
うつ音たかく聞えぬるかな

鳴く鹿のこゑ聞く頃やをちこちの　北條　桂子
きぬたの音も遠くなりぬる

聞きなれし擣衣の音も夜更くれは　田代　艶子
夢のまくらの音ひゞくなり

打ちしきる擣衣の音もれのつから　田代　綾子
靜になりぬ夜や更けぬらん

さよふけて稻葉の露やれきぬらん　鹽路花枝子
里のきぬたのこゑしめるなり

さよふけてきけは淋しな小山田の　山本　常子
わらやのきにころもうつ聲

もの思ふたか妻ならんれとさねて　山本のふ子
かたむく月にころもうつなり

此の頃のよさむの風にれとろきつ　山崎すゑ子

ふくるもしらて衣うつなり

小夜更けて砧のおとのしけゝれは
　いそかぬ人もねられさりけり　甲斐莊優子

松そよくかせたに秋はさひしきを
　ふけゆくよはにうつきぬた哉　田卷ひでよ子

秋のよのふけゆくまゝに聞ゆるは
　月にをとめのころもうつなり　花山保江子

風さむく月さえわたりあきふけて
　世はらの里にころもうつなり　花山操子

小夜ふけし擣衣の音に知られけり
　いぬる間もなき賤かくるしさ　及川千ひろ子

たか爲にうつにかあらん小夜更て
　きぬたのおとの數はそふなり　深見敏子

さよ更けて月の影さへかたふくに
　誰か唐ころも打ちかへすらむ　深見叢子

月影もふけゆく夜半にしつのめは
　をちの伏屋にころもうつなり　原志津子

さよふけてものおもひねのくさ枕
　秋のきぬたのおとぞ身にしむ　德永萬壽子

十月五日兼題　故鄉の母におくる文

天　大坂市東區高麗橋四丁目　山崎しづ子

夕風の身にしみ侍るにも、ふる里の空のみこひしく、やるかたなきに、をりを忘れぬかりがねも、いとゞもよほし顔なれど、そのつどさにもつたへまほしうてなむ、ことしの春御ひざの本をわかれまつりて、都へのぼりしは、きのふ今日とのみおぼえ侍るを、はやくも秋の最中とはなりけることよと、おどろかれ侍りぬ、母君にはいかゞおはしますらん、此頃は例の御なやみなどもなくおはし給ふや、久しう御便りもうけ給はり侍らねど、いとおぼつかなく思ひ渡り侍りぬ、こゝにはことなくて、學びの庭に物していそしみ侍れど、御心安うころ、このほど何くれと學びわざの事しげくして、一筆のはしりがきだに奉らず、打すぐしつるおぼつかなさに、み有樣うけたまはらまほしうてなん、あなかしこ。

地　播磨龍野　眞鍋直子

はや別れ奉りてよりは、四年となり侍りぬれど、いつも〳〵御つゝみなうおはし給ふころ、いとめ〳〵

うれしう侍れ、こなたにても、事なう過し侍れど、まなびの爲とは申しながら、かくはなれ居侍りて、朝夕のつとめもえなさぬことの、いと〱口をしうて、一日もはやく、學びのわざを終へて、御側近うつかへまつり、深き御恵のかたはしをたに、報ひ奉らんと、心にいのりて、身をつゝしみ、ひたすらいろしみつとめ侍れど、み心をいため給はぬやう、これのみひとへに願ひ侍り、先はみけしき御伺ひまで、あら〱かくなん、あなかしこ。

人

陸前國登米郡登米町　及川ちひろ子

一筆染しまゐらせ候、學びの業の暇なきまゝ、思ひながら御無沙汰仕り候罪、御ゆるし下されたく願ひ上げまゐらせ候、日増に寒さも相加り候處、母上様にはいかがゐさせられ候や、くれ〱も御身御大事になさるべく、それのみ念じ上げまゐらせ候、さて年頃待ちに待ちたる卒業試驗も、いよ〱來る二十六日より相始まり候よし、首尾よく學びの業を終へて、幾年月御心配かけまゐらせし御恩のかたはしをたに、むくいまゐらせ、且は草葉の陰に見そなはす、父上様のみたまをも慰めまほしく、それのみ、朝夕心にかけ、いそしみまかりあり候まゝ、憚ながら御心配下さるまじく候、承れば昨日今日瀧の川の紅葉も、にしき織り初め、團子坂の菊も、今を盛りと咲き亂れ候よし、うはさとり〱に候へども、梢をかざし香をとむるなどの暇は、中〱露ばかりも之なく、御察しの程願ひ上げまゐらせ候、謙三郎謙二も、怠らず學問出精なされ候様、陰ながら祈り居り候、さはいへひたすら勉強にのみこり候ひても、身の毒に相成り候へば、時々活潑なる運動遊戲もなされ候様、御教訓望ましき事に存候、猶申上げたき事、山々これあり候へども、歸郷の期も程なく候へば、御めもじの節、盡きせぬ御話は、御膝下にて聞こえ上げべく、先は用事のみあら〱かしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

謹みて母公の胡床下に奉りて申さく、阿古も避暑の休暇を得て歸省し、ひさしくわき兒となりて御もとに侍りしが、日數にかぎりはあれどなごりをしくも出立てゝ、數百里の道中さはりなく學校につき、第

一教室の松濤孃とおなじ机をしめ侍りぬ、孃はかねて母公のしろしめされしごとく、父氏は高等官に奉仕せられつれど、幼少のころより都に生育せられ、いとみやびにうるはしき本性になん侍りける、阿古も田舎生のくねぐねしき心をためなはし、朝夕學事につとめなど、萬のことも文明の風にふかれて、大君のため國家のため、つくすべきまことの道の正道をふみて、故鄉に錦をかざりかへりゆく日を、母公よ御心しづかに待居たまへと、筆のいのちげながながしく、かくはきこゑ奉りぬ、あなかしこ。

長洲餘野子

五月雨ならずふりくらし、をちこちの國々には、大水いみじういで侍りきとか、新聞にてしり侍るに、あるは、むねまでいりて、船して家のうへをわたるところ、あるは、床までいりきたり、いまはほと〱あやふくて、みな、高きにのみのぼりて日のめをまつところ、あるは、いねのいといみじうみのりて、ゆたけき遠望のみつるに、あはれ、なにのつゝみきれ、くれの川あふれたりとて、いのちとたのむ田はたもたゞひとゝきのまに、みなみづき侍れど、おのがいのちあやふきもしらで、そにいたづきてはなちもゑあへ侍らぬとか、見きくにつけて、いとゞ故鄉の空のみおもひいでられ、ふる雨にそばちがちなる身に、いよゝ露けさのみそひ侍り、夕つがたより、やゝ風もなぎ、雨もやみたれば、あすはてけならんとねんじいね侍りしに、夜なかばかりふとめさむれば、かぜいといみじうふきたゝきて、雨さへおどろ〱しうおとづれ、いまはめもあひ侍らず、また水やいでん、よくからうもふられけるよと、またも故鄉のうへのみ心にうかびて父母の君やいかにおはすらん、はらからやいかにすごすらん。あこも、こゝかことあれわたるか、なぞおもはじことなうおもひつゞけて、夜とくあけよかしと、またほのぐらきにおきいで、空のみながむるに、いとあやしく心くるしくこそ侍れ、されどあこがことざまども、つぶさにかいつけもらし給ひてよ、こゝは雨風はげしきのみにて、大かたとは土地はたかく水のかたはまたく常とおなじに侍れど、みこゝろやすうおぼしめせ、けふはやう〱雨もふりうみてや、東の空よりさしいづる日、いとうらゝなれどやゝ人心地して

忘れちゐ侍りぬ、大かたはかくのごとくにて、我身になにのさはりも侍らねど、ゆめ／＼み心になかけさせ給ひぞ、此日頃は、いとついであしきをり／＼に侍れど、御みづからいたはらせ給へや、まだいはまほしきことははまのまさごの數つき侍らねど、あまりくだ／＼しう侍れど、又のたよりにとてかくなむ、あなかしこ。

吉村肇子

秋もやゝ朝よひははだざむくなり侍るころほひ、父君をはじめ奉り、母君さては御家のかたがた、御こゝち麗はしうればしまし、ゑく物なう嬉しう思ひたまへてなむ、ふてもことなうれこたらすつとめ侍れど、御心安うおぼし給はせてよ、さてもこのながき年月、御膝もとをさる事の侍らざりしを、わかれ奉りて後、はや二月あまりにもなり侍れど、御心つかひはさるものにて、いかに御あたり寂しうればし給ふらん、こゝにもすぎ行く月日にそへて、いとゞ御戀しさのみまさり侍りて、雨の夕くれも侍れど、夕月のかたふく影を見侍るときこそ、故郷のかたとれもひやり、入る山のはもなづかしく、袖をしぼり侍

れ、されどかゝる旅ねし侍れど、さる心よわき事を思ひ侍りても何かせんとて、學びを終へて立ちかへらん日の樂しからんことをそれもひ侍れど、つとめ勵むこころは一しはいやまし侍りぬ、折ふしは同じ學びの友どちと、都のなだたる所々見に行き侍りて、こころをなぐさめ、身のまめならんことをさへつとめ侍れど、さる所々の御物がたりをも、御家つとにろへ侍りて、やがてかへる日になり侍らんを、みこゝろ安うればして、家のみかた／＼とも／＼に、御身を玉とたもませ給ひてまたせ給ひてる、ちかきみあたりの友だちにもあはせ給はゞ、よきにつたへさせ給はせてよ、またつぎつききこゑ上ぐべくなん、あなかしこ。

名取正代子

御わかれまゐらせしより、いまだ幾程も侍らねど、久しう見奉らぬ心地し侍りて、何くれと御なつかしきのあまり、みけしきうけたまはらまほしうてなん、何事かれはしますらん、はらからはいかに、などればつかなくて、消息まゐらせんを、日々けふは／＼とおもひつゝも、れろかにすごしつる事の、いとも

面なう侍り、こなたにては、いさゝかのかはりもなう、あけくれつとめ侍れど、御心安うればしたまひてよ、げに一年の内、いつはあれども、秋はことさらに物事うらかなしきものから、故郷の空のみ心にかゝり、せちにやむ事なくて、たゞ〳〵そなたより吹きくる風のむつまじうて、雨のあした風の夕、復野邊に咲きにほふ千草のいろ〳〵、そこはかとなくすだく虫の音、何がし山の紅葉の錦、まどかなる月の光など、これかれ、樂しきにつけかなしきにつけても、諸共に見奉らぬが口惜しうかなしうて、ればえず涙ぐまるゝ事の折々侍るぞかし、いかにあはれとればしたまへや、さは侍れど、御かへりごと給はりて、みけしきうけたまはらむには、たいめ給はりたる心地もさふらふべくなん、かしこ。

瀬　戸　榮　子

秋もいつしかくれて、時雨降る此頃のころのけしきに、いとどなほれもいてける古郷の母上は、いかにすごさせ給ふらん、いやまめたちてればすにやと、そゞろこらしき折柄に、とびこふ雁のつてならむなげ入り行きし玉章を、手に取り見れど、あなうれし母上のいつにかはらぬ筆のあと、くり返しつゝ拜しぬれど、いともをゝしきことのはに、はゝそのかげのいや高き露のめぐみの嬉しさを何にたとへん、ろが中に「終りまでさゞげよといふ一言を、心にかけて物ごとをせよとかきそへ給りし古歌を心にまもりて、學の道をたどりなどとみにしみ侍りぬ、妾も深きめぐみの露にうるほひて、教の庭いそしみ居ぬれど、少しにても心安くればし召給ひて、萬々いとはせたまへ、あなかしこ、

橋　宮　秋　子

昨日までは、たゞあつさをのみかこち候ひしに、やがで露れきそへ膈なきて、秋さへ深うなり申候處、御兩親樣には如何御暮し遊ばされ候か、かく節變の折に候へど、母上樣之御持病など起らせ給はぬにやと、御案じ申上居候、扨私事都にまゐり候より、始のほどは四方のにぎはひ、いかめしうならびなせる建物、さては學校のうるはしく、教具の取そろへるなど、皆々思の外にこゝろ奪はれ、何すともなく、打過ぎ候ひしかども、同じまなびの方々は、田舍者よとの御笑ひもなく、よろづ御親切に御導き下され候

はどに、御敎あつき師と君の御心をもて、心とせさせ給ふならんと、誠に有かたく心うれしく暮し居候、されどはじめて家出いたし候故か、虫の聲月の夜などには、たゞ御側のなつかしく、行りし昔の事どもを思ひつゞけて、涙もよほす折も御座候、扨去ぬる二日には、一同師之君之御伴いたし、孤女學校とやらを見にまゐり候ひしが、校舍はさゝやかなれど、そが敎示の懇篤なる、生徒の仲合よろしく、行儀正しき、みなしごなどとは思はれ候はず、實に治まる御代の惠と露かゝりて香ふなでしこの優にやさしき此有様、よそに見るだにたゞならぬに、そが親人はいかならん、わがさちなきをはわすれ、草蔭にても老先きいかに樂しく見るらんと、もろ涙を浮べ申候、かゝることども見きくにつけても、大み惠の高く尊き、何にたとへんものもなく、たゞありがたさの身にあふるゝばかりに御座候、さるからに、せめては御恩の萬一にもと、父上母君の御名をけがさぬをも心とし、朝夕よろづに怠りなくいそしみ候間、御心安く御思召下されたく候、此墨畫二枚和歌一首は、先頃の試驗にて染めなし〻者に候まゝ、御目にかけ申候、まづは御きげんうかゞひまで、あら〳〵御知せ申上まゐらせ候、あなかしこ。

香川穎子

賑はしき都の内ながら、ふけ行く秋の夕暮は、殊に物淋しく候を、まして片山里の御住居は、いかでかりならんと、それもひきこゐ候、折から、母君には此程の寒き風にもさはらせれず、いとすこやかにおはしますと承るなん、嬉しともうれしく存候、日々學のわざに暇なき身の。月々の御訪ひも怠りかちに候を、病氣にもやと、兄君にとはせ給へる御心のかたじけなさを、それもひまつるにつけても、昔の女はいと〳〵かたかりし旅のみ空に、かく學物び致し候事、開けゆく大み代のみ惠とはいへ、偏へに我父母君の厚きみ情の御賜物と、一ときは身にしみ渡り候へど、いかで御心にむかざる様、月の桂をも手折らんと、此日頃は殊に他念なくいそしみ侍るものから、風の朝雨の夕は、そゞろにふるさとの空のみ戀しく、父上母君はいかにますらん、はらからはいかにあるらんなど思ひ出て候ては、茸狩紅葉狩とあくがれし、後の山向ひの野邊の、今も忘れかたう、花の

都のなつかしからぬには候はねども、早く學のわざを終へて立ち歸り、久々にて美はしき御顏を、拜しかつは朝夕御側に仕へまつりて、御心を安めまつり、海山高き御恩のかたはしをも報い奉らんと、それのみ年頃の願に候へど、よく／＼御身をいとはせ給ひて、來ん年の春を、御まちくださるべく候、さてはこたびも、折にふれてよみいで候歌ども、かいつけ置き候へど、御暇のせつ御なほし給はりたく御願ひ申上候、あなかしこ。

田津木久子

いつしかと、はや吹く風も身にしみ侍りぬれと、いよ／＼平らかにおはし給ふことの、いと／＼うれしうなん、こゝにも恙なうくらし侍れど、みこゝろやすめ給ひてよかし、こゝはさすがに都の事とて、日々珍らかなる事のみ多く、見せまゐらせたう思ひ給ふる事の侍るものから、なほ我が住みなれし里、なつかしき母上のゐますかと、これのみ戀しう思ひ渡られ侍りてなん、されど、さる事を、思ふもかひなく、たゞ／＼こゝに參りてよりは、身をつゝしみてつとめはげみ、御心をやすめ奉らんと、それのみ心にいのりていろしみ侍ることにて、御名にかゝるやうなる事はと、心に誓ひ侍れど、必ず／＼みこゝろにかけ給はぬやう、ねぎ奉る、聞えさせたき事、澤に侍れど、また重ねてと、もらし侍りてなん、いづれへも、よしなに傳へさせ給ひてよ、まづは御けしきうかゞひ奉りたくかくなん、あなかしこ。

川崎晴子

秋も稍更けゆきて、物のあはれの日々そひ彌まさり行く昨日けふ、いかゞ過ぐさせ給ふにや、さはらせ給ふ事もなく、さえ／＼しう渡らせたまふらん、御膝下遠く海山を隔てまつる身には、故郷の事思ひ侍らぬをりなく、わきて母君には大勢の幼子を、御手ひとつにて、日々御養育の御心勞、聊かたりとも御手助にもなり侍らん樣にまでなし給ひつる我身をも、身の爲を思召給ふ御慈心より、望むがまゝに、此の土地へ物學びにして遣はし給ひぬるありがたき嬉しさは、實にたとへん方もなく、先つ頃よりも每々聞えまつりし樣、世にもありがたき師の君のあつき御惠み露にうるはふ身なれど、たゞ一筋に、後の世まで床しき色をも香をも心懸け、諸人に劣らぬ

樣、美はしく業を終へ父母の君の御名を擧げ奉りて、一と日も早く御膝下に侍り、兼てよりの御教を實踐し、御厚恩の萬一にも報ひ奉る樣、盡させまほしと、其れのみ樂しみにつとめ勵む心の底汲み取り給ひて、かならずや御忙しく在しまさんも、過分の御勞働致し給はで、御身の上いたく御あつかひいたつきの出ぬ樣、折々は弟妹ども召連れられて、野邊の散策、あるは茸狩りなど、御氣保養なし給ひ、御すこやかに月々をおくり給ふ樣、神かけて祈り暮し念じ明かす身の、いともあはれに、散る木の葉やさねわたる夜半の月かげ見るにつけ、そゞろ寒きまで心動き、いと〳〵思の忍ばれて、あまりまげ〳〵さむかりやうなき聞こね上げまつらんは、思召のほどもいかあらせられんと思ひ侍り、又もやとはづかしの森の下露すりながし、堪へがたきまゝに先はかくなん、

あきらけき此の月影を見るにつけ
忍ばれにけりふるさとの空
村松みち子

何某何子の君、こたひ御父君の御墓詣に、故郷へ歸り給ふとて、いとみこゝろせかるゝもいとひ給はて、母君の御もといに御言傳もやと、立寄らせ給ひ、いとよき御傳と、うれしさに、走り書きに御けしきうかゞひ奉りぬ、さりとは、麻衣の袖もうれはねしは、昨日とすぎ、はや草葉に霜の置きそふ夜半たに侍りしゆゑ、都てすらかく初冬のけはひ、何となう物淋しきこゝち、増して山里は吹きおろす山風に寒けくやれはすらむ、御母君には、いかに時の御障りもましまさてかと、いとあむし奉りしに、きのふいとも御うれしきかりの御玉章に、いと御すこやかにましますとの御言の葉にて、こゝろおちゐて限りなうよろこひ侍りぬ、御祖母君には、去りし月の末つかた、御腦の御とこに打引させ給ひしかと、こはいさゝかの御ことゝて、とみにたひらかにならせ給ひしよし、いとうれしく思ひ奉りぬ、なめけには侍れと、御母きみより、よしなに聞ね上げさせ給ひてよ、つきに妾事は、風の障りたになう、日々學ひの道を行きかひし侍りぬれは、御こゝろ安う思し給ひてよ、をたまきのいとなか〳〵しき夜となり侍り、御寐覺のときにもと、とり集め置き侍りたる草紙物

語三種はかり、よき御つてゆゑ、何子のきみにたのみ侍りぬ、この何子の君は、妾と日々たなし學ひの友にて、へたてなうむつひ給ひ、何くれとやさしく物したまひぬれは、御母きみよりも、よろこひあつうきこえ上けさせ給ひてよ、かゑす〴〵も、夜半の嵐朝のしもと、御起臥に御こゝろつけさせ給ひ、御すこやかにましまさんことのみを、ねき奉るになむ、なほまうし上げ侍る御ふしは澤に侍れと、いとこゝろせかるゝまゝ、委しくはあとよりと、あらあら申しのこし侍るになむ、あなかしこ。

松岡濱子

とかく不順の氣候に候處、如何御暮し遊ばさるゝかと、それのみ御案し申居候、私事はいとすこやかにて、此頃流行の風邪にさへ掛り不申、日々學のわざつとめ居候、おは先頃久しうおやみ候、眼の病さへ、この程はわすれし樣相成申候へむ、決して〳〵御案しござるまじく候、いつも〳〵學のわざこのみいそがれて、日々御案じ申ながら、御音づれ打ちたえまつり候、あまり久しう相成心本なう存じまゐらせ候ものから、けふは朝より他の事共打すて置き、一筆さゝげまつり候、扨學校は、こ度規則改り、寄宿舎なども、以前の如き不自由は少しもこれなきやう相成申候、このほどは、同級の人々も、皆樣よき御方にて、常々心切に御つきあひ被下候へむ、萬づ御心安う御思召れ度候、またことしは、此の地にても、雨のみ多く、いつも〳〵道路あしく、ろが爲め、兄君の御寄宿へも、わずかに一度御訪ね申候程にて、去年の如く、遊山などには、遂に一度も物せで過し申候とかく不順の氣候には候へど、そが爲、却て此の夏は凌ぎよかりし樣覺えまゐらせ、夏に入りて一日四谷の伯父樣、青山の叔母君御訪ね申候、御兩人共、御機嫌よう御出なされ候、又寺子樣には、夏の初め女子安産遊ばされ候、其後兩人共、いとすこやかに御肥立なされ候、また人子樣よりは、常々御音づれ被下候、なほ其他の人々も、皆別段の事は無之候へむ、御心安う御思召され度候、私も明年は漸々にて四年のわざ終り候半とて、一日も早う御もとにつかへまつり度、それのみ嬉しく、學のわざつとめ居候、殊に他の御方とは異り、父君のおはしまさぬに、二人とも、かく遠き所まで、御つかはし被下候

御心の程、いよ〳〵難有、御寫眞朝夕拜し申居候、とかくに遠く隔ち居りまゐらする身の何事も思ふにまかせず、いと心本なう存じ〳〵、何卒〳〵それまで御身御大切に遊ばされたく候、なほ此頃は時候の變りも、御持病のおこらせ給はぬ樣、御いのり申居候、就ては此の春御送り申候品、めづらしと御申こし遊ばされ候へど、同じものなれど、其品二箱と、こ度新版の東京名所圖解一組、今日通運にて出し候へど、近きうちに屆き候事と存じ申候、また其内に、この頃この地にて流行の簪櫛なども入れたき候へど、下女どもにも御つかはし被下度候、先は御機嫌御伺ひまで、あなかしこ。

梨本信子

空定めなき村雨の、一しきり、はら〳〵窓をとづるゝに、例の雨雲吹きおろす、北山近き軒端には、初時雨も、はや、とまづ馴れし朴の梢思ひ出で參らせ候、御平らかにおはします事は承りながら、處がら折からにや、今日は、一しほ御なつかしうて」風に亂るゝ門の柳を、見返りがちに、送られ奉る道すがら、やがては着て歸る錦の衣、軒の朴より猶麗しかれ、と宣ひし御言、勿來の關はあらねど、難有くも、又、うち悲しくて、黑白もわかずこれや、この村の境なる、丸木橋踏かへしぬるに、怪我なせぞと宣ひし御言、今も、猶、まのあたりの心地し侍れど、殊更に、思ひ出ることには、なけれど、去年の今日と、思へど、何となう哀にて、空打ながめ候ひしに、折から、鳴渡る初雁の聲も、故郷の戀しく、又又、いつぞやに御教訓の御文、くり返し拜し參らせ候、今年の暑中には、必ず、來よと、祖母樣の御言添へ、嬉しく、今幾日あらむと、およびも傷はるゝ計り、前より、夢にも待ち明しゝを、思の外に修學旅行の數に撰まれ、引き違へあらぬ方へ旅行致し候ひて、學びの爲といひながら、猶あかず、口惜きやうに思はるゝは、さはいへど、故郷や心のひく方ならん、御膝許に、かしづき居りし比は、年に二度、氏神祭に、伯母樣許り、泊り候ひても、何となう心淋しく、打しめりては、伯父樣に、乳や、はしきと笑はれ奉りし名殘、失せらぬ身の、御別れ參らせてより、はや、一年、御文をのみ慰みに、なるれど、さても、あらるゝ者よと、自分ながら、可笑く候、

其都なるゝ心の、すさむ、とにはあらねど、試驗や何やと、いつも〳〵心の外に、おとづれ參らせぬ、勝なる事、いかに云甲斐なく御思召候ひつらん、私が事の御心づかひに、此頃は、御髮に、初霜さへ置き初め給ひぬとか、姉樣よりの、御文拜し奉りて、身の置き處なく、涙にむせび候、今宵も、先程まで、同じ級の友達、打つどひ、先生より、女の道、種々のよき御話伺ひもし、また、御互に故鄕のなつかしき樣など、語り合ひ候折から、姉樣の御言葉申出候ひしに、親ほど子は思はぬ者哉、能々御心慰め奉れよと、先生の仰せられ候、父樣、伯父樣の御骨折賜り候丈、御友達の方々、誰れ〳〵內端につゝまやかにて、親切にて、何事にもよく心付け賜り候、冬着夜具類も、手づから洗濯致し、もはや、何時、雪ふりに相成候ても、大丈夫に候、いつも〳〵、御世話やかせ奉りし丈、裁縫のみは、早しとて手すきの折折、御友達の御手傳ひ致し、これのみ、田舍ものゝ取得と申され候、取り出でゝ申し上ぐる事も無く候へども、まだ、一度も人と顏あからめ合し事は、あらず、常々の、御さとし、忘れじと、心がけ居り候故、夫のみは、御心安う思召被下度、とは申しながら、かけへだゝりては、何角と、物を思はせ奉る事と、辱く候、にまだ二年の間は、學びの道にかゝづらう身に候へど、其程の、御心勞、いかばかりと、やう〳〵思ひ知り、候につけても、萬心もちゐ候て、必ず家の風吹き落さじと、心がけ居候、兼て母樣、御信心の、天滿宮、程近ければ、日曜每に、御代參をかねて、御息災を祈り居り候、譯しらぬ人は、さても、欲深き事哉、習字の上達か、何の願ぞと、笑はれ候、さて又、別封の寫眞は、例の旅行の撰びに入りし人々、一同、旅の宿りより歸る其儘、學校にて寫しゝにて候、後の列のは、先生方にて、私の左側は、いつぞや、御話し申上候、中よしの人にて候、心ばかりは、御傍にと、送り參らせ候まことにはけなき願には候へ弟どもどもの成長も床しく候まゝ、皆樣にて御寫しの、近き此の、御姿繪一枚御遣し戴き度候、思ひ出でたらんやうに、かるゝ事、くど〳〵申上候は、如何なれど、村雨の音に驚かされて、日比の、とだえの罪御詫び申上度、且つは、御心安め奉らんとにて候。

末ながら御祖母樣持病御大切にと、祈り候。

北島功子

年毎に、なへて秋は心もとなきを、草の葉末に白き霜をさへ置き初て、よるなく虫の聲も、いとかれ〳〵に暮行く秋を惜むにやあらむ、夜毎〳〵母に肌吹く風さへ身にしむ計りの候とはなり侍りぬ、年頃日頃慕ひまゐらするいとしの母君には、あしのけの御障りもあらせ給はず、日に增し御身すこやかに、年久しくなやませ給ひし胸の痛みも、此一歲二歲は忘れたまひしやうにおこたらせられ、近頃はみ氣色とみに勝れましますとか此の上なき目出度きことにて、いともうれしき限りにこそ、ゆきゝしげき都の空も、木々の梢の空しきとともに、やう〳〵にうら淋しく、あだし鄕に遊學の身のわびしさも、一入そはる計りなり、されど妾が身には、露いさゝかの恙もなく、いぬる日なやみにし腦の痛みも、名殘なういえ氣分もいとさえ〳〵しく、今は早身にかゝりそめのおこたりもあらで、日々學びの道裁ち縫ひの業をいそしみ居り侍れど、母君にはいさゝかの御心つかひなし給ひぞ、一日も早う業終へ、御膝下近く侍りて、積る年月の御物語にてもなしたらむには、母君にも嘸やよろこびせ給うらん、又己れも如何ばかりうれしくたのしからましと、束の間も胸に思ひのたゆるひまなく、此頃は心もいとせちにおぼゆるになむ、日數ふるまゝに、冷き風の肌をかすめて、とかく風邪などにをかされ給ふ人もありとか、風邪は、諸の病の源とこそ聞き侍れど、母君には、御身御自愛の程、偏に願ひ上げ奉るになん、あなかしこ。

降田槇子

昨日と過ぎ今日と暮すほど、今年も半は過ぎて、秋風身にしみ〴〵としみ渡る頃とはなりぬ、父君には、日々御つとめの繁くやおはしますらん、母上には御すこやかにわたらせ給ふにや、弟はたゆまず學校にかよひ居ることと推しはかり侍りぬ、こなた伯母君にも、かはりなく、妾も事なう、日毎に學の庭にかよひ、師の君の御敎を受け居り侍れど、御心安うおぼしめし給ひねかし、さても此頃は、都の空も、何となく物淋しく、ことに夕ぐれのあはれなる、虫の鳴く音をきゝては、さすがに故鄕の空したはしく、母君はいかに、妾の居らで、朝な夕な御一

人にて、家の事やまかなひ給ふらん、御つかれの出でもせで、いかにせん、一日も早う學びのわざを終へ、及ばずながら御ひざもとに侍りて、少しの御助けとしまゐらせんには、いかばかりかよろこび給ふらんなど、思ひつゞけ、さけき月に向ひて、袂をしぼる事もあまたゝびに侍り、さはいへ、今はまだ學の道も半ばなるをと、心をはげましては、書など讀み侍り、あはれ母君よ、これよりは寒さのいやまさり行かんを、幾重にもいとひ給ひてよ、こたびは父君には文さゝげ奉らぬを、よきにつたへたまひねあなかしこ。

鈴木昌子

萩の下葉も色づきて、袂ふく風も冷かに、物かなしく哀を催す節と相成候處、御母上様をはじめ、みな様には、何の御變りも無之、ますく御健かに渡らせられ候由、誠に御目出度存じ上まゐらせ、つぎに妾事も、いとまめくしく、日々學びの園に通ひ居候間、御心安う願上候、思ひ出づれば、今年やよひの頃、たのみ少くも御母君の御膝下をはなれ、愛らしくも、いとはしき妹弟と、本意なくも別れ、年久しくもすみなれし故郷を、後になし霞と共に立ち出候、其時のかなしさ、今にも消えやらず候、當市につきしよりは、專らたち縫に心をよせ、傍ら文をも習ひ申候、何時として、故里を名つかしう思はざるにあらねども、とりわけ雨の夜などは、一入念じられ候、波路遙かにあなたなる外國に、物學びに赴き給ひし女子さへ有之候、僅か二十里とも隔てぬ同じ國にありながら、悲しと思ふ愚さよと、自ら心をせめ候も、はかなきものはげに女子心に御坐候、此頃の長雨にて、御地の阿武隈川は、いたく水かさ增し、家をも流し、川沿ひの田畠損害ひ少からずとの由に聞き及び、身の毛もよだつばかり驚き入り申候、幸ひにも、市中は水のさゝはりなく、御全家様には恙なくいらせられ候由、誠にうれしう祝ひ上まゐらせ、氣候も未だに復せず、くもり勝ちに候へば、此さは一層御身を大事に遊さるる樣念じ上まゐらせ先は伺ひまで申上まゐらせ、かしこ。

岡部不二子

御母上様の御傍をはなれまゐらせ候ひてより、指を數ふれは、はや一年の月日を重ねゝ、さきつ頃御伺

ひ申候ひてよりは、妾事入學このかた、始めての定期試驗にて、復習其他、兎や角と營む業のいそかしさにまぎれ、存じながら御機嫌も伺ひ參らせず誠に恐入候、此頃は如何わらせられ候か、別段御さはりもあらせられずとは推し候へ共、何分時候の變りめ、且つは 老體に渡らせられ候へどくれ〳〵も御いとひ、いよ〳〵御すこやかにわらせられ候樣念じ上まいらせ〳〵、さて試驗も四五日前すみはて、昨日は免狀授與式にてふつゝかなる妾事も、滯りなく及第いたし、其上同じ友とち四十人も有之候うち、席順も二番と相成候まゝ、御安心あらせられ度候、霜さゆる夜半に、遠き寺の鐘きくにも、そゞろに古鄕の戀ひ忍ばれて、母上はいかにれはすらむ、はらからはいかならんと、思ひつゞけ、安き眠もいたし兼候、朝夕御寫眞拜し奉り候ひては、御しとやかなる御姿、現に見ね、且は萬にさかねかしこく渡らせらるゝさま、表にあらはれ、いつも變らせ玉はざる御姿を、實の母上と思ひ、門出のときの御戒など思ひれこせど、いと忝なくこひのみ侍り候、唯早く學の業卒へて、古鄕にかへり、其の戀しき空を仰き、なつかしき花をながめつゝ、御膝下に侍りて、海よりも深き御恩に酬い參らせん事をのみ、樂しみ、一向學の業をいそしみはげみ居候、先はまはらぬ筆もて、あら〳〵かしこ。

鈴木俊子

秋風のたもむろに袂を吹き、手になれす團扇も、今は自ち離れ、心もいつかさわやかになり候、夜な〳〵の虫の音も何となく衣の用意を、告ぐるやうに、いと可笑しく聞え申候、夜もいつの頃よりか長く相成學び道も、夏の日より、足捗り、此道に、遊ふには、大層能き時節と相成候處、御母上さまには、恙なく、御健やかに入らせられ候由、御目出度御祝申上まいらせ候、妾事も、いと〳〵、まめにて學びの道にはけみをり候まゝ、御安く思召被下度候、思ひ廻はらせ、今年の春、遠く仙臺に修業する事を御許し被下度候時、嬉しく、有難く、存候ひしが、御母上さまの御膝下を離れ申候時は、ものかなしく、引返へさるゝ心地して、旅立候てより、あまたの、月日を暮し候へ共、朝夕便りある人か杯待奉はかりに候、とりわけ、時雨木の葉を打ち候時杯

は、讀み居り候本を落しむら〳〵と戀しき母上樣と、なつかしき里の事思ひ出て丶、我しらず袖をうるほし、まことに里の方したはしと、存んじ候、然し、遠く海山を隔て丶、外つ國とやらんに御修業遊はさる丶御人さへ有を思へは、我なからあさましき、思ひに候、かくまて、學校に入學爲致被下候、御兩親さまの深きれん惠みた丶只ありかたく奉拜候、さてとや、皆々樣は學科の內に、女の技藝要ゐなる、茶の湯と活花のなきをかなしみ、種々の本なとをは買ひ遊ばされ、手つから、御稽古遊ばさるゝ、御人方澤山有之候ひしが、兎に角科外の獨習に候へば、旨くは出來不申候、然るに去る九月一日より、學年新らしく相成候より、此學科を加へ敎員壹名增聘になり、此敎員さまは某學校にて數年此の道の御敎授遊ばされし御人の由に候へば、定めて、御老練の御方と存んじ、皆々樣御喜び、一方ならさる次第に候、あら〳〵かしく。

故山本梅子の君を悼む （百十六號のつゞき）

靑木春子

ろの後、二週間ほどはかはりたることもなくて、つれ〴〵のあまり、「何か、おもしろくて、笑ひだすへきほとの本はなきや」と、のたまへば、得知幸堂ぬしのものせられたる、幸堂滑稽談、骨皮道人の骨皮滑稽談、櫻痴居士の櫻痴滑稽談なども求めて、送りたるに、君はいたくよろこび給ひぬ。

三月に入りて、氣候不順のために、風邪にをかされたまへり、それさへなくに、はやつや〳〵しき、昔のおもかげは、かはりたまひしに、このあしきかぜに、をかされては、などかたへうべき、いまはみるも。いたはしきまでに、やせたまひぬ、されど御顏は、さまでかはらせられず、あなこの風邪こそ、君が、死期をはやからしめたる、にくきものなりき。

四月に入りては、ます〳〵あしうみゐさせたまふ、おのれも心ならねば、ひまある每に、かならずとひてはなぐさめまつるに、君の神經はます〳〵するどくなると共に、そのからだは逆比例にて、ます〳〵おとろへたまへるぞかなしき、されど、文のことあるは歌のことは、いつも心よく、かたりたまひぬ。

廿五日の夕刻におとづれて、その枕邊にいたれれば母君はねがへりをなさしめんとするところなりき、

君は「とう〳〵足なへとなりぬ」とのたまひてうれひ顔なり、おのれは、「君はもと、足に病あるにあらず、たゞ腸胃のあしき爲に、足のはたらきをうしなひたるのみにて、腸胃だにいゑさせ給へば、足は自然にたつものなり、足なへとは申されまじ」と、うちけしたるに君は「さなり〳〵」と、のたまひて笑はせたまひぬ、この時はまだ、君が身につゝがあらんとは、夢にも思ひよらざりしに、かなしきかな、此の折ぞ、この世の君とことゝかはしたる、最後にして、この笑ぞ、息ある君が、笑顔の終りなりき。

廿七日、君は昨夕より、にはかにかはらせたまひ、午前一時と云ふに、心臟麻痺とて遂に、みまかり給ひぬと、あまりのことに、なすべきもしらず、夢か現かさかひもわかず、とひゆきて門に入れば、はや何となく、さまかはり、その室に入れば、うからやからはうちつどひ、君は、かはらぬさまに伏して、經文もて、その上に覆はれたり、

母君は、おのれを見て「とう〳〵玉なしとなりぬ」と、のたまひて、泣き伏し給ふ、おのれも、たへがたく、前後もしらず泣き倒れぬ、嗟々御兩親の心の内はいかならん、天にも地にもかけがへなき、たゞ獨の君なるに、みめかたちうるはしきのみか、萬にたけたまひし君、殊更、母君は、この春より、ひねもすよもすがら、おのがくつうもうちわすれて、たゞいゑさせんを樂しみに、ろがまくらべに、つきまとひ、よろづに心つくししかひもなく、さきだちたまひしぞ、あはれともかなしとも、いはんすべをしらず。

やゝありて、おのれは、君が、なきがらに立よれば、あやしう涙にかすみて見ゑわかぬを、やうやうにうちあふげば、そのむかしのつや〳〵しきいろこそなけれ、よくもなく罪もなく、ねむれるが如きその中に神〳〵しく、いとうるはしきおもかげは、ありしむかしに變りたまはず、是も亦かなしきことの極なりや。

その夜は、夢路をたどるこゝちして、母君はいたづきのはじめ終りをかたりたまひ、おのれは、ありしむかしのことなどうちかたりて、きくもなみだ、かたるもなみだ、よもすがら、君が側になきあかしぬ。

翌二十八日、君を千歳の床にうつし納め、あまたの人に送られて、青山の芝生の下に、君が千歳の床は

さだまりて、この世の縁は全くをはんぬ、おとはただ、梅栴妙香信女享年十七年と記したる墓標こそ、君があの世の姿とも見るべきか、

風にちるくさむのつゆのそれならで
　もろきはひとのいのちなりけり

噫々世の中に、神ありときゝ、佛ありときく、さるにこの得がたき才女にとしをかさず、いまださきあへぬつぼみの花を、いかなれむかくもむなしく散らせしぞ、君になにのとがかある、君に何のつみかある、あな、神もゐまさぬか、佛もゐまさぬか、天道は非なり〳〵、そも〳〵非なり。あな此のちゝは、文まなび、歌よむわざを、たれと共にかせん、誰れと共にかかたらん、まいて、春の花、秋の月をめづるをや

ありしよの忘れかたみのことのはも
　涙のたねとなりにけるかな

幼年雑誌をひもときて、君がものせられたる文を見るに、なみだあふれて得よます、今、のちのかたみにその一ふしを記せむ

不具者とて侮る勿れ

(前略)其の人にして耳目口鼻の完全なる賜物を持ちながら人たる務を成さず徒に朽ち果るは誠に實の持腐とや云はん中にも不幸にして五感の一二を欠きたるものあり世に之を不具者とて侮る嗚呼必ず之を侮るなかれと妾が過らぬ筆にて書きつくるは幼年雑誌二卷の二號に盲啞學校卒業生啞生石川金藏氏の梅に鶯の繪と歌と又盲生の歌とを掲載せられたり妾その歌や繪のよしあしは知らずと雖も、盲啞にしてこの歌ありこの繪あり豈に感歎の外あらんや五感の一をも欠けぬ難有賜物を持ちたる妾等は實に耻べき事にこそ昔し塙撿校保己一と云ふ人は盲目にして群書類聚六百卷椒庭譜略皇親譜其他種々の書を著せりと嗚呼不具者とて侮る勿れ書して以て自ら戒む

鎌倉權五郎矢を拔かしむる
　圖を見て感有り

(前略)何ぞ其れ勇猛なるや嗚呼近時我か國の男子にして剛勇絶倫なること五郎の如き者果して幾人かある抑人誰れか其の國に生れ其の國を愛せさるものあらんや人誰れか其の國民として其の國の衰

頼を冀ものあらんや然るに妾熟ら我か國兄弟諸君の行を見るに愛國の志操を養成堅固ならしめんとはせずして猥りに洋風に心醉し意氣揚々として天下の壯士を氣取り我が國特有の日本魂なるものを知らざるもの丶如し嗚呼第二の社會を組織せんとする兄弟諸君が日本魂を有せざれど萬國無比皇統連綿なる我　天皇陛下を如何せん帝國を如何せん兄弟諸君顧みよ英獅魯鷲は常に我瑕瑾を窺ふに非らずや一朝變あらん乎何を以て之れと戰はん何を以て之を防ぐぞや是を考ふる時は妾等は切歯扼腕只だ男子に生れざるを恨むのみ嗚呼我が親愛なる兄弟諸君よ勉めよや勵めよや日本魂を養生せよ愛國心を堅固にせよ又記臆せよ古の戰爭は單に我か國中の戰爭なれど權五郎景政の武勇猶可なり近時は敵を萬國に受く故に權五郎景政に萬倍の武勇を要するを嗚呼親愛なる兄弟諸君よ此の重大なる任を全うし我か帝國の幸福を保持し以て美名を萬國に輝し英魯をして我か境邊を侵す能はざらしめば諸君の本務も茲に至て盡き妾等の熱望も又茲に至て滿足す云々

夕涼

（前略）いとゞ堪ゑがたきまゝ母と共に程近き江戸川の岸に出でぬ（中略）折から夕べ涼しき川風に浴衣の裳を吹かせつゝ姉妹二人の令孃と侍女一人づれあり何れの令孃なるかは知らねども月の光にてすかし見れどその美しき貌得もいはれず互におとらぬ月と花されど姉なる令孃はその行爲優美にしてその言語もいと丁寧なるも妹なる令孃は其の行爲雄々しくしてその言語もとげ〳〵たるに漢語英語さへうち交りていと聞きぐるし妾等はあとをしたひて行く程にうすぐらき柳の下より破れたる衣つけたる七十余のしらがの翁乞丐立ち出てゞ先の令孃に惠を乞へりそのさまいと哀なり妹なる令孃はその雄々しきにも似もやらずいと驚きて令孃にも似合しからぬ高き聲にてこの無禮もの畜生どゝ大にのゝしり給ふに姉なる令孃は之をなだめて可愛さうにとしづかに侍女に向ひて十錢銀貨取りいださせ手づから翁乞丐にあたへ怒れる妹侍女をうながしてかなたに入り給へり妾等はしばし見送りてアヽ優しく見ゆる令孃のうちにもかゝる恐しき

鬼あるかと思へどもはず身ぶるひせりしかし姉なる介娥のなさけあるその行爲のいかにも優しく妹とは雪と墨母も感じてや妾に向ひていはゞ何れか人たるの道なるか(下略)

女子諸嬢に告ぐ

(前略)先輩女學生を見るに較もすれば演壇に文場に政治の得失を是非し法律の不可を論辨し或は女權擴張を主張し自由結婚を唱導し或は卑猥の小説をものし虚飾の遊藝を弄び或は異裝して活潑とか女丈夫とか自稱し得々然たる者あり嗚呼我が最愛なる諸嬢よ此等の風習は抑喜ぶへきか將又た祝すべきか妾は謂ふ此の風習たるや喜ぶへく祝すべきに非らず寧ろ嘆すべく悲しむへきなり如何となれば之れ西洋はいざ知らず我が國女子の務むべき本分ならざればなり云々(下略)(森子言ふ、君は彼の束髮は我が國女子の優美なる風習を害するものなりとて生涯一度も結ひしことなし又束髮論をものして投書せられしことあるもろの何れの雜誌なるやしれず)

女子教育論　(明治秀才千人文集)

(前略)由之觀之德川時代は德育に偏して智育なく現時は智育に偏して德育なし故に一は因循固陋となり一は輕躁浮薄となる是れ共に女子教育の完全を得ざる者にして之に緣りて良妻賢母を得んことは恰も木に緣りて魚を求むるが如し豈に至愚の至りならずや抑女子教育は德育智育併立に進行し以て女子の本務を誤らしめざるにあり本務とは何ぞや曰く子として孝道を盡し嫁して夫を補佐し家政を主とり母となりて育兒に其の美德を函發せしむるを云ふ即從順溫厚優美貞節仁慈博愛なるを云ふ云々(下略)

田舍の夏の光景

(前略)田舍は春夏秋冬の中夏の樣ほど心を慰むるものはあらじ永く住み馴れたるものすらいと樂しくをかしく覺ゆまいて塵深くして草木少しく車の音のみ聞ゆる都人にはいみじく覺ゆめり萬の草木は靑々として翠滴り吹風いとも淸くして塵に染まず家まばらにして人聲少く蟬は幹を抱きて我れ劣らじと競ひなき雀に軒につどひて巣くふにいろがはし若きはいでゝ野に耘し老いは內に居て助をな

す(中略)嗚呼都の學生よ大宮人よ富みたる人よ議論家よ遊學者よ若し暇あらむ田舍の光景に目を注けよ遊べよ田舍草木翠を爭ひ風いと涼しく水いと淸し又田舍人は天眞爛熳の所謂佛様なり

梅の說

(前略)抑古人物を愛するは各其の性の相似たるを取るものなり茂叔の蓮に於る淵明の菊に於る屈原の蘭に於けるが如し吁々菅公の徽章となす所の者果して何物ぞ林逋の歸依する所の者果して何物ぞ林逋の意を梅に寄する所偶然ならざれど菅公の徽章を梅に取る豈に又偶然ならんや(君性梅を好む故に此の作あり)

時計と口

(前略)而して口は空行く雲を止むる美妙の聲も北海の深きも及ばぬ慈愛の言も發し又人を苦しめ己れを殺し城を傾け國を亡ぼす語も發し古人の曰く口は禍の門と豈に謹まざる可けんや故に口は言ふべき時と言ふべからざる時あり若し言ふべき時に言はず言ふべからざる時に言はゞ何ぞ其の用を爲んや否な用を爲さゞるのみならず却りて大害あり何ぞ時計の用と異ならんや

和歌　(梅にかゝる　四五首を擧ぐ)

(夜梅)

花の色はさだかに見えぬ夕闇も
　匂ふにしるき軒の梅が香

(早梅)

垣根には去年のみ雪の見えながら
　學びの窓に匂ふ梅が香

(梅薰枕)

重ねつる袂ははねてひとりねの
　枕にかよふ夜半の梅が香

(雪中梅)

ふりつもる雪に匂ひて咲く梅の
　花の色香は氷らざりけり

(梅初開)

やまの端の雪は消えねど我宿の
　梅はかす〳〵咲き出に鳧

(以上の文章及歌は君が十三四才の頃の作なり)

あな君が此の世にゐましゝおひだは、たゞ僅かに十年あまり七年の、いと〳〵みじかき日月なりしも、そ

の名の梅が香より、芳しき名はよもに高く、文に、歌に、親に孝に、友に信に、君がのこせしいさをしは、げに千歳のかゞみとなりぬ、宜なるかな、君が訃音の一度少年世界にあらはるゝや、知ると、しらぬのけぢめなく、君が肖像に涙をそゝぎしもの幾千、その感の極まりて吊詞をおくられたるもの數十人、その情あふれて文となり、歌となり、雜誌社に送くられたるもの十數人、山本梅子の名は千代万代までも、くちざることゝはなりぬ、おのれ文つたなく、まわらぬ勝なるも、君がことのわすれかぬるまゝに、その交りをむすべる、はじめ、終りを記して、せめてもの心やりとし、かつは後の思ひでにかくなん。(完)



兼題

	歌	文
十月二十日	閑庭菊	時雨
十一月五日	紅葉淺深	徴兵に出でたつ人におくる詞
十一月廿日	燈火	枯野
十二月五日	冬月	寒夜讀書
十二月廿日	都歳暮	雪だまる





細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分　全

●定價金二十五錢 ●郵税金四錢 ●郵劵代用一割増

四版

近者、我邦女子道德の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田刀自、之に慨する處あり。本邦固有の道德に基きて、書を著し、以て此の我が邦の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや、忽にして、三版を賣盡し今や四版の成るを告ぐ。請ふ。續々御注文あらんことを。

目錄

第一章
●總論 ●風俗の變遷 ●今日の情態 ●本著の目的 ●人の人たる所以 ●女子本來の面目 ●日本女子と西洋女子と ●維新前の女訓 ●西洋女子の才能 ●折衷

第二章
●女德 ●節操 ●孝行 ●和合 ●慈悲 ●簡婉と靜止と ●恭謹と勤勞と ●自重と忍耐とと

第三章
●女德の基源 ●女子特別の身分 ●妻道 ●婚嫁の主義 ●早婚の弊害 ●夫婦とは如何 ●從順 ●補佐 ●誠實 ●母道 ●胎教 ●育兒 ●慈愛 ●教戒 ●母の責任 ●繼母の道

第四章
●女子藝業 ●女藝の本領 ●例證 ●松苗先生と紅蘭女史との言 ●實用の藝 ●裁縫 ●料理 ●經濟 ●衛生及生理 ●家内の整理 ●良人と同藝 ●優美の藝 ●和歌 ●音樂 ●活花 ●茶道 ●書畫 ●專門の藝 ●文學 ●美術 ●教師 ●醫業 ●西洋の女業 ●貴女の職分

第五章
●女子の容裝 ●人類と禽獸と異なる點 ●動作 ●靜淑 ●天眞 ●恭敬 ●裝飾 ●實用 ●禮儀 ●雅致 ●高尚 ●風禮 ●結髮 ●服制 ●佳人の資格

第六章
●女子の人に接する道 ●交際 ●女子の交際 ●交際の効德 ●親切 ●愛嬌及世辭 ●自遜と他愛と ●禮節 ●恒敬 ●交際上の責任 ●秘訣 ●心得 ●女禮 ●進退 ●事宜 ●自然 ●習慣 ●婢僕を御する法 ●寬容 ●範例 ●獎勵 ●採用

第七章
●女子の生活及人物 ●生活 ●幸福 ●快樂 ●高尚 ●質實 ●安心 ●脫塵 ●中庸 ●女子に適する學派 ●人物と養生と ●天稟 ●性癖 ●多能 ●達才 ●富貴 ●美貌 ●好人物の本相 ●上流 ●中流 ●下流 ●應報

第八章
●結論 ●公道 ●女卑の原因 ●反動 ●御國の道 ●女權に就いて ●報恩

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　**國光社**（電話一九四六）

●賣捌所

東京 東京堂　同 東海堂　同 文海堂　同 北隆舘　同 信文堂　同 眞明堂　同 武藏屋　同 文金堂　同 小林新兵衛　同 目黑支店　同 三省堂　同 岩見屋支店　同 大倉書店　同 小林尙文舘　同 笠原岩吉　大坂 岡島書店　京都 東枝律書房　仙臺 高橋書店　名古屋 川瀨書店　同 片野書店　福岡 積善舘　熊本 長崎書店　同 宮松孝吉　千葉 平野常吉　同 堤安五郎　同 高寺淸兵衛　同 根本紋二郎　同 吉田德兵衛　同 東定藏　同 多田屋本店　德島 黑崎精二

西村茂澍翁序　三輪田眞佐子著（再版）

女子處世論　全

●定價　金貳拾錢
●郵稅　金四錢
●郵劵代用一割增
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化導の良績夙に女子教育社會に推重敬服せらるゝは敢て贅言を要せざるなり先に女史我が國婦女子に本分の在る所を示さんとして女子之本分の著ある本社之を世に公にするや再版三版忽ちに賣盡し五版の成るを告げたり世間高評の重き知るべきなり女史今又本書を著述し女子處世の心得を說く温厚着實を旨とし其の理義を丁寧反覆す世の婦女子たる者坐右一日も缺くべからざるの良書たり請ふ續々御注文あらんことを今左に其の目次を掲げぬ其の詳細は本書に就きて見られよ

目次

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號一九四六）　國光社

女鑑第百拾七號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定		價	廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年九月十九日印刷
同年九月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衛
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所(電話番號一九四六) 國光社

印刷所 東京國光社印刷部

〔明治二十四年六月八日內務省許可〕